

---

IS×A・T

仮面P@インフィニッ党

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ISxA・T

### 【Nコード】

N2226W

### 【作者名】

仮面P@インフィニツ党

### 【あらすじ】

もしも『IS・インフィニツト・ストラトス』の世界に『エア・トレック』が存在し、織斑一夏が『A・T使い（ライダー）』だったら？

Pixiv様でも掲載させて頂いています。

## Trick 1 (前書き)

入学初日編。

Pixiv様掲載分を多少修正します。

## Trick 1

俺が生きるこの世界には人に空を飛ぶ『翼』を与えてくれる二つの大きな力がある。

一つは『IS』インフィニット・ストラトスと言うパスワード・スーツだ。

10年前にその姿を見せた時は宇宙開発を主眼に置いたモノだったが、最初は見向きもされなかった。

だがISは『とある事件』をきっかけに『あらゆる兵器を超越した最強の力』として今や世界中で研究や開発が進んでいる。

しかし俺のISに対する興味はかなり薄かった。

その理由は三つ。

まずISは女の人にはしか使えない。つまり、男の俺には最初から縁がないモノなのだ。

次に俺には姉がいるのだが、その姉はISの第一回世界大会で優勝していたりする。

その姉からISの事について知る事を厳しく止められていたのだ。

そして第三にして最大の理由。

俺が何よりも心惹かれ、自らの意思で手を伸ばしたのが『もう一つの力』だったからだ。

この世界にISより少し前に姿を現したその力の名前は『A・T』エア・トレック

別称『自由への道具』エア・ギアと呼ばれるソレは特殊モーターを内蔵したインライン・スケート型シューズ。

その力は原付きくらいのスピードを軽く弾き出す程のモノだがA・Tの最大の魅力はそのスピードではない。

あらゆる空間を『道』にして装着したヤツに『空を飛ぶ』事を実感させてくれる事だ。

そんなエア・トレックを装着し、空へと到る為に爆走するヤツらを人は『ストームライダー暴風族』と呼んだ。

。

しかし、なんの因果か俺は先に述べた『IS』の為人材育成機関『IS学園』にいた。

「……どーしてこーなった？」

IS学園の制服を纏った俺の溜息は空へと消え、相棒のA・Tも当然答えてはくれない。

思い起こせば数ヶ月前、俺は高校受験の為に多目的ホールにいた。そこで偶然入った部屋に置かれていたISに気まぐれで触れたのが運の尽き、『世界初のISを起動させた男』として受けるつもりも無かった女の子しかいないハズのIS学園に強制的に入学決定と相成ってしまったのだ。

ふと気が付けばもうすぐ自己紹介の順番が俺に回って来る。

『教師もクラスメイトも周囲は全員女の子』な状況に内心頭を抱えている場合じゃないな。

「では次、織斑君。織斑一夏君」

「ウッス！」

副担任のちよつと幼い感じの眼鏡美人・山田真耶先生に呼ばれて席を立つ。

ちなみに俺の席は中央列の一番前。

教卓の真ん前と言う超目立つ所にあるのでさっきからクラスメイト達の視線が背中に突き刺さっている。

いや、視線に質量がなくて良かった。

「織斑一夏15才。ISの事は何も知らないから色々迷惑かけると思っけど一年間よろしくツス、押忍！」

当たり障りのない自己紹介にクラスメイト達は満足していないのだろう。

『もつと何か聞きたい』と目が言っている。

『目は口程に物を言う』って諺は本当だったんだな……まあ、確かに俺の言いたい事はこれからだったからいいけどネ。

「ちなみに趣味と特技、っつーか好きな事はA・Tエア・トレックで飛ぶ事ツス！」

俺の趣味を聞いてちよつと驚いているらしい事がクラスメイト達の表情から窺える。

「え、A・Tですか！？ それにそのバッジ……もしかして織斑君……」

制服の衿に着けた銀バッジを見つけ、俺の言いたい事を予想したらしい山田先生。

ついでに言うところの銀バッジは『エンブレム族章』と言う俺達暴風族の、チームの誇り（プライド）であり、チームそのものだ。

「ウス。一、ストームライダー暴風族ツス！」

そう言い切った瞬間、頭に頭蓋骨が粉碎されたかと思う程に強烈な衝撃が落ちてきた。

「自己紹介くらいもう少し静かに出来んのか、この空っぽ頭」エア・ヘッド

聞き覚えのある声と脳細胞が一気に消滅しそうな無双の威力に振り向くと、そこには武神がいた。

「お館様アアーツ！！！！」

「誰が戦神霸王だ」

「ぎゃふん！！」

俺の頭に再度強烈な一撃が叩き込まれた。

しまった……『お館様』違いで桃色なパラドックスの魔王様の方が良かったか？

中の人的に。

……中の人ってなんだ？

ちなみに俺は天覇絶槍な彼のあの熱さと爆走具合が好きだ。

「痛え……って、なんで千冬姉がここにいんだ？」

職業不詳のハズだった実姉・織斑千冬様に素直に疑問をぶつける俺。

しかし、返って来たのは三度目の衝撃だった。

「織斑先生と呼べ空っぽ頭。さて諸君、私が君達の担任である織斑千冬だ。君達弱冠15才を16才になるまでの一年間で鍛え抜き、

使い物になる操縦者に育つように指導する事が仕事だ。逆らってもいいが、私の言う事は聞け。いいな」

我が姉の目茶苦茶な自己紹介にクラスメイトの女の子達は困惑どころか歓喜と共にヒートアップしている。

うーむ、この娘達の将来が心配だ。

。

そんなこんなでSHRは無事終了した。

この後、入学式の日からいきなり授業があるのも国の未来を背負うエリート達の通う進学校なのだから当然だろう。

しかし『クラスメイトからの一撃を白刃取りで防ぐ』と言うワケの解らない状況は一体何なのだろうか。

「……随分面白いマネしてくれんな。どーゆーつもりか説明してくれないか、篠ノ之箒サン？」

「それはこちらのセリフだ！ 何故A・Tなどと言う不良の道具を履いている織斑一夏！」

屋上に呼び出した上で竹刀でいきなり切り掛かってきたクラスメイト・篠ノ之箒は俺の幼なじみだったりする。

コイツは幼少時に千冬姉と一緒に通っていた剣道場の師範の娘で、互いに切磋琢磨し合った仲だ。

小四の終わりに家庭の事情で箒が引越してから約六年ぶりの再会なのだ。

「A・Tは不良の道具じゃねえし！！ ってか竹刀を丸腰相手に振り回す方が不良の所業じゃないかと思うんですけど!？」

「貴様自分の事を柵に上げて私を不良呼ばわりするか！ あまつさえ臆面もなく『自分は暴風族だ』などと……何故そこまで腐った！」

「別に腐ってないっつもの！」

箒がこんな風にお冠なものには理由がある。

A・Tは壁や手摺り、鉄柵から『街』と言う名の空間全てを『道』として疾走し、自分の『走りの記憶』を『傷』にして残す。

それがライダーの誇りにもなるのだが一般人からしてみればそれは『器物破損』でしかないのも事実だ。

それ以外にライダー中にはA・Tの力を悪用する輩もいて、犯罪の増加が社会問題になっている。

それと『暴風族』にはチーム同士の抗争がある。

その中で最悪の場合、死亡する事もあり、それらを取り締まりの為に『暴飛靴新法』と言う条例や、それに伴い設立された『マル風Gメン』なる警察組織まで存在する。

A・Tのそんな負の一面しか知らない箒のような人間は先の解釈しかない。

「テメエは一昔前の『バイクは不良の乗り物』とか言ってるお婆あちゃんか！」

箒のような意見の人間ヤツラに対する個人的な解釈は俺的にそんな感じだ。

基本的に俺やチームの仲間を含めてライダー達の多くはA・Tで『飛ぶ』事や、誰かの『技』トリックに魅せられた感動から自分の、自分だけの『空に到る道』を極めるべく街を疾駆するヤツの方が多い。

それにA・Tは世界的プロスポーツにもなってるし、特撮なんかにも使用されていたりもする程にシェアがあっったりするのだ。

更にA・Tは老若男女問わずユーザーがいて、日本だけでなく世界中で様々な技術応用が研究されたりもしているので一概に『不良の道具』なんかでは決してない。

「似たようなモノだろう！ それに誰がおばあちゃんだ！！」

「全然違うわ！ MAMURASAKI SPORTSとかでパーツ売ってんの見たトキとかNFAぐれー知ってんだろ！！」

NFAってのは『NationalFootballLeague / ナショナルフットエアリーグ』の略で、A・Tのプロリーグ。アメフトに似た、ISに次ぐ世界的に人気のスポーツだ。

「知らんわ、そんなモノ！ それよりも貴様のA・Tを出せ、そんな物は捨ててやる！！」

「つぎけんな！ 寝言は寝て言え、この馬尻尾頭！！」

「黙れ、空っぽ頭！！」

「空頭言っつな、コンチクショー！！」

六年ぶりの幼なじみとの再会ケンカは休み時間が終わっている事にも気が付かぬ程に熱く盛り上がり、俺達の頭に千冬姉の出席簿アタックが叩き込まれるまで収まる事はなかったのだった。

## Trick 1 (後書き)

戦神霸王と天覇絶槍な人達のPSPの新作、結構楽しいです

## Trick 2 (前書き)

英国代表候補生登場編。

ー夏はエア・トレック大好き人間です。

## Trick 2

「ちよつとよろしくて？」

二時間目も無事(?) 終了した後の休み時間、俺は金髪ロールのお嬢様風な外人さんに話しかけられた。

ちなみにこのIS学園は世界中から生徒が集まる為に外人さんも多く、このクラスの生徒も約半数が外人さんだったりする。

俺、日本語しか話せねーけど大丈夫か？

「……誰だっけ？」

思い切りずっこける外人さん。入学初日の数時間しか経過していない状況で名前と顔をすぐに覚えられるヤツなんているのかな？

だからこの人の名前を覚えてなくてもしょうがないよな？

「あ、貴方自己紹介を聞いてませんでしたの!？」

「ワリイ、ワリイ。で、アンタ誰？ 俺とA・T談議でもしに来てくれたのか？」

「違います!」

「チツ」

「まあ、なんですその態度!？ この私に話しかけられるだけでも光栄なのでから、それ相応の態度と言う物があるのではないかしら?」

「……」

なんか、めんどくせーのに絡まれたよコンチクショー。

今の世の中は完全に『女尊男卑』の風潮に染まっている。理由は

当然ISの存在だ。

ISは世界最高戦力の座に君臨し、他の軍事兵器は全て鉄屑と化した。『男と女性が戦争したら男陣営は三時間で制圧される』とも言われている程にだ。

そうなると『ISは女性にしか扱えない』と言う絶対条件が『女性』『偉い』及び『女性>男』と言う等式を成り立たせ、『男』『奴隷』または『労働力』なんて事がまかり通る世界になってしまった。

故に街ですれ違っただけの見ず知らずの女性に男がパシラされている光景が珍しくない。

目の前のこの外人さんもそんな風潮に染まった『今時の女子』だった。

正直こーゆーヤツ苦手なんだよ。

「私を知らない？ イギリス代表候補生にして入試首席のこのセシリア・オルコットを！？」

「あー、そーいやそんな名前だったな」

代表候補生つてのは俺的解釈ならオリンピック候補生のIS版みたいなヤツだ。

でもよほどの情報通でもなけりやそんな事を知ってる方が不思議じゃね？

「幕と言い、このオルコットと言い……あれかね？ 今日の俺は女難の相でも出てんのかね？」

「で、そのエリート様が何か御用でしょうか？」

「そう、エリートなのですわ！ 本来なら私のような選ばれた人間とはクラスを同じくすることだけでも奇跡……幸運なのよ。その現実をもう少し理解して頂ける？」

人差し指を俺に - 鼻に着きそーな距離で - 突き付けるオルコット。

人を指差してんじゃねーよ。ついでに自分に酔ってねーでさつさと用件言えよ、この金髪トルネード。

「大体、初日から授業に遅れたりする上にISの事を何も知らない貴方がよくこの学園に入れましたわね？ ……唯一男でISを操縦できると聞いてましたから少しは知的さを感じさせるかと思っていましたけど……期待ハズレですわね」

「ハッ、こちらISに関する知識なら小学生並しかねえぞ。恐れ入ったかコラ」

「何を自慢気に言ってるんですか貴方は！？ まあ、私は優秀ですから貴方のような人間にも優しくしてあげますわよ？」

……コイツの態度が優しさなら俺のセカンド幼なじみは天使、いやそれすら超えて慈愛の女神だな。

そーいや元気かな、アイツ……後で電話してみるか。

「ISの事で解らない事があれば、泣いて頼むなら教えて差し上げてもよくなってよ？ 何せ私は入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

「へえー、入試ん時の教官になら俺も勝ったぞ？」

「は？」

実際には突っ込んで来た教官を避けたら壁に激突、そのまま気絶しただけなのだが。

「わ、私だけ。と聞いてましたが？」

「俺だつて詳しくは知らねえよ、女子では〜とかつてオチじゃねーの？」

丁度その時三時間目開始の本鈴が鳴り、オルコットとの話にもオ

チがついた。

「また後で来ますわ！ 逃げない事ね！ よくって!？」

そう叫んでオルコットは自席へと戻って行った。

うん、別に来なくていいよ。

。

三時間目の授業は結構重要な事らしく千冬姉が教壇に立ち、山田先生までノートを手に持っていた。

「さて、授業の前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決める」

クラス代表。簡単に言えば学級委員長みたいなモノで、そのクラス代表が出る対抗戦とは各クラスの実力推移を測るモノらしい。

千冬姉の説明をなんとか俺が理解した所でクラスメイトの一人が手を挙げた。

「はい！ 織斑君を推薦します!!」

「は？」

「私もそれがいいと思います!」

「って俺かよ!？」

「他にはいないか？ いないのなら無投票当選だぞ？」

突然の推挙に戸惑う俺をよそに淡々と事を進める千冬姉。

正直、俺としてはかなり微妙だ。だってメンドク……ゲフンゲフ

ン、A・Tの練習時間が減る。

物心ついた頃から学校、中学からはそれにバイト以外の時間はずっと仲間達とA・Tの練習に充てて来た俺としては戴けない。

しかしIS学園「ココ」にいる以上ISの技量を高めないといけないワケだ。

しかもクラス代表になれば実戦に事欠かないらしく、生来『身体で覚える』タイプの俺としてはかなり助かる……かもしれない。

そんな事を考えていた俺の思考をこれまた突然甲高い声が遮った。

「待ってください！ 納得がいきませんわ!!」

机を思い切り叩いて立ち上がったのは先刻のオルコットだった。

「そのような選出は認められません！ 男がクラス代表なんていい恥晒しですわ！ 私に、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか!??」

そこから始まるオルコットのバリゾーg……じゃなくて罵利雑言の嵐。

人を猿、日本を島国呼ばわりしたり、文化を後進的と批判したり……とにかく言いたい放題だった。

普通なら怒るのかもしれないが中学の頃『A・Tをやっている』  
と言うだけで不良扱いされ、教師達から罵倒されていた俺には蛙の面に水ってヤツだ。言いたいヤツには好き勝手言わせとけばいいのだ。

だがヒートアップしたオルコットの次の一言は俺の導火線に火を

着けた。

「大体、A・Tなんて玩具に現を抜かし、暴風族などと言う不良集団……犯罪者予備軍を堂々と名乗る輩にクラス代表など任せる事がオカシイ事が何故わかりませんか!?」  
「オイ、今何だった?」

。

教室内の空気が変わった。  
セシリア・オルコットは確かにそれを感じた。

「今『A・Tなんかオモチャ』『ライダーは犯罪者予備軍』……そう言ったのかつて聞いてんだよ。答える」

空気を変えたのは確実に自分に視線をぶつけるIS学園唯一の男子生徒。

つい先程まで何を言ってもどこ吹く風とでも言うような態度だったその男は今や抜き放たれた刀のような雰囲気を持っている。  
だが、そんなモノに飲まれるセシリアではなかった。

「そうですが何か間違ってますの!?!」

「俺をバカにすんのは別にいいさ……けどな自分だってISの経験積まなきゃいけないのにそれを譲った上に、同じ学校のヤツラと馴染めるようにって気い使ってくれたクラスメイトや知りもしない他のライダーを罵倒したりするのがイギリスの礼儀なのかよ?」

「貴方私の祖国を侮辱しますの!?!」

「先に人とA・Tの事侮辱したのはテメエだろ!」

「決闘ですわ!」

「上等だ!」

「いい度胸ですわね。その代わり、わざと負けたりしたら私の奴隷にしますわ！」

「ハッ、ナメんな。真剣勝負で手え抜く程腐ってねえっつもの！」

そんなこんなで話が着いた所を千冬が『勝負は一週間後の月曜日、第三アリーナで行う』と締めくくり、ようやく三時間目の授業が始されるのだった。

## Trick 2 (後書き)

ウチの一夏君は他人の好意を誇大解釈する癖があります。

### Trick 3 (前書き)

メインヒロイんなセカンド幼なじみ登場編。

鈴は一夏の嫁で、《拙作メインヒロイン2》は一夏の夫。異論は聞  
くだけです。

### Trick 3

オルコットと戦う事が決まったその後は特に何事もなく授業を終えた。

話は変わるが俺がISを使える事は世界的ニュースになったらしく、教員から生徒まで学園関係者は全員俺の事を知っているらしい。朝からずつと廊下に他のクラスの生徒だけでなく、二、三年の上級生まで集まって人だかりが出来ているのはその為だろう。

俺としてはできるなら『ISを使える男』としてじゃなく『A・T使い(ライダー)』として注目を浴びたいのが正直な話だったりするのだが……ここじゃ難しいかもしれない。

そう言えば先の休み時間、オルコットに絡まれている時に思い出したセカンド幼なじみ。

アイツは俺がA・Tを始める事を認めてくれた初めての相手だった。

携帯を開くと待受画面にA・T仲間とチームを結成した時に撮った写真が表示される。

その中で俺と肩を組んで笑ってる二人。

一人は中学になってから知り合った友人の五反田弾で、その逆サイドにいるツインテールが印象的な少し小柄な女の子。

写真のではない、本物のソイツの笑顔に会いたくなった。

アイツは小五の頃に転校して来て、中二の終わりに家庭の事情で引越して行った。

確か引越し先は母方の実家の中国だったか？  
そこでISの適性が高かったとかでISの勉強をしてるとか言っ  
てたっけ……。

「今頃何してんのかな……アイツ」

「アイツって誰の事？」

「俺の二人目の幼なじみだよ。よく一緒にA・Tで走ったりしてた  
ヤツでさ、今は中国でISの勉強してるらしいんだ」

「……気になるの？ その娘の事」

「まあな。アイツとは大事な約束もあるし……ん？」

今、俺は誰と喋ってた？

微妙に聞き覚えがある声なような……。

「ふ、ふーん。そーなんだ……帰って来た甲斐があったかもね」

俺の前から聞こえるその声は確かに覚えがある。

ソイツと初めて会ってから五年間、ほぼ毎日聞いていた声だ。

「……鈴？」

「うん。ただいま……一夏」

携帯から視線をずらした先に会いたかったセカンド幼なじみ、鳳<sup>ファ</sup>  
鈴音<sup>リンイン</sup>の笑顔がそこにあった。

「けど……」

「へぐっ!？」

鈴の声質が変化したと思いきや背後に一瞬で移動した上にチョー  
クスリーパーホールドをキめて来た。

笑顔なのに額に青筋が浮き上がってたのは見間違いじゃなかったか。

「いくら別のクラスだからって会いにすら来ないってのはどーゆー見かしら〜!?」

「ぐほっ!? り、鈴! ……ちょ……マジ入っ……」

鈴の細い腕は上手く俺の首を絞めあげる。

俺は苦しさからその腕に(多分)ダメージを与えない程度の強さでタップするが絞める力は緩む兆しすら見えない。

「それだけならともかく何女の子に囲まれて鼻の下伸ばしてんのかな! それに誰よ、あの黒髪女!? 黙ってないでキツチリ説明しなさいよね!」

黒髪女ってのは多分筈の事だろう。

しかし、俺はいつ鼻の下なんか伸ばしたんだ?

それよりも今最も重要な事がある。

それを伝えるのが先決だ。

「……鈴、話を……」

「何よ、変な言い訳で私が納得すると思わない事ね!」

「ち、違……」

「じゃあ、何よ!」

「オマ……胸……やわっこいのが当たって……」

チヨークスリーパーホールドとは背後から腕で相手の首を絞める技だ。

それを見たり、かけられたりされた事があるヤツなら解るだろう。

そう、さつきから鈴の（俺好みサイズの）ポニョポニョしたのが俺の背中に当たっているのだ。

正直スリーパーをかけられていなければずっと堪能していたい位キモチイイ。

だが、大分息苦しくもなつて来たので断腸の思いでその事実を伝える事にした。

「はあ！？ そんなワケの……」

最初は抜け出す為の俺の嘘と判断していた鈴はふと自分の状態を客観視しているようだ。

そして……気付いたらしく、慌ててスリーパーを解いて離れる。  
ちよつと、いや……かなり残念。

「……っ！」

「つくはっ！……ゲホッ……ハアハア……あー、死ぬかと思ったぞ。ちよつとは手加減しろよ……な？」

ようやく解放された俺の視界には片手は胸を隠すように抑え、そしてに片手の拳からは某東照権現の特殊技発動時並の波動を放っている鈴の姿。

さつきまでの笑顔は消え、俺を射殺さん程に睨むその涙目と羞恥に赤く染まった表情は何故かそるものがあつたが今はそれ所じゃない。

「……一夏」

「な、なんだ？」

「遺言は言わせない。私も……聞けなかったから」

「凶王！？　じゃなくって、落ち着け鈴！　言わせなきゃ遺言なんざ聞け……」

「この……変態大人ヘンタイ大人ツ！！」

「それキャラが違、くぎゅううううううっ！？」

鈴のその鉄拳は『サイクロプス・ハンマー』の異名を持つライダーのパンチを軽く越えていた気がした。

。

「ほら一夏、さっさと帰るわよ！」

放課後の教室で鈴から帰宅のお誘い。

一年ぶりだがかなり久々な感じだ。

「ま、途中までだけだな」

「え、なんでよ？」

不思議そうな顔で首を傾げる鈴。

「俺は来週までは自宅からの通学なんだよ。個室も用意出来るまで時間かかるらしくてな」

設備とかも女子用のしかないだろうし、何より年頃の男女が一緒の部屋ってのはマズイだろう。

「そう言えばそうよね……でも……」

なぜか急に言い淀む鈴。顔まで赤くしているが何を考え込んでるんだ？

「でも？」

「な、なんでもない！ さっさと帰るわよ！」

「お、おう」

良かった。

《私は相部屋でも構わないけど……》

なんて言われてもどうしたらいいかわかんねーし。

「つーか話は変わるけど、『男子三日会わざば刮目して見よ』って良く言うけど女の子も絶対そうだろう。

なあ呂蒙サン。

あの後一緒に昼飯食ったりしたけど鈴の何気ない仕草とかに何度も目を奪われた。

それだけじゃなくて、

《コイツこんなに可愛かったか？》

と、この数時間で何回思った事か。

「つーか今も目え奪われてるし、思ってる。

昔から鈴は可愛かったけど今はもっと……。

「……一夏、もう……一夏ってば！」

「つとと……ワリイな、なんだ？」

「なんだ？ じゃないわよ、何人の顔じっと見てんのよ？」

「な、なんでもねーよ」

チクシヨー。

なんでこんな心臓がバクバク言ってんだよ、なんか顔も熱いし…  
ホント、ワケわかんねーっつの。

「あ、織斑君、まだ教室にいたんですね。良かったです」

「山田先生？」

帰ろうとした所に現れた山田先生。

先生の話ではどうやら俺は政府からの指示で今日から学生寮に入る事になったらしく、まさに寝耳に水な話だった。

「そーなんすか、なら荷物取りに帰らねーと」

「それなら私が用意しておいた、有り難く思え」

「ち、千冬さん!？」

「織斑先生と呼べ」

山田先生の後ろから現れた千冬姉。

今朝もいきなり現れたけど、この姉は忍者かなんかなのか？

ちなみに鈴も千冬姉がここの教師だと知らなかったらしく、いきなり現れた事も含めて驚いている。

「まあ、着替えと携帯の充電器だけあれば十分だろう」

「ウス! あざっす!」

「礼ぐらいちゃんと言えバカ者」

「痛でえっ!？」

普通に頭を下げて礼を言ったはずなのに千冬姉からゲンコツを頂いてしまった。

何故だ？

つてか、千冬姉つてばもしかなくても俺の部屋を勝手にいじく  
つたつて事か？

いや、小遣い（バイト代）は殆どA・Tに注ぎ込んでるから疚し  
いモノとかはないから別にいいけど。

ちなみにA・Tの整備用工具やある程度の交換用パーツはA・T  
を収納するバッグに入れていつも持ち歩いてたりするので無問題だ  
ったりする。

山田先生から食堂の利用時間とか大まかな説明を聞いた後、千冬  
姉達と別れた俺と鈴は寮へと向かう事にした。

そこでまたとんでもなく面倒な事があるとも知らずに……。

Trick 3 (後書き)

ウチの一夏君は美乳フェチです。

## Trick 4 (前書き)

入寮編。

Trick 2の後書きで触れた一夏の癖が発揮されます。

## Trick 4

「山田先生に貰ったメモの通りならここだな」

IS学園学生寮の1025号室、俺が三年間世話になる(である)部屋に入るべく鍵を差し込むが手応えがなかった。

「おろ？ 鍵開いてら」

「別にいいじゃない、さっさと入りましょ？」

「だな」

鍵が開いていた事を不思議に思いながらも部屋に入る俺と鈴。

一応言っとくけど、

『一年ぶりに再会したから折角なので部屋で寛ぎながら互いの話で  
もしよう』

となっただけなので鈴を部屋に連れ込んで変なコトをするつもり  
は決してない。

ないったらない。

「おお！ スゲエ、高級ホテルみたいだ！！」

「入った事あるの？」

「うんにゃ、ねーけど」

「……そうでしょうね」

「ってかなんだコレ！？ スツゲエふかふかだ！」

「全く……一夏ってばホントお子ちゃまね」

部屋の豪華さについてはしゃいでベッドにダイブしてしまう俺に『しょうがないなあ』と苦笑しながら鈴もベッドの端に腰掛けた。

「あー……寝心地いーぞ、このベッド」

「ホント、さすが国立ね」

「だなー」

つい羽毛布団の魔力で気の抜けた返事になってしまいが鈴の言葉には同意だ。

「誰かいるのか？」

疲労と布団の魔力により誘発していた眠気は不意に響いた第三者の声に吹き飛ばされた。

「ああ、同室になった者か。一年間よろしく」

部屋の奥にあるドアが開くとそこから誰かが出て来る気配。

……やな予感がするのは気のせいだと思いたいのだが……。

「こんな格好ですまないな、シャワーを使っていた。私は篠ノの…

…

「……ほづ……きっ」

やな予感ほどの中ずるとはよく言ったモノだ。

気配の正体は今日再会したファースト幼なじみの篠ノ之箒（風呂上がりVer）でした。

「いつまで見てんの、この……ド変態ッ！」

「とかちっ!?!」

突然の事に完全に固まっていた俺は本日二度目の鉄拳制裁を頂戴した。

。

一先ず胴着に身を包んだ箒に射殺さんばかりに睨みつけられながらの質疑応答。

『山田先生からの、と言うか政府からの指示でこの部屋に割り当てられた』と正直に答えた。

だが、結果は火に油を注いだだけだった。

「男女七才にして同衾せず！ 常識だ！」

「いつの時代の常識よソレ？ ついでに言っとくけど部屋割を決めたのは先生か寮長だろうし、一夏の意思じゃないわ」

「ん？ オイ一夏！ 誰だ、この女は！？」

激昂する箒にツツコミを入れ、俺には助け舟を出してくれたのは鈴だった。

紹介するには丁度いいタイミングだな。

「ああ、コイツは鳳鈴音。箒が転校した後に知り合ったんだ」

ちなみにA・Tを始めたのもこの頃で、理解と興味を持ってくれた鈴と一緒に走り回ったのはいい思い出だ。

「で、こっちが篠ノ之箒。普通ってた剣道場の師範の娘で鈴と会う前の幼なじみだよ」

「ふーん、この子が……」

二人の幼なじみに互いを紹介する。  
ちよつと珍しい状況なんじゃないか？

「篠ノ之箒だ。よろしくな」

「こつちこそ、これからよろしくね」

……今二人の背後の技影シヤドウが火花を散らしたような……。  
いや、鈴はともかく箒はA・T使い（ライダー）じゃないし……  
笑顔がなんか恐いのも気のせいだろう……多分。

「あ、あー……そうだ箒。そう言やオマエ剣道の大会で優勝したんだってな、おめでとさん」

「……なんでそんな事を知ってる？」

「新聞に載ってたからな、中坊にもなりや新聞位読むだろ。ついでに言つと今朝教室に入った時すぐに箒がいるって判ったぞ、髪型が昔と同じだしな」

箒は長い黒髪を一本に纏めたポニーテールと白いリボンが特に印象的だった。

「……よく覚えているものだな」

「幼なじみだからな、そりゃ覚えてるだろ」

そう言ったら思いっきり睨まれた。  
何故だ？

「ね、ねえ一夏！」

「あん？ どつたの？」

「わ、私との約束も……覚えてる……よね？」

慌てるように話に入って来るから何かと思いきや。

突然小学生位の時に交わした約束の事を聞いてくるとどこか不安そうな鈴。

フツ、千冬姉に『空っぽ頭』<sup>エアヘッド</sup>と呼ばれているが『約束は忘れない事』がモットーの俺にそれは愚問と言っモノだぜ。

「ああ、『毎日鈴の作った酢豚を食べさせてくれる』ってヤツだろ？」

「な!？」

「……覚えてくれたんだ」

鈴はそう言っ嬉しそうに笑っくれた事にまた心臓が大きく跳ねた。

『笑ってる女の子はそれだけで奇跡』

こんな女尊男卑の世の中で特に酷い扱い(自業自得な部分は多々あるが)をされてるあの人言っ言葉俺は今漸く理解出来たような気がした。

「い、いやー……俺っば、その約束を『鈴が俺の所に嫁に来る』とっかっ深読みしちまっば」

「「よ、嫁!？」」

「そーなんだよー、我ながらとんだマセガキだよなー」

まあ、それもあっ忘れないでいられるんだけど、これは黙っついでいよう。

「笑っちまっよなー……って、あの……鈴? 篝?」

「……」  
「……」

なぜか急に黙り込んでしまふ二人。  
なんか悪い事言つたかな、俺。

。

数分の沈黙の後、先に口を開いたのは鈴だった。

「……篠ノ之さん、だっけ？」

「あ、ああ。なんだ？」

ハツとして身構える筈に対して鈴の口から出たのはとんでもない要求だった。

「部屋替わって」

「……は？」

「いやね、篠ノ之さんは男と同室なんて嫌なんでしょう？ その辺

アタシは平気だし、替わってあげようかと思って」

「べ、別に嫌とは言つてない！ それに……」

「一夏！ 一夏もアタシと一緒にがいいよね？」

「え？ あ……」

「ふざけるな！」

話し掛けておきながら自分の言葉を遮り、今度は俺と話し始める鈴の態度に怒りを覚えたらしい筈。

荒げ始めた声から察しなくても機嫌が悪くなって来ている。

「だって約束通りご飯作ってあげなきゃだもんね」

「さつさと自分の部屋に戻れ！」

「ねえ、さつそくだけど今夜は何が食べたい？」

箒が激昂するのもお構い無しに楽しげに、かつ一方的に話を進める鈴。

ちなみに俺はまだ一言も発してなかったりする。

まずい。

箒が竹刀を手に取ったぞ！？

「ええい、無視するな！ こうなったら力づくで！！」

「え？」

とつとつ堪忍袋の尾が切れた箒は怒りのままに切り掛かる。

くそつ、間に合うか！？

。

炸裂音が室内に響いた。

「な！？」

「……危機一髪、つてか？ 鈴、大丈夫か？」

「う、うん……」

間一髪。一夏が鈴を抱き寄せ、竹刀を蹴り止める事成功し、箒の一撃が鈴に届く事はなかった。

「こら、箒。いくらなんでも生身の人間に竹刀を振り回すヤツがあるか！ 危ないだろ！」

「う……」

一夏に正論を説かれた篤はバツが悪そうに顔を背ける。

「……ふう……鈴も篤もこの部屋がいいなら二人ともこの部屋に入ればいいだろ」

「……は？」

突拍子もない事を言い出した一夏に思わず聞き返してしまう篤。

「だから、三人でルームシェアつてのをすればいいんじゃないか？  
ベッドは篤と鈴が使えばいいよ。俺はどうせ一月もしたら個室に  
移動する予定だし、ソファァで寝るからさ。だからオマエら少しは  
仲良くしろよ？」

「う、うむ……」

怒りに任せて自制心を無くした為に反論出来ない篤は渋々だが納得せざるを得なかった。

「ま、三人で仲良くやるーぜ！ 鈴もそれでいいだろ？」

「……」

「……鈴？」

返事がない事に一夏は首を傾げる。

ちなみに篤の一撃から守る為に抱き締められる格好となり、そのまま一夏の腕の中に鈴はいる。

「あれ、鈴？」

「……キユウ」

「……なんだよ、寝ちまってら」

「いや一夏、それは寝ていると言つより気絶しているのではないか？」

正しくは『ときめいて死んでいる』『もとい、』ときめき過ぎて気絶している』だ。

箒は鈴は確実に自分と同じく一夏に恋い焦がれていると確信した。そんな鈴が一夏に守られ、しかも抱き締められたりすれば気絶するのも当然だろう。

一方、一夏は鈴を片方のベッドに寝かせるとドアの方へと歩き出した。

「一夏、どこへ行くのだ？」

「ん、ああ。鈴寝ちまつたら？ 食いつぱぐれたら可哀相だし、夕飯取りに行つて来んだよ。ちょっと鈴の事頼む。……あ、ちゃんと箒の分も貰つて来るから安心しろな」

「え！？ あ、オイ一夏、待つ……」

箒の制止も聞かずに一夏は部屋を出て行ってしまった。

「えへへ……いちか」

「……」

鈴の嬉しそうな寝顔と寝言にため息を吐く。

初恋の相手と同じ部屋なんて嬉しいハズなのにどこか腑に落ちない箒だった。

## Trick 4 (後書き)

ウチの一夏君はかなりゴーイングマイウェイです。暴風族だし。

## Trick 5 (前書き)

朝ご飯編。

推薦した人を勝手に捏造してます。

## Trick 5

「昨日も思ったけど美味しいわね、ここの料理」

「おお、学生寮の食堂ってレベルじゃねーぞ」

「……」

翌朝、俺達三人は仲良く(?)朝ご飯を食べていた。

メニユーは三人揃ってサンバルカ……じゃなくて朝食セットAだ。

それにしても一晩経ってもやっぱり落ち着かないのは周囲の女子の視線があるからだろうか？

今も

『彼が噂の男子だって』

とか、

『千冬お姉様の弟らしいわよ』

とか興味津々らしい女生徒の皆さん。

俺は珍獣でもUMAでもない、普通のA・T使い(ライダー)だ  
つての。

お、この焼き鮭ウマイ。

「おりむー、お隣いーい？」

間延びした喋り方に振り向くとそこにはクラスメイトののほほんさん(本名は布仏本音さん)+女生徒二名がいた。

ちなみにその二人は俺をクラス代表に推した人達だったりする。

「構わねーぜ、座んなよ」

「おー、ありがと、おりむー」

「ところで『おりむー』ってなんだ？」

「ん〜とね、おりむーは私が考えたおりむーのあだ名だよ」

「さよけ。ま、好きに呼んでくれ」

「わ〜い」

だがそのあだ名、氷タイプの某携帯獣を思い出すのは俺だけか？

「ところで織斑君大丈夫なの？」

「なにが？」

「あの代表候補生との決闘の話だろう。実際、どうするつもりだ？」

「あーアレね、別にそんなん問題じゃねーよ。A・Tとライダーをバカにした事のオトシマエはキッチリ付けて貰うだけよ」

それにあのまま言わせといたら俺が推されたのに対して代表候補生の自分を誰も推さない事の八つ当たりを始めたかも知れない。

そんなん見てるこつちがムカつく。

「ま、元々俺にコナかけて来やがったんだ。勝負になったのも俺を叩き潰す大義名分を手に入れたワケで、奴さんには渡りに舟ってヤツだろ」

だがそれは俺とて同じ事だ。

A・Tスキなモバカにされて黙つてられる程、俺は利口で紳士な大人じゃない。  
ない。

真っ向から打ち砕かせて貰う。

「ねえ、話が見えないんだけど」

隣にいた鈴が話に入って来る。

なんで若干機嫌が悪くなってるんだ？

「え？ えつと……」

『誰？』と言った表情のクラスメイトに鈴の事を紹介しておこう。隣のクラスなら一緒に授業を受ける事もあるだろうし。

「ああ、コイツは俺の幼なじみの凰鈴音。中国の代表候補生で二組のクラス代表、それでもって親友以上嫁未満の関係」

「……ええ〜っ!?」「」「」

「ほえ〜」

食堂中の女子の反応としっかり聞き耳を立てていた事にこっちがビックリしたぞ、コンチクショウ。

「……残念ながら最後のは冗談デス」

またしても食堂中の女生徒が反応してズッコけた。

まあ、俺はまだ自分の事で手一杯だし、彼女とかまだ早いだろう。

「あ、朝から変な冗談言ってるじゃないわよ！」

「みんごすっ!?!」

いつも通り俺をド突く鈴の鉄拳制裁。

けど今のはいつもより軽く、表情もどこか嬉しそうな感じだったのは何故だ？

それにしても本当に残念な事に鈴はクラスが違うのだ。

一緒にクラスなら楽しそうだったのに……誰だクラス編成したやつ、会ったら文句言ってる。

「イテテ……まあ簡単に言うといギリスの代表候補生とクラス代表を賭けてケンカする事になった」

「はあ、なんでよ？」

俺はオルコットとのやり取りを鈴に説明した。

「……納得。アンタってホントA・Tバカよね」

「よせよ。そんなにホメるな、照れるじゃねーか」

「別に褒めてないわよ、おバカ」

鈴の一言に凹んだ所に再び話し掛けて来るクラスメイト（確か谷本さん）。

「話を戻すけどいくら織斑君がISを使えるって言っても男が女より強かったのって大分昔の話だし、代表候補生は専用機まで持つてるんだよ？」

確かにこの10年で完成してしまった『女尊男卑』の世界は女性の強さを示している。

国家代表と代表候補生は国や企業から様々な支援を受けている。その最大の恩恵が自分専用のISを与えられている事だろう。

ISの心臓部・コアは世界で467個しかなく、その貴重なコアを個人に渡すなんてソイツが余程優秀でない限りありえない。

そう考えると俺とオルコットのレベルがどれだけ違うのか嫌でも解ってくる。

「それに代表候補生ともなればISの搭乗時間は300時間は超えてるよ？」

「そうね、ISは稼働時間がモノを言う。一夏は入試の時少し乗っただけだからざっと20分位？」

谷本さんは不安げな表情を浮かべ、鈴は勉強して得た知識を情報として提示する。

「大体そんなモンだろ……けど俺は負けるつもりはねーよ、こっちは小坊ん時からA・Tで走りまくってたんだ」

300時間？

んなモン小五の夏休み中に消化したわ！

ISの基礎なんかは鈴や箒に教えて貰えばなんとかなるだろう。

「え、A・TとISは全然違うと思うよ？ 織斑君……」  
「全くだ！ 大体、ISを動かせるだけのオマエが勝てる相手か！？」

激昂する箒を宥めつつ、クラスメイトの言わんとする事を推測する。

「……確かに相手は格上かもな。だからハンデでも貰えって？」

「う、うん……」

「何を軟弱な！」

気まずそうに頷くクラスメイトとさらに激昂する箒。

確かにオルコットと俺と比べればISに関する俺の実力はおそろく最下位。<sup>レベル</sup>

A・Tでの戦<sup>バトル</sup>、『パーツ・ウオウ』で言えばFクラス。  
月と鼈<sup>スッポン</sup>もいい所だろう。

『パーツ・ウオウ』でも『Fクラスのライダーが上位クラスのライダーに勝った確率は1%』と言われている。

「まあ、99%負けが決まっているような勝負は避けるかハンデを貰うのがお利口さんかもな」

だがそれでいいのか？

「そうだよ、今からでも……」

「けどな……」

「え？」

いいワケねえだろ。

「このケンカは織斑<sup>オレ</sup>一夏個人の意地だけじゃない……一、ライダーとしての誇り（プライド）が賭かってんだよ。その勝負にハンデ貰って戦うなんざ死んでもゴメンだね」

「何をバカな事を……勝手にしろ。私は先に行くぞ」

「おー、また後でなー」

A・T嫌いな筈はやっぱり俺がライダーである事が気に食わないのだろう。

席を立つとそのまま食堂を出て行った。

「でも……ま、それでこそ一夏よね。よし、私がISについて教えてあげる」

「マジか!?! サンキュー鈴! オマエがいりゃ千人力だぜ!?!」

「桁が一個足りないわよ。早速今日の放課後からね」  
「押忍！ よろしく頼むぜ師匠！！」

話が纏った所でのほほんさん達も交えてご飯の続きに入った。

暫くすると食堂内に手を叩く音が響いた。

どうやら寮長さんが生徒達を急かしているらしい。

しかしまたしても聞き覚えのある声なような気が……。

「いつまで食べている！ 食事は迅速に効率よく取れ！ 遅刻したらグラウンド十周させるぞ！」

寮長はなんと千冬姉だった。

余り家に帰って来なかった理由はこれが。

ちなみにグラウンドは一周五キロある。

……冗談じゃねえ。

。

学生寮から校舎までの通学路を俺と鈴は走っていた。

無論、A・Tでだ。

「それにしても鈴とこーして登校すんのも一年ぶりだな！」

「そうね……って、昨日の帰り道も似たような話したじゃないのよ」

「バレたか、さすがだな金田一君！」

「なーにアホな事言ってるのよ」

中学の時もこうやってバカ話しながら走っていた俺達。あとは弾やカズマ、弾の妹の蘭。

今は少し離れてはいるものの、また皆で集まって楽しく走り回れるのがとても待ち遠しい俺だった。

Trick 5 (後書き)

ウチの一夏君の昨夜の夕飯は三人でラーメンでした。

## Trick 6 (前書き)

vsセシリア・前編

ちよつとやり過ぎか？

まあ二次創作だし、いいですよね？

## Trick 6

なんだかんだで一週間はあつと言つ間に過ぎ去り、オルコットとの決戦当日となった。

オルコットと決闘が決まった翌日、俺は千冬姉から学園が専用ISを用意する事を聞かされた。

勿論その後、オルコットに再び絡まれたのだが、それは割愛する。

状況が状況とは言え俺の特別待遇にクラスメイト達には羨ましがられたけど実際は体のいい実験体だと思つた。モルモット

実際ISが使える事が判つた時、マスコミと一緒にどこその研究員が『解剖させてくれ』とか寝言をおほざきになつたので『道』にしてやったけど。

まあ、それはいいのだが……肝心の機体が未だ届いていないのが問題だ。

「あゝっ！ いつになつたら来るのよー夏のISはーっ!!」

「一応、訓練機は用意したが、これでは……」

焦りと苛立ちから鈴が吠え、隣の篝もどこか落ち着きなくソワソワしている。

用意された訓練機は防御力重視で刀型の近接ブレードを装備した日本製の量産型IS『打鉄』。

性能は低くはないのだがワンオフ機相手には分が悪い。

「間に合いそうにないならシールドバリアと絶対防御のパーツぶち

剥いでA・Tで戦るか」

「無理に決まってるだろ！」

「やっぱダメか」

「当たり前だ！」

半分本気の考えに息の合ったツツコミを入れる二人。

この一週間なにかとケンカしてたのにコイツらいつの間にも仲良くなっただんだ？

そんな事を考えていた俺の耳に最近よく聞く声が届く。

「織斑君、織斑君、織斑君っ！」

俺の名を叫びながら走って来る山田先生。

転ばないか心配だ。

「来ました！ 織斑君の専用IS!!」

決戦当日、しかもギリギリになって到着した事には肝を冷やしたが世界初の男用ISと言う事で様々な調整を施したらしいので仕方ないと言えば仕方ない。

そして俺はようやく『俺専用IS』と対面した。

。

「コイツが俺の専用機ツスよね？」

「は、はい！ そのハズ……です……」

しどろもどろの山田先生が俺の質問を肯定する。

しかし、俺の専用ISを見てから何故か目が点になっている鈴達

は完全にフリーズしている。

何かあったのか？

「全く……アイツは本当に何を考えている……！」

千冬姉が怒っているけど俺に対してじゃないし、大丈夫だろう。さて、アリーナの使用時間は限られているらしいし準備するか。

ちなみに『このIS』なら『着け馴れて』いる。

。

「うし、準備完了！ じゃ、千冬姉、鈴、山田先生、行ってきまッス！」

「うむ。行って来い」

「一夏、気合い入れていきなさい！」

「頑張ってくださいね、織斑君！」

三人の声援にサムズアップで応え、俺は戦場へと走り出した。

ちなみに箒はフリーズが解けた途端怒って観客席へ行ってしまった。

なんなんだ？

。

この勝負、鈴と箒に教わった事を上手く生かせば『1%の壁』を越えられるハズだ。

もう一度この一週間の特訓を思い返す。

毎日のようにケンカする鈴と箒を仲裁したり

隙あらばA・Tを捨てようとする箒と死闘を繰り広げたり

俺専用ISの納入が遅れた上に訓練機が借りれず、『IS勝負は体力勝負』との事でひたすら走り込みで体力増強を計ったり

箒がISの開発者の篠ノ之束の妹と判明した事で盛り上がったクラスメイト達に怒鳴ってしまった事のフォローに四苦八苦したり

オルコットとそのISについて情報収集した後、鈴と戦略を考えたり

俺とオルコットの勝負の噂を聞いたらしい先輩が『ISについて教えてくれる』と言う申し出を鈴が『アタシは中国代表候補生よ』、箒が『私は篠ノ之束の妹だ』との理由で断ったり

箒が『俺の性根を叩き直す』と言って剣道勝負してボコボコにされたり……

正直、ISの基礎すら怪しいけど、ここまで来たら腹括るしかねえな。

「あら、逃げずに来ましたのね……って、貴方なんですの、その格好は!？」

「あん？ どうか変か？」

オルコットの指摘されて自分の姿を見る。

ISは装着してるし、寝癖は今朝鈴が治してくれたし、社会の窓も開いてない。

観客席の生徒さん達も俺の姿を見てざわついているけど、どこがオカシイんだ？

「貴方、ISの勝負だと言うのにISを装着せずに戦場へ来るとはどう言つ了見ですの!？」

「はあ!？ 何言つてんだよ、ちゃんと装着してるっつもの！ よく見てからモノ言えよな、テメーのお目々はカザ……もとい、飾りか!？」

ワケの解らない事をおぼざきになるオルコットに仕方ないので解り易いように指で示す。

青い鯨のメダルでも失くしたか？

「ま、まさか…… 『ソレ』 がISだとも……嘘……」

愛機のハイパーセンサーの索敵結果によつやく俺がISを装着している事を理解したらしい。

いや、確かに他のISとは形が違うから、ちょっと解りづらいかもしれないな。

《A・T型IS『白式』》

それが俺の専用IS、いや……相棒の名前だ。

ただ、名前の割に鋼色の機体なのは『色は気にするな!』 って事だろう。

「コホン、貴方に最後のチャンスをおげますわ」

そんな気更々ない癖に良く言うモノだ。

証拠にオルコットが手にしたレーザーライフル『スターライトM

k・I I I I』にエネルギーが充填されているのをハイパーセンサーが教えてくれる。

「『謝るなら許す』ってチャンスなら遠慮するぜ？ それより……」

相手も戦う気なら後は俺の『道』を示すだけだ。

「賭けるよ、誇り（エンブレム）を」

ライダー  
暴風族流の宣戦布告。

フィールド  
戦場<sup>フィールド</sup>に開戦を告げる風が吹く。

「そですか……ならば……お別れですわね！」

「ナメんなツ！！」

。

ライフルから放たれた閃光は一夏にヒットする事なく、アリーナの地面を吹き飛ばしたただけだった。

「消えた！？」

自分の狙いは正確に一夏を捉えていた。

例え回避されても初心者である一夏相手なら装甲やシールドエネルギーを多少は削れるはずだったその一撃は『完全回避』と言う形で覆された。

だが動揺するのは一瞬、すぐにセンサーで一夏を探すセシリアだがその必要はなかった。

「レディーファースト。確かに先手は譲ったぜ？」  
「なっ!?!」

セシリアの攻撃を跳躍で回避した一夏は彼女の頭上にいた。  
そして一夏の蹴りが一閃する。

「オラアッ!」  
「くっ!」

なんとか防御するセシリアだが威力までは防げずに吹き飛ばされる。

しかし即座に姿勢を制御し、臨戦態勢を取るセシリアの技量も並ではない。

ファーストコンタクトの後、再び対峙する蒼と白。

「来いよ、一流……俺の走りを止めてみる!」  
「!?!」

その時、セシリア・オルコットと試合を見ている者達は皆、一夏の背後に巨大な鳥の影を見た。

それは『技影』と呼ばれるA・T使い（ライダー）の『道』と闘志を示す幻影。

しかし、セシリアは気圧される事など誇り高き貴族にあってはならないと自分を叱咤し、己もまた闘志を示す。

「い、いいでしょう……ならば踊りなさい、私セシリア・オルコットとブルー・ティアーズの奏でる円舞曲で!」

セシリアのレーザーライフルが再び光を放った。

しかし一夏はそれを難無く回避する。

「A・Tを始めて色んなヤツと戦って来たけど銃使うヤツは初めてだな……けど白式コイツとなら！」

白式に武装はない。

しかし、白式自体が武器でもある。

確かに剣や銃は魅力的だ。

しかし、一夏は『A・T使い（ライダー）』である。

A・Tこそが力であり、最大の武器だ。

つまり『A・T型IS』である白式は一夏にとってこれ以上ない最高の武器であり、相棒だった。

「そんなISモで私とブルー・ティアーズに挑むなど……笑止ですわ！」

「ハッ、今に吠えヅラかかせてやるよ！」

一夏と白式は更に加速。アリーナの地面を滑走し、セシリアの射撃をターンや急停止を駆使して回避し続ける。

「少しはやるようですわね、ですが……行きなさい、ブルー・ティアーズ！」

「クソッ!？」

セシリアはフィン状のビット兵器『ブルー・ティアーズ』を展開し、豪雨の如き射撃を一夏に浴びせ掛ける。

「私の愛機、ブルー・ティアーズは特殊武装『ブルー・ティアーズ』

を搭載したBT兵器実戦投入一号機、貴方はどの位耐えられますか  
しら！？」

「チツ、ご高説ありがとよ……けどな！」

一夏は白式を持ってアリーナと言う空間を『道』にして疾走し、  
飛び、ISを使えるライダーとして己の持つ技を放つ。

アリーナの壁を駆け上がり、空中で旋回しながらの鉄槌の如き踵  
落としはビットの一つを粉碎し、爆散させた。

「私の『ブルー・ティアーズ』が！」

驚愕するセシリアに対し、一夏は不敵な笑みを見せる。

「……ストームライダー暴風族、ナメんなよ？」

。

Trick 6 (後書き)

ウチのー夏君はなんかファースト幼なじみに冷たい気がする。

## Trick 7 (前書き)

vsセシリア・後編

原作でセシリアの攻撃パターンを解析する辺りの一夏がカズ君っぽく感じました。

## Trick 7

「二十七分。初見でここまで耐えたのは貴方が初めてですわ」  
「へー、ソイツは光栄だ」

冷静な表情とは裏腹にセシリアは内心焦っていた。

正直、悔っていたのもある。

相手はA・Tの扱いに優れていて、専用ISがそのA・T型であったとしても代表候補たる自分と第三世代型ISである愛機の敵ではない……筈だった。

「ですが、アリーナを使用出来る時間は限られています」  
「……らしいな」

だが敵は多少被弾しているもののシールドエネルギーはほとんど削れておらず、実体ダメージは皆無。

「ですので……」

全ては織斑一夏の反応速度と白式による高速機動によって自らの計算は崩された。

「そろそろ、<sup>フィナーレ</sup>閉幕と参りましょう」

ならば次の行動はただ一つ。

「その脚、いただきますわ！」

セシリアは再びライフルのトリガーを引いた。

。

一夏はその一射を回避すると同時に『自分の死角にあつた』二つめのビットを撃破した。

「くっ、またしても……！」

「このビットは毎回オマエが命令をしないと動かない。そしてそれはかなりの集中力が必要で、命令中は他の攻撃が不可能……だろ？」

「……！」

「沈黙もまた肯定、つてな」

（ついでに言えば今みたく死角となる隙を狙つて来るのも確實。ならばそこを作つて誘導してやればいい……ビットの攻略はこんなモンか）

あとは近接しつつ格闘戦に持ち込みたい所だが、中距離射撃型とはいえ近接装備や未だ見せていない手札カードがないとは言えない。

「けど『前に出ない者に勝利の女神は微笑まない』……なら！」

意を決し、一夏は自分の間合いに捉えるべく疾駆した。

。

「凄いですね、織斑君！ A・T型とは言えISに乗ったのが二回目とは思えません……」

ビット内のリアルタイムモニターを見ながら山田真耶が感嘆の息

を漏らす。

「あのISには驚いたけど、アタシが基礎を教えたし。しかもISとA・Tが融合した専用機」

「アレなら『これぞ水を得た魚だ』と言うかもな」

誇らしげに胸を張る鈴と、その隣に立つ千冬も最初の頃よりは大方マシと言った表情である。

「へえええ……。さすがご姉弟ですねー、いいそんな諺までわかるなんて」

「ま、まあ……。あんな空っぽ頭エアヘッドでも一応私の弟だからな……」

珍しく照れた千冬をからかったが為に真耶がヘッドロックを喰らっている間に試合は大きく動いた。

。

残る二つのビットを蹴落とし、セシリアを間合いに捉えた一夏は一撃が届くまでに距離を詰めた。

(捉えた！)

その瞬間オルコットの口元に笑みが浮かんだ。

「かかりましたわ！」

「ッ！」

「お生憎様、ブルー・ティアーズは六機あつてよ！」

「やっぱりまだ手札カード隠してやがったか！」

ブルー・ティアーズのスカート状の装甲が動き、そこから二本の円筒状のモノが顔を出す。

「切り札は最後まで取って置くモノでしてよ！」

先に墜した射撃型ではない『ミサイル弾道型ブルー・ティアーズ』が一夏に向かつて飛来する。

回避も防御も間に合わない絶妙のタイミングで放たれた一撃に誰もが『やはり男が女性に、しかも代表候補を相手に勝てるワケがない』と思った。

だがセシリアは、いや試合を見ている者全てが我が目を疑った。

「…………『見えてたぜ』」

一体誰が予想するだろう？

「なっ!?!」

超高速で飛来するミサイルを鷲掴みにして止めるなど、そして…………、

「返す！」

掴んだミサイルを相手に文字通りに『叩き返す』などと。

瞬間、アリーナの空で炎の華が咲いた。

。

「キヤアアアアーツ!!!!!!?」

アリーナ内に爆音とセシリアの悲鳴が響く。

観客席の生徒や篤は勿論、鈴を始めとする代表候補生や真耶ら教師達。

果ては千冬でさえも驚きの余り目を見開くしか出来なかった。

確かにISの生体補助機能は宇宙空間での活動を前提にした上、スポーツとは言え戦闘に使用する。

その為、人のそれより遥かに優れている。

だがしかし、格闘戦の間合い、ほぼ零距离から放たれたミサイルを回避や防御ならともかく、IS戦闘に関しては素人同然の一夏が驚掴みにして止めるなど誰が予測出来ただろうか。

そしてセシリア達は更に予想外の事態に遭遇する。

。

「くっ、なんなんですよ、無茶苦茶ですわ!？」

姿勢を制御し、混乱した意識を戻すように頭を振るセシリアの耳に高周波のような金属音が届く。

見上げてみれば一夏のISが光の粒子となり分解され、再び形を成していく。

「ま、まさか……一次移行!？」ファースト・シフト 貴方、今まで初期設定の機体で戦っていましたの!？」

先程まで鋼色だった装甲は名前通り純白に染まり、全体の線が鋭さを増したソレは一夏の技影シャドウと相俟って白い刃を想起させる。

機体は真の姿、完全たる『織斑一夏専用機』となったそのISSは一夏に更なる力を提示する。

《バトル・ホイール  
戦闘用車輪『雪片・空我』》

。

『雪片』。

その名はセシリアに更なる戦慄を与える。

ISSの世界大会『モント・グロツソ』。

その初代優勝者『ブリュン・ヒルデ』こと織斑千冬とその専用ISSが振るった刀型近接特化ブレード。

最強の刀の名を継承する力を秘めた白色の煌めきは自分を切り裂く瞬間を今や遅しと待ち望んでいるかのようにすら感じさせた。

。

「俺は世界最高の姉を持ったよ」

思えば俺はずっと誰かに守られていた。

千冬姉や自らの体を『檻』にして『俺達』を守ってくれていた『超獣』の異名を持つ『あの人』。

千冬姉はその『翼』で、あな人は己が『牙』で戦ってくれた。

その背中を追い掛けるだけだった俺はようやく自分の『力』を手に入れた。

「これでようやく戦える……」

自分が進むと決めた『空』を目指す『道』。

その他の誰でもない俺だけの『道』を進む為の力たる『力』。

その『力』を『翼』でも『牙』でもない、それを超えたその先へ昇華させる。

それが出来なければ千冬姉やあの人を越えるなんて到底不可能だ。それに弟の俺が出来だつたら千冬姉の格好がつかないし、あの人の誇りを汚す事にもなる。

あんなに、むしろ世界で最高にイカしてるあの人達が俺のせいで格好つかないなんてそんな事許せるか？

「許せるワケねーだろ、そんな事……ああ……許せるワケがねえ！」

「な、何の話ですよ!？」

「俺の覚悟の話だよ！」

「何の覚悟かは知りませんが、私は貴方が敗北する覚悟と取りまします！ 御逝きなさい!!」

再装填したミサイルを放つオルコット。

しかし、『遅い』。

またしても一夏の姿が消え、同時に放ったミサイルビットが爆散する。

「オオオオオオオオッ！」

空を疾駆する一夏は獣の如き咆哮と共に蹴りを放つ。

その脚に纏った雪片がブルー・ティアーズの装甲に一夏の走りの「傷」<sup>メモリー</sup>を刻む。

しかし、そのシールドエネルギーを削り切る事は出来なかった。

「まだですわ！」

どうにか防御する事で攻撃を凌いだセシリアは反撃の機会を狙う。しかし、それは二回目の衝撃に疎外される。

「!?!」

一発目の蹴りを入れた反動とセシリアを足場にしての跳躍、更に宙返りした勢いを利用して加速する。

(遠心力で威力を増大させた二発目、ですが！)

隙の大きさを利用し、回避行動に移ろうとする。

しかしセシリアは無意識に行動を止めてしまっていた。

必殺の一撃たる技<sup>トリック</sup>を放つ一夏と、その脚に纏った「炎」に魅せられて。

蒼の騎士を穿った瞬間、<sup>アリーナ</sup>戦場内に決着を告げるブザーが鳴り響く。

『試合終了。勝者、織斑一夏』

一瞬の静寂。

そして、爆発する歓声と喝采。

「やったじゃない、一夏！ ハラショー！！！」

「あわわ！？ ふぁ、凰さん！？ おち、落ち着いて下さい〜！？」

ピット内でも鈴が真耶に抱き着いて喜んでいるのを見ながら、千冬は呆れたように溜息を吐いた。

「やれやれ……よくやったな、一夏……」

千冬の眩きは歓声に消え、誰の耳にも届く事は無かった。

## Trick 7 (後書き)

ウチの一夏君は炎系の道を走るライダーで、LVは90です。

## Trick 8 (前書き)

セシリア心境変化編(?)

気が付いたらこうなっていました。

(……おりむら……いちか)

勝負の後、私は彼に対して言い知れぬ胸の高鳴りを覚えていました。

「今まで会った事のないタイプの方ですわ……」

織斑一夏。

自分の父親を初め、今まで会ってきた中の誰とも類似しなかった男性。

母は現在の風潮が広がる前からいくつもの会社を経営する優秀で気高い、厳しくも優しい私の憧れる女性でした。

逆に父親は入り婿だった立場やISが登場してからの風潮もあり、幼心に『将来は情けない男とは結婚しない』と思わせるような人間だった。

そんな両親は私がまだ幼い頃に鉄道事故で二人一緒に亡くなった。以来、両親の遺産を狙う輩に立ち向かう為に様々な自己研鑽を積んだ。

そんな中、私は自らのIS適性が高い事を知りました。

努力の結果、代表候補生と愛機・ブルー・ティアーズの専属搭乗

者となった私は更なる研鑽を目指し、極東の地にあるISS学園に留学。

そして私はそこで理想とする男性に出会った。

自ら『ストームライダー暴風族』を名乗り、それを誇りとした唯一の男性ISS使い。

誰にも屈したり、媚びたりしない強さと自分を相手にしても動じない精神。

そして自分の『道』を貫く覚悟と強い意志を秘めたあの瞳を持つ『炎』のようなあの方……。

戦いの中。

その一撃と併に感じた彼の『情熱』は、私の中でまさしく『ストーム暴風』の如く吹き荒れた。

されどその『かせ暴風』はとても熱く、甘く、切なくも嬉しい。初めての感情の奔流に私は今、激しい戸惑いを覚えている。

「知りたいですわ……このキモチの正体と……あの方の事を……」

その眩きは誰に聞かれるでもなく、空に溶けていくのでした。

。

「と、言うワケで一年一組クラス代表は織斑一夏君に決定しました。あ、なんか一繋がりでなんかいい感じですね」

『そーですね!』

「朝のSHRはいつからグラスアン司会者のお昼の番組になったんだ!？」

決戦の翌朝、SHRを進める山田先生の発言にノリノリで答えるクラスメイト達にツッコミを入れるあの方。

「おりむー、ないすツッコミー　サー・ツッコミ伯の称号をあげましょー」

「そいつはどーも」

布仏さんからなんかよく解らない称号を与えられた彼は『貰えるなら貰つとこつ』と思つたのでしょうか？

SHRと一時間目の授業が終わると同時に私はあの方の元に向かいました。

。

「おめでとございます。クラス代表のお仕事は大変かもしれませんが頑張ってくださいね、一夏さん」

「……はい？」

勝負の結果、クラス代表に就任した俺にそんな言葉を寄越したのは昨日対戦したオルコットだった。

「……お、オルコット……さん？」

「嫌ですわ。そんな他人行儀でなく、セシリアと呼んでくださいな」

「せ、セシリア？」

「はい」

正直ワケがわからない。

昨日までは俺を『台所に出る黒いアレ』を見るみたいなお目で見たようなオルコットの態度が180°。完全に変わって満面の笑みに向け、ファーストネームで呼ばせているのだ。

正直な所、『いい気になるなー』とか『私に偶然とは言え勝ったから特別に譲って差し上げますわ』とか言われると思っていただけに驚きも五割増しだ。

どうしてこうなったのか、さっぱり解らん……

この状態を理解出来るヤツなんかいたら説明して欲しいぜ……。

。

一夏の疑問に答えるなら実在する。

しかも大量に。

と言うか彼以外の教室内にいる女生徒全員だ。

すっかり淑女らしくなったセシリアの態度や仕種は正に『恋する乙女』のソレ。

そして彼女達は思った。

(( (( あ、この娘堕ちた )) ))

恋的な意味で。

つまり一夏に恋心を抱いた事を察知したのだ。

そんな事に気付かない一夏にセシリアは昨日までの非礼を詫びる。

「A・Tやライダーの方々をよく知りもしないで罵倒するなど貴族以前に人としてあるまじき行為でした、ごめんなさい」

「いや、俺も頭に血い昇つちまっただよ。悪かったな……ま、これからは仲良くやろうぜ？」

「はい」

一夏も根に持つ人間ではないので互いに手打ちとした上で友好的に接する。

一方、友好的関係を築いたセシリアは少しでも一夏との距離を詰めるべく『計画』を始動させた。

「あ、あの、それですわね。もし、よろしければISについて教えて差し上げますけど……いかがですか？」

セシリアの計画とはこうだ。

- 一、IS初心者の一夏に自分がコーチとなる。
- 二、放課後等一緒にいる時間が増える。
- 三、心の距離が縮まり、二人の関係もその先のステップへ。
- 四、心だけでなく体も……。

と、実に都合のいい計画を立ていたセシリア。  
だが、この計画には大きな計算ミスがあるのだ。

それは『織斑一夏』をよく知る人間ならすぐに解るだろう。

「ああ、それは別にいいや」

そう、一夏の天下無双の『恋愛的好意への鈍さ』である。

一方、まさか断わられると夢にも思わなかったセシリアは石灰像のように白く固まっていた。

「な、何故ですか？」

絞り出すような声しか出せないセシリア。

彼女は一夏のまさかの返答に相当な衝撃を受けたらしい。

その様に内心ほくそ笑む一人の女生徒がいた。

(ふっ、一夏には既に私と言う師がついているのだ。すまんオールド)  
コソト)

その女生徒は篠ノ之箒。

しかし彼女もセシリアと同じ絶望を味わう事になる。

「いや俺には鈴がいるからさ」

セシリアと同じく石灰像のようになった箒は思い切り机に頭を打ち付けた。

「鈴ちゃんってこないだあの娘だよね？」

「そ。付き合ってくれつつたら二つ返事でOKくれたんだ」

『嘘おっ！？』

「のわっ！？」

のほほんさんの質問を肯定した一夏の答えにクラスが揺れた。

「今のホント!？」

「織斑君、その子に付き合ってくれって言ったの!？」

「しかもOK貰ったの!？」

鬼気迫る表情のクラスメイト達による矢継ぎ早な質問責めにさすがの一夏もつろたえる。

特Aランクチーム相手ですらこの気迫は中々味わえないだろう。

「お、おう」

一夏の返答に今度は残るクラスメイト全員が石灰像と化したのだ。  
った。

「あ、あれ？ 篝？ セシリア？ 皆どつたの？」

「おりむーただだよ、解ってないの」

「なにがだ？」

「自分で考えた方がいいよ？」

のほほんさんの言葉を理解出来ない一夏は首を傾げるだけだった。

結局、彼女達は二時間目が開始しても元に戻らず。

千冬の出席簿アタックを受けてようやく意識を取り戻した。

ちなみに千冬はすっかり一夏にも出席簿アタックを喰らわせていた。

。

「……つてな事があつたんだよ」

時間は過ぎて昼食時。

屋上で鈴の特製酢豚弁当を食べながら一夏は朝の出来事を話した。

「朝からなんか見られてると思つたら……アンタのせいかーっ!!」  
「ナノツ!!!?」

鈴はどこから取り出したのかハリセンで一夏の頭を叩いた。

「痛えよ、何すんだコンチクショー!?!」

「自分の胸に手え当てて考えなさい、アホ一夏!」

ちなみに当人はISのトレーニング的な意味で鈴に『付き合つてくれ』と言つたのだが、クラスメイト達は何故か恋愛的な意味で捕らえ、それが広まってしまったのだった。

実際の所、A・Tと言う共通の趣味や放課後のISのトレーニング。

今のように一緒に食事したりしていれば広まって噂が事実として受け取られても仕方ない事だろう。

「もお……一夏のバカあゝ……」  
「?????」

しかし、このセカンド幼なじみは満更でもないようだった。

## Trick 8 (後書き)

ウチの一夏君はお昼は鈴ちゃんといに作った弁当を交換しています。

**S p e c i a l - T r i c k (前書き)**

番外編。

今回は本編と全く関係ありません。

少し一夏君が壊れてますが全ては『夏が一夏にそつさせた』としか  
言いようがありません。

## Special - Trick

「いちか」

「よー、鈴。どったの？」

なにかいい事でもあったのか鈴は輝くような笑顔を浮かべている。

「これ、なぐんだ？」

「おお！ それは鳥メダルのツンデレ右腕も大好きなアイスキャンディーじゃん！！」

その手にはどこから取り出したのかアイスキャンディーがあった。

「一夏も食べる？」

「お、いーのか？」

「うん、いいよ」

鈴はそう言ってアイスキャンディーを持ったまま俺の口元にその先端を向けた。

「はい、口開けなさい」

「……ほわっつ？」

こ、これはもしや伝説の『あぐん、して』ではないのか！？

ちよつと気恥ずかしいが『据え膳食わぬは男の恥』だ！

え、意味が違っ？

けどそんなの関係ねえ！！

織斑一夏、男になるぜ！

「あゝ」

かぶ。

そこには小さな口でアイスキャンディーに噛み付く鈴の姿。  
うむ、和む。

「ほひ」

「……？」

鈴の真意を測りかねたまま時間が経過する。

暫くすると鈴は口内の溶けたアイスキャンディーをコクンと飲み込んだ。

「あーん、一夏が遅いから食べちゃったじゃない……もー、一夏が食べ易いようにしてあげてるのがなんでわかんないのよー？」

ふう、と頬を膨らましながら怒る鈴。

何、このカワイイ生き物。

「もう、次はちよつと食べなさいよ？」

ふむ、ようやく解った。

鳳鈴音、これが我々の『聖戦』……『ジハード』や『ラグナロク』と呼ばれるモノか！

「ねえ、一夏……」

よろしい。

「……アイス……」

ならば……、

「チューチュー、しよ?」

戦争だ!

「いいですとも!」

サムズアップと共に行動を開始する。

鈴に向かつて、跳躍。

それと同時にキャストオフ（脱衣）!

刮目せよ、これぞ伝説の技<sup>トリック</sup>!!

「ルンダーイブ!」

「きゃー」

そして、俺達は『聖戦』の先にある桃源郷に旅立つのだった……。

「もう……一夏のスケベ」

。

「……っつー夢を見たんだ」

真面目な表情の一夏に対して、鈴は呆れ100%で救急車を呼ぶ

べきかと思案している。

「……で、何を言いたいワケ？ 大胆予想つくけど、一応聞いておくわ」

一夏の手には鈴も好きなメーカーのアイスキャンディーの箱がある。

「夢の続きを やらないか？」

キメポーズと共に一本のアイスキャンディーを鈴に向ける。

「……」  
「……」

部屋の中が重い沈黙に包まれた。

。

「……」  
「……」

(……やべえ)

正直、内心俺はかなり焦っている。

(……鈴の事、ガチで怒らせたかも……)

俺の予想では九分九鈴。

じゃなくて、九分九厘……、

『何言ってるの、このドアホー!』

ってドツかれて……、

『仕方ないから一緒に食べるくらいならしてあげるわよ』

……ってなると思ったのに、まさかの沈黙。

全身から吹き出る嫌な汗が止まらない。

(よし……こーなったら!)

経路確認。

窓は鈴の背後にある為、使用不可。

ドアは俺の背後約4メートル、使用可能。

経路確保、無音方向転換成功。

鈴は未だ沈黙中。

(よし、逃走スタ……)

「一夏」

「はい!？」

(ミッション失敗! 俺、終了のお知らせ!!)

ゲームオーバー

鈴の方に向き直り、直立不動の俺は鉄拳制裁処刑か某仮面のヒーロー**ロ**ばりの蹴りと共に迫る『死』を覚悟し、固く目を閉じた。

(千冬姉、先立つ不幸を許してくれそうにないけどお許しください……！)

千冬姉ならあの世から連れ戻した上、フルボッコした後に自らの手で閻魔様の元へ速達で届けるだろう。

あの姉上だったらやりかねないからマジに怖い。

(あれ、そーいやなんでまだ生きてんだ俺？)

気付けばいつまで経っても拳も蹴りも飛んで来ない。

そんな時、鈴の少し震えた声が俺の名を呼んだ。

「あ、あの……一夏、あのね？」

目を開けた俺が見たモノは頬どころか耳まで上気させながら俺を上目使いで見つめ、羞恥と期待に瞳を潤ませる鈴だった。

「……い、一夏がどーしてもっていうなら……やってあげてもいいわよ？」

……これは夢か？

否！

夢か現かなんて関係ない！

例えこれが罫だとしても、こんな甘い罫なら掛かりましょう！

仕掛けてよ、魅せてよ、嗅がせてよ！

鈴にゃんくんかくんかぺろぺろ。

「どーしてもやりたい！ 鈴のスイーツアイス食べたい！！」

こうなりや恥も外聞も関係ねえ！

この欲望を解放してやる、アイスクャンディー好きのツンデレ右腕に『人間は欲望一つコントロール出来ない』って言われようがそんなん知らん！！

「即答！？ ま、まあ、いいけど……なんで一夏はそんなに、その……私の……ソレを食べたいの？」

何を今更、そんなの……

「鈴が好きだからに決まってるだろ！」

「○+・×÷　　っ！？」

鈴は謎の言語を発し、頭から小さな爆発音と共に蒸気が噴き出した。

脳天からつま先まで真っ赤になって、ツインテールが波打ちながら天を突き……、

「~~~~っ！ ……きゅっ……」

そのまま気絶した。

。

「……はあ……」

気絶した鈴をベッドに寝かし着けた後、俺は自室に戻って来た。

太陽は既に傾き、水平線の向こうに沈みかけている。

「ま、仕方ないよな。今まで幼なじみと思ってたヤツに急に告げたりすれば気絶の一つや二つするよな」

焦っても仕方ない。

鈴がどんな答えを俺に返すにせよ今はアイスでも食いながら待つとしよう。

「さてと最初は何の味に……」

箱を開けた俺は絶望した。

「……そーいや購買で買ってから一回も冷凍庫入れてなかった……」

アイスクャンディーは全て溶けていた。

フツ、太陽は罪なヤツだぜ……。

「ど畜生オオオオオーッ！」

むせび泣く俺の声は鯛だけが聞いていた……。

## Special-Trick (後書き)

溶けたアイスクャンデーは後でスタッフが再度凍結させて美味しく頂きました。

## Trick 9 (前書き)

クラス対抗戦・前編。

『ぶます』読み過ぎたか……。

## Trick 9

クラス代表に就任してから最初の大仕事となる来週のクラス対抗トーナメントに備え、俺は今日もISのトレーニングを熟していた。とは言っても内容は白式を使つてのA・Tの練習だが意味がないワケじゃない。

俺の相棒、白式は世界初にして唯一のA・T型ISだ。

そうなる小学生の頃からやっていたA・TのトレーニングがそのままISでの動きに繋がるのだ。

ISが搭乗時間が一種の目安となる以上、それはかなりのアドバンテージとなるらしい。

ライダーの『技』<sup>トリック</sup>とはキメる為にキメるのではない。

走りの中で技術や集中力等自分の持つ全てを『勝つ』と言う一点に凝縮した時に自然に生まれ出る必然の動き。

故にライダーの技は『見せる』のではなく『魅せる』と言うのだ。

必然の動きを自然と出せるまでに到るのは一朝一夕で出来るようになる程簡単な事じゃない。

だが、ISでもA・Tでも、それが出来るのと出来ないのではとてつもなく大きな差となるのだ。

ISとA・Tは全く別物ではあるが、こんな共通点もあったりするのをたまに見つけるのが結構楽しくなっている。

そしてまた、一つの技が昨日より上手く決まった。

「一夏、そろそろ帰りましょ？」

対抗戦に向けて別々に練習をしていた鈴が俺を呼ぶ。  
気付けば周囲に人影は殆どなく、もうすぐアリーナの閉まる時間になるようだ。

「あー、もうそんな時間か……もう少し走りたかったけど仕方ないか」

「続きは明日ね。けど夜に走りに行くってなら付き合っわよ？」

「お、いーのか？」

寮長である千冬姉に夜の外出許可を貰うのは少し骨が折れるけど、夜風の中で走るのは俺の好きな事の一つだ。

それが誰かと一緒なら一層楽しみが増すと言うものだ。

「まあ、一夏ってばアタシがいないと寂しくて泣いちゃうもんね」

「寂しがりはするけど泣きはしねーよ！」

「ホント〜？」

「ホントだっつーの！」

やっぱり鈴の隣は居心地が良いな……。

(きつと、こーゆーのを『馬が合う』って言うんだらうなー)

一緒にピットに向かって歩く鈴の笑顔を見ながらそう思った。

。

。

一夏がアタシを見て笑ってる。

「な、なによ？」

嬉しいけど気恥ずかしいからつい強気な態度で出てしまう。

「いや？ ただ昔からなんだかんた言っても鈴は俺に付き合ってくれるよなーって思ってたさ」

そんなの当然じゃない。

でもそれは一夏だからであって、他の人だったら付き合うどころかA・Tさえやってなかった。

けどその事に鈍さのレベルだけは完全に『王』の一夏が気付くなんて絶対ありえな……

「やっぱり好きなんだな」

……今何て言った？

「ふえ！？ な、ななな、何が!？」

……バレた？

「何が、って見てりゃわかるって」

アタシが小五の頃に転入して、クラスメイトにイジメられていたのを助けてくれた時から心に秘めて誰にも言っていないアタシだけの秘密が一夏にバレたの!？」

「好きなんだろ？」

そんなのダメ、だって恥ずかし過ぎるもん！

こうなったら一夏を殺してアタシもー！……

「A・Tが」

「……は？」

「だからA・Tだよ、A・T！ 夜まで付き合ってくれるなんてやつぱり鈴木もA・Tが好きなんだな！」

満面の笑みを浮かべながらA・Tの事を話したす一夏。

「……」

そうだった……、

「……まあね」

一夏は筋金入りのA・Tバカだったのをすっかり忘れてた……。

「この……空バカアああーッ！！」

「かつか！？」

アタシは一夏の頭をハリセンで思いっきりシバいてやった。

。

一夏が鈴にシバかれた日から早くも一週間が過ぎ、晴天の空の下でクラス対抗戦が開催された。

一年生の部、第一回戦は『織斑一夏VS凰鈴音』。

二人は既に愛機を展開して相対している。

「修行の成果、魅せてやるぜ！」

「いいわ、魅せてみなさい……アンタの走りを！」

互いに闘志を示す口上を述べ、一夏は銃の形にした手を向ける。

「賭けるぜ、誇り（エンブレム）を！」

試合開始を告げるブザーが鳴る。

それと同時に一夏は空を蹴って駆け出した。

「速い！」

「私と対戦した時よりも断然速いですわ！」

そのスピードに観戦している箒やセシリア達を驚かせる。

「ハッ！」

「確かに速い、けど！」

スピードの乗った蹴りではあったが鈴の愛機・甲龍の主力たる二本一対の青龍刀『双天牙月』に阻まれる。

しかし、直ぐさま次の蹴りを放ちながら一夏は吠えた。

「さすがは俺の師匠！だが勝つのは俺だ！！！」

「それはどうかしらね！」

凄まじい蹴りと斬撃の応酬の中、不敵な笑みが二人に浮かぶ。

「ふっ、ならば俺が勝つたら『ダーリン（はあと）』って呼んで貰うぜエエッ！」

一夏の叫びは鈴の動揺を狙った策略じゃない……なぜなら、目がマジだから。

「なあ！？　だ、誰が呼ぶかああーっ！」

しかし鈴は動揺するも、即座に愛機に搭載された武装を起動させる。

「ヴァいつ！？」

次の瞬間一夏は見えない衝撃にぶっ飛ばされた。

。

「なんだ今のは！？」

「『衝撃砲』ですわ」

「知っているのか、セシリア！」

セシリアは頷く事で肯定し、解説を始める。  
無論、その間も試合から目を離す事はない。

「『衝撃砲』とは空間に圧力を掛けて砲身を生成、余剰で生じた衝撃を砲弾として射出する第三世代兵器ですわ」

不可視の砲身と砲弾。

いくらISにハイパーセンサーがあるとは言えどソレを回避、または防御する事は容易ではない。

その結論に到った筈はセシリアと互いに頷き合う。  
そして……、

「鳳！ そのバカを完膚なきにまで叩きのめせ！」

「鳳さん！ その方に負ける事は同じ代表候補生として絶対許しませんわ！！」

まさに般若の形相で鈴をに声援、一夏に呪怨を送る二人。

周囲の生徒達がドン引きしている事も気付かない二人は衝撃砲を回避した一夏にブーイングを放つ。

「一夏アーツ、避けるな！ 当たれエーツ！」

「落ちてハラワタをブチまけなさい！」

その時、大きな衝撃がアリーナ全体に走った。

「な、なんだ……コイツ!？」

突然のゴーオンジャ……じゃなくて轟音と衝撃を伴って現れたのは見た事もない全身装甲型のISだった。  
フルスキン

その姿は肩と頭が一体化してる上、異常に長い腕はつま先よりも伸びている、まさに『異形』そのもの。

普通のISはプロテクターみたいに装甲を展開する。

通常、防御がシールドエネルギーで行われるからで、たまに防御特化型が物理シールドを搭載しているぐらいだ。

ちなみに俺の白式は本体であるA・Tを形成するだけで眼前の『異形』とは真逆の存在だ。

『織斑君！ 鳳さん！ 大丈夫ですか！？』

呆気にとられていた俺の意識を山田先生からの通信が呼び戻す。

「あ、はい、大丈夫ツス……じゃなくて山田先生！」  
『はひゃい！？』

「なんすか、このゼ エルもどきは！？ なんか俺ロックされてんすけど！？」

『ぜ、 ルエルもどき！？』

その『異形』のシルエットが『二回目の天変地異があつた世界』が舞台のロボット（正しくは人造人間）アニメに出て来た『主人公機に喰われた14番目の使途』に似ている。

ついでに言えば俺達のいるアリーナの遮断シールドはISと同じモノで作られている。

それをブチ破って乱入して来たその破壊力の高さもそっくりだ。

だから俺はコイツを『ゼル ルもどき』と呼称する。

そんな所属不明IS『ゼル ルもどき』にロックされている事を白式のハイパーセンサーが教えてくれている。

『それより試合は中止です！ 織斑君、鳳さんと一緒にそこから離脱してください！』

「了解です！ 一夏、聞いたわね！？」

「なん……だと？」

山田先生からの指示に俺は絶望した。

## Trick 9 (後書き)

ウチの一夏君は僕のせいで暴走気味です。

感想を貰えて狂言乱舞な僕ですが、すっげー勢いで目論みがバレ…  
…ゲフンゲフン

Trick10(前書き)

クラス対抗戦・後編。  
いつもより少し長めです。

## Trick 10

「……なんだよ、ソレ……」

山田先生からの撤退命令を聞き、俯いたままボソッと呟く一夏のただならぬ雰囲気には鈴は恐々としながら声をかけた。

「い、一夏？」

「……この試合が終わったら鈴が『ダーリン（はあと）』って呼んでくれるのを筆頭に膝枕で耳掃除とか、A・Tデート……は、いつもやってるか」

「な、何言ってるのよアンタ!？」

「帰ったら『ご飯にする？ お風呂？ それともア・タ・シ?』とか、その他エロエロ……じゃなくて、諸々やってくれるハズだったのに……それを……」

「待てや、コラアツ！」

「それをよくも邪魔してくれたな、この使途もどき野郎がアアアアツ！」

血涙と絶叫にしょーもない怒りを込めて乱入者『使途もどき（仮）』を睨み着ける。

「ちょっと待てっつの！ そんなん誰がやるって言ったのよ!？」

『って言うか、色々追加されてます!？』

今の今まで何も反応を見せない『使途もどき（仮）』だが、なんと阿呆らしい叫びに心なしか呆れているように見える。

「……とまあ、三割本気の冗談はココまでにしとくか」

「冗談だったんかい！」

「しかも三割本気……って織斑君、鳳さん！ 早く撤退を……」

「織斑、鳳。そのまま戦闘を続行しろ」

「織斑先生！？」

再度の撤退命令を千冬の声が遮った。

「戦闘と言うか、むしろコントじゃないか？」と思った一夏と鈴だが黙って指示の続きを待つ。

「このアリーナは今現在そのISの仕業と思われるハッキングによりお前達の救助に向かう事が出来ない」

センサーでも千冬の言う通りに遮断シールドのレベルが4に固定され、一夏達の救助も生徒達の避難も不可能な状況となっていた。

「遮断シールドの解除を三年の精鋭達に任せてはいるが後何分か分かるか解らん、政府にも救援を要請したがすぐには来れないだろう」

その口調は落ち着いた調子ではあるが、内心苛立ちを抑えきれずにいるのが一夏には解った。

「私達は生徒達の避難を優先させ、出来る限り急いで救援に向かう。それまでの間お前達二人でソイツを足止めしろ……出来るな？」

敵の戦力は未確認機体で、先の一夏の観察通りに決して低くない事は確実。

しかも、その攻撃が避難出来ずにいる生徒達に及ばないとは言えない。

「了解。いいわね、一夏」

「トーゼンのパーペキだ！俺と鈴のコンビなら負けは無いぜ！」

二人の意思を感じ取ったかのように『使途もどき（仮）』はその腕に備えた銃口を向け、熱線を放った。

「なんて威力……セシリアのライフルより断然ヤバそう……」

回避後、センサーの解析から知らされる熱量に鈴の背筋が冷える。その威力から察するに遮断シールドを突き破ったのもこのビーム砲だろう。

「ハッ、そんな当たんなきゃーだけの話だ！」

ついさっきまで阿呆な事を叫んでいたのと同じ人物とは思えない程に鋭い眼で敵を見据えるその横顔に鈴の胸は不謹慎にも高鳴った。

「真面目な話、コイツは鈴と俺の勝負の邪魔してくれた上に俺らの友達を危険に晒すと言う罪を犯した」

連続で放たれる熱線を散開して回避、一先ず距離を置いて再度並び立つ。

「判決。コイツが何処の誰かは知らねーけど、今日から寝床は地べたの下だ、OK？」

直訳。

『ブツ殺！』

「なら……蹴散らすわよー！」

「了解！」

拳をぶつけ合い、二人は空を駆け出した。

。

「一夏、合わせて！」

「押忍！」

七度目のトライ。

甲龍の肩の横に装備されたスパイク・アーマー付き非固定浮遊部  
位トが開く。

衝撃砲「龍砲」が放たれ、その見えざる砲弾が白式が発した炎を  
纏トう。

コシボ・トリック

合技

《衝龍突破》

それは開かれた龍の罅から放たれた烈火の如く空を走る「炎の砲  
弾」。

一夏はISを「A・T以外の武器を持つライダー」、セシリアの  
ビットや鈴の衝撃砲みたいな特殊武装は「ちよつと特殊な技トリック」とし  
て認識している。

鈴もそれを聞いていたので、以前とある戦バトルで見た技を真似てみた  
がソレは装甲を焦がすだけで叩き落とされた。

「チツ、やっぱ即興で編み出した技じゃダメか！」

「それにあのスラスタも厄介ね……零距离離脱に一秒掛かってな

いって、どんな出力してんのよ」

鈴の言う通り、近接の間合いに捕らえても全身に備えた尋常でない出力のスラスタを持って回避されている。

そして回避後には必ず反撃、その長い腕を自身の体を軸にしたコマのように振り回し、更にはビームまで放つから手に負えない。

鈴が囿になっても一夏の突撃には必ず反応して回避を優先する。

まるで白式の武装ホイール『雪片・空我』の能力を知っているかのように。

雪片を介して発動する白式の単一仕様能力『ワンオフ・アビリティ零落白夜』。

バリアーを無効化して絶対防御を強制的に発動させる雪片の能力に加え、白式自身のシールドエネルギーを攻撃に転換し、全てのエネルギー質のモノを無効化する両刃の剣。

だが、その威力はISの武装の中でもトップクラスと言う千冬姉のお墨付きだ。

そしてもう一つ千冬姉に教えられた大切な言葉がある。

『強い力には相応の責任が伴う。この力の使い所をしっかりと見極められるようになれ、一夏』

「今がその時だよな、千冬姉……」

視線の先に佇む『使途もどき（仮）』。  
ヤツの動きから俺は一つの仮説を立てた。

「なあ、鈴。あれって人が乗ってるのか？」

「どう言う事、ISは人が乗らないと動かないのよ？ ……まさか無人機だとか言うつもり？」

「そのまさかだ。使途もどき（アイツ）の動き、パターンが単調で機械みたいだと思わないか？」

『使途もどき』の動きは確かに早く、オールレンジ全距離に対応する強力な攻撃を繰り出す。

しかし、某怪獣狩人ゲームのモンスターののように一定の行動しかないのだ。

「確かにそうだけど、そんな……ありえないわ！」

「ありえない事はないだろ、ISもA・Tも10年前じゃ空想の域を出なかったシロモノだぜ？」

ISのコアは意思みたいなモノを持っているとは言え、結局は機械だ。

しかもISが登場して10年が経過し、研究と技術が日夜進んでいる現在。

『ISコアに人が乗っていると認識させる』プログラムが存在しないとは言い切れないのだ。

それにセシリアのビットみたいな『思念制御兵器』がある位ならかなり高度な遠隔操作リモート・コントロールくらい簡単な事だろう。

そして、その両方あればスタンド・アロン独立操作が可能なISが展開可能となる。

「……仮にアイツが無人機なら何だって言うの？」

「勝てる。我に策アリ、ってヤツだ」

鈴は俺の目を見てその『策』を即座に理解したらしく、目を見開いて驚いた。

「あ、アンタ本気!？」

「トーゼン!」

最初にいったハズだ『俺と鈴なら負けは無い』と。

「あーもー! どうなっても知らないからね!」

ヤケクソ気味に吠えた鈴は敵と相対する俺の背後に回る。

「無問題。なんせ俺には『石の王』なんかじゃねえ、本物の勝利の女神がツイてるからな!」

「ワケわかんない事言っでないで行くわよ!」

「押忍!」

そんな俺は予期せぬ事態に遭遇した。

『一夏あつ!』

「箒!？」

突然アリーナのスピーカーから箒の大声が響く。

見ると中継室をジャックしたらしい箒の姿がその窓に写った。

やっぱオマエのが不良だよ、絶対。

『男ならその程度の敵に勝てなくてなんとする！ 意地を……暴風<sup>ライ</sup>族を名乗るなら、その意地を見せてみる！！』

箒の叫びに反応した敵が腕部に備えた銃口をそっちに向ける。

「ヤベエ！ 鈴！！」

「わかったわよ！ 『龍砲』 最大出力つ！！」

そして放たれる衝撃を背中で受けた刹那、A・TとIS、二つの技を<sup>トリック</sup>発動させる。

一つ。

炎の道・技<sup>フレイム・ロード</sup>

『AFTER BURNER』

音速の壁を越えた衝撃と炎を残し、その姿を見る者の視界から消える程の超加速法。

二つ。

イグニッション・ブースト  
『瞬時加速』

白式の後部からエネルギーを放出、内部に取り込んでからソレを圧縮して再放出。

その際に得られる慣性エネルギーを利用した爆発的な加速法。

『瞬時加速』は外部からのエネルギーでも発動可能であり、その速度は使用するエネルギー量に比例する。

『AFTER BURNER』と『龍砲』の力を受けた『瞬時加速』の超々加速により発火する俺の身体が悲鳴を上げるが知った事か。

極限の加速の中。

戦闘用車輪『雪片・空我』が変形し、白式が単一仕様能力『零落白夜』の発動を知らせる。

「魅さらせ、俺の……俺達の……『道』を……！」

迎撃に放たれたビームごと右腕と胴体、そして地面を蹴り穿った。

「ワリいな、俺には最初<sup>ハナ</sup>っからツインテールで酢豚が上手い勝利の女神がついてんだよ」

崩れ落ちた『使途もどき(仮)』に一安心しながらピットに向かう。

しかし、センサーが背後からの熱源反応を知らせる。

「一夏！」

鈴が叫ぶ。

頭部と左腕だけとなっていた『使途もどき(仮)』だが左腕を最大出力形態にしてぶっ放す。

迫り来る光に向かって俺は疾駆した。

## Trick 10 (後書き)

ウチの一夏君は『エア・ギア』の新・炎の王程器用じゃないです。  
ところで23巻でキリクが乗ってたバイクすげえカッコイイ

**Trick11 (前書き)**

クラス対抗戦・アフター編。

YouTubeでツンデレかるたを聞いてました。

「痛ってえっ!? イデデデデデデデデデッ!!!!!!?」

全身がバラバラにでもなりそうな激痛に目を開けたら、そこには見覚えのある天井があった。

「痛覚神経のヤツ仕事し過ぎだぜ……ってか、俺なんで保健室コにいるんだ?」

A・TやISの訓練やその他、筈にシバかれ、セシリアに蜂の巣にされて傷だらけになる事が多々ある俺が鈴に連行される場所がここだ。

窓の外は夕焼けに染まり、今が放課後ティータイム……じゃなくて放課後らしい事がわかる。

「気が付いたか」

「痛え……って千冬姉?」

「安心しろ痛いのは生きてる証拠だ」

さすが千冬姉、正論である。

「致命傷はないが全身打撲、数日は地獄だが……慣れたモノだろう?」

「よくご存知で」

千冬姉の言う通り多少の傷や痛みなら慣れている。

それもこれもA・Tを始めた時から毎日のようにスツ転んだり、

戦でボロボロになっていたのだから慣れもする。<sup>バトル</sup>

正直コレはソレよか断然キツイけど弱音を吐くのは俺的に無しなので同意する。

別に千冬姉に心配かけたくないから強がってるわけでは決してない。  
い。

ないっつらないのだ。

「それにしても音速を超える加速技と衝撃砲の最大出力を利用した瞬時加速を組み合わせるなどよく思っていたモノだな」

「まあね、千冬姉に瞬時加速を教えて貰ってから鈴と練習してる時に思っていたんだ」

そんな時は『わざわざそんな危ない事しなくてもいいでしょ！』って怒られたけど、『使途もどき（仮）』と戦っている時に鈴が俺の考えを即座に理解してくれた上に協力してくれたのは感謝してもしきれないな。

うむ、さすが俺の嫁。

「そんな事を絶対防御をカットした上でやってのけるなど、後にも先にもオマエだけだろうな……よく死ななかつたモノだ」

「そう簡単にくたばったりしねーよ。だって俺不死身だし、なによ  
り……」

それは俺が（自称）不死身である最大の理由にして俺の最高の自慢。

「千冬姉の弟だからな！」

「フツ、何を言ってるアホ者が……」

それに俺を殺したいなら千冬姉か鈴、もしくは両方に犬耳と浴衣

orchayナドレスを装備させて来い。  
うむ、脳内補完だけで萌え死しそうだ。

「ま、なんにせよ無事で良かった。家族に死なれては寝覚めが悪い」  
いつもより柔らかい表情の千冬姉。  
それは世界でたった二人きり、唯一の家族である俺にしか見せない顔だ。

「ところで試合の事だが、あんな事が起きた以上無効となった。再試合の日程などは今の所は未定だ」  
「そりゃそーだよな……できれば俺のケガ治った後位をキボーします」

今の俺なら『森』の外の某『機紡ぐ姫』プリンセスレナー以外の小学生ライダーにすらボコボコにされるだろうからな。

「さあな……さて、私は後片付けがあるので仕事に戻る。オマエも少し休んだら部屋に戻っていいぞ」

千冬姉はそう言うてから保健室を出て行った。  
仕事に真面目な理想の大人像であるその姿を見送り、俺は疲労から来るのであろう眠気に抗う事なく目を閉じた。

（なんかいいニオイがする……）

どこか懐かしいようで、つい最近感じた気がするそのニオイに――  
夏の意識は覚醒した。

(なんかまた眠くなって来た……)

何故か気分が落ち着き、言い知れない安心感から再び意識が消えていく。

しかし、それは唇に何か触れた事で引き止められた。

(なんだコレ……柔らかくて、あつたくて、甘い感じのモノは?)

不思議に思い、目を開くとそこには鈴の顔が文字通り『目と鼻の先』にあった。

そしてゆっくりと離れてから、鈴は嬉しそうにその唇に触れる。

「一夏……」

「お、おう?」

「ふえ?」

幸せそうに呟いたその声に思わず返事をしてしまい、驚いたような表情の鈴と目が合った。

「……」

「……」

沈黙が保健室を支配する。

よし、ここは一つ状況を整理しよう。

まず千冬姉を見送った俺は二度寝した。

そして唇に何か当たって目を覚ましたら鈴の顔が目の前センチにあった。

以上、某ラノベ風に言っと『俺が幼なじみにチューされたわけがない』である。  
なるほど解らん。

ならばここは聞き込み捜査開始だ。

この事件は俺が解決して見せる、『ブリュンヒルデ』と呼ばれた姉ちゃんの名にかけて。

『織斑少年の事件簿』。

。

「り、鈴……オマエ……」

一夏も完全に混乱している為、声が震えている。

しかし、それに反応して再起動した鈴の混乱はソレ以上のモノだった。

「あ……え！？ い、一夏起きてたの！？……じゃなくて、こ、これはずが、違うのよ……!?!?」

完全にパニックに陥った鈴はもはや涙目だ。

支離滅裂な言い訳を繰り返す鈴に対して一夏は徐々に冷静さを取り戻していく。

『混乱している時等、自分以上に取り乱している人間を見ると不思議と冷静になれる』と言う事があるが、まさにソレだった。

「まあまあ、鈴。オマエは少し落ち着け、な？」

「う、うん……」

「別に俺は何も怒ってない……けどな、どうしても言いたい事があるんだ」

「な、なに？」

だがこの男の精神はどこか別の次元に落ち着いたらしい。

「どうせなら俺が起きてる時にしろよ、もったいないだろ!!」  
「……は？」

『何言ってるんだコイツ?』。

百人いたら七十人位が鈴と同じ事を思っただろう。

しかし、別空間にブツ飛んだ思考の一夏はそんな事お構いなしに話を進める。

「俺は初めてだったんだ、不意打ちみたいな形じゃ納得いかないに決まってるだろ! だからやり直しを要求する!!」

「な、なな、何言ってるのよ!? バカ! 変態!! スケベえつ  
!……!」

変な方向に激昂する一夏も一夏だが、この娘も結構ヒドい。

。

一夏のやり直し要求とアタシの却下意見は平行を辿り続けている。

「ダメだったら、ダメ! ダメなの!!」

「なして!?!」

「ダメなモノはダメ!」

ところで一夏は大丈夫なのかしら?

千冬義姉さ……じゃなくて、千冬さんに聞いた話じゃ全治数週間の全身打撲って聞いたけど……。

「そんな理由で俺は納得しな……痛うつ!？」  
「きゃあっ!？」

何事かを叫んでいた一夏がアタシに抱きついて来た。

「い、いきなりナニするつもりよ!? バカ! エッチ! 痴漢! 変態! スケベ!」

だ、ダメよ、一夏!

私達まだ学生だし、早過ぎるわ!?

……で、でも一夏がどうしても、って言うなら……

「ワリイ、ちょいスベった」

痛みにバランスを崩したただけだったらしく、一夏は体制を立て直した。

ちよっぴり、いや、かなり名残惜しい。

けど、そのおかげで少し冷静になれた。

「はあ……アンタってはホントろくな事しないわよね」

「それが俺クオリティー!」

「やかましいわ」

いつものアホ発言だけど少し耳が赤いのはなんでかしらね?

「全く……アンタのアホさ加減に付き合えるのは私くらいのモンよね」

弾もなんだかんだで付き合ってるかしら?

……いや、どっちかって言えばノリノリで一緒に馬鹿やるわねア  
イツは。

それで妹の蘭に叱られてたっけ。

そしてアタシは一つの結論に到った。

「やっぱり一夏はアタシがいないとダメなのかもね、アンタってほ  
つとくと本当にロクな事しないし……」

「そうか？」

「そうじゃないでしょ！ だからアンタは私の目の届く範囲にいな  
さい、一生よ……」

ビシツと人差し指を一夏に突き付ける。

「さっきみたくアタシ以外に抱き着いたりしないようにしっかり監  
視してやるんだから、覚悟しなさい！」

「お、おう」

「うむ、素直でよろしい！ さ、帰りましょ」

「あ、オイ！ ちょっと待てよ、鈴つてば……！ オーイ！」

アタシを追って保健室を出る一夏。

さて、今日の夕飯は何にしようかしら？

。

そして鈴は自分が爆弾発言をしていた事に気付くのは夜になった  
寝る直前。

その為、眠れぬ夜を過ごすのだった。

Trick 11 (後書き)

ウチの一夏君は原作よりもシスコン度は低いと思います。

Trick:12(前書き)

部屋移動と宣戦布告編。

ようやく原作一巻分が終わります。

学園地下50メートル地点にある、学園内でも限られた者にしか入れない空間。

そこで千冬は二時間に渡ってアリーナでの戦闘映像を見た後、真耶から乱入した未確認ISの解析結果の報告を受けていた。

「……やはりコイツは無人機だったか」

「はい。ですが、どのような方法で動いていたかは解りません。織斑君の攻撃で機能中枢が焼き切れていましたから……」

我が弟ながら観察眼と『読み』の鋭さは大したものだと千冬は思う。

自分もそれなりの観察力はあるとは思うが、あの状況で『敵が無人機である』など言う予想の下で行動し、結果を出す事は決して簡単な事ではない。

「それに損傷が酷く、修復も不可能かと……」

「そうか。コアはどうだった？」

「それが……未登録のモノでした」

半ば予想していた通りの答えが真耶から返って来るが、今の所心当たりはない。

(今はまだ、な……)

かつて世界最強、『ブリュンヒルデ』と呼ばれた織斑千冬は現役

時代の如く鋭い、戦士の瞳でディスプレイを見つめていた。

。

「遅かったではないか、何をしていた!？」

部屋に戻った一夏と鈴は、何故かご機嫌斜めな筈に遭遇した。

『何をしていた』とか聞かれると、保健室での事を思い出して顔が熱くなる二人。

「な、何にもないわよ!」

「お、おう。なんもねーよ! ただ俺が起きるのが遅くなっちまうてさー!」

「そうそう、けどアタシはそれを待つただけ!」

まあ、鈴が寝ている一夏のファースト・キスを奪うなんてラノベみたいな事があるにはあったが、それを言ったら目の前の侍少女は修羅と化すだろう。

「と、とにかく、俺達は疚しい事はしてねーよ」

「……」

疑うような視線で鋭く睨む筈。

その迫力は今日戦った『使途もどき』がハツ子の暴風族チームのペットのゴザルに思える程だ。

(こ、恐ええ……)

「ぶん……まあ、良い」

そう言うと筈は部屋に備わっているキッチンの方へ入って行った

後、お盆に二皿のチャーハン乗せて戻って来た。

「何よ、コレ？」

「二人とも朝食の後から何も食べていないだろうからな、私が作っておいてやった」

「へえー、箸って料理作れるなんて思わなかったぜ……意外だ」

「どう言う意味だ!？」

作りたてのチャーハンから香るゴマ油を炒めた食欲を誘う匂いに、空っぽの胃袋はメダルの怪人を産み出せそうな程に『欲望を満たせ』と騒ぎ始める。

つまり腹の虫が鳴いているのだ。

「ほんじゃ、いただきまー」

「うむ、遠慮なく食べるがいい」

さっそく一夏と鈴はレンゲ片手にチャーハンを食べ始める。

「……」

「……」

「どうだ、うまいだろう」

得意げな表情の箸だが、一夏と鈴は首を横に振った。

「……味がしない」

「な、なんだと!？ そんなバカな!！」

箸は鈴の手からレンゲを奪い取り、一口食べる。

「味がしない……」

「筍、アンタ調味料入れてないんじゃない？」

「……あ」

見た目は普通、いやこんがりとしたきつね色で、もの凄く美味しそうなのに全く味がしないと云うのも珍しい。

味付けが薄いとか言うレベルではなく、どうやら調味料を全く入れてないらしい。

「ごちそうさん」

しかし、そんな事は腹減りだった故に、すっかりと平らげた一夏を喜怒哀楽が入り交じった凄い表情で筍がガン見していた。

「な、なんだよ？」

「勘違いするな！ 今日の失敗は低確率の偶然で、まれでたまたまだ！ いつもは成功するのだ！！」

ちなみに一夏が筍の手料理を食べたのは初めてだったりする。

小学四年生の時に引越して離ればなれになったのだから当然と言えば当然だが。

「そ、そこでだな……オマエがどうしても言うならまた作ってやらないでもないぞ？」

「むっ！」

頬を上気させながら、恥ずかしそうにする筍の発言に鈴は『何かを察する。』

「別にいいよ、手間になるし、食堂で充分だろ」

「私の料理が食べたくないのか!？」

「何いきなしキレてんだよ、意味ーわかんねーっつの」

「私が毎日料理を食べさせてやると言っているのだ!」

「ちよつと待ちなさいよ! 何アタシの真似して一夏を誘惑してんのよ!？」

「オマエの言っていたのは酢豚だけだろう! それに一夏は中華よりも和食が好みだ! 毎日酢豚なぞ食べ続けたら飽きるわ!！」

「なんですつてえーっ!？」

箒と鈴、その背後に映る技影シャドウが激しく火花を散らす。

ちなみにその技影は、鈴が龍を従えた仙女。

箒は二刀を構え、紅の鎧を纏った女武者。

その技影ごと決闘でも始めそうな勢いの二人の口論を、気の抜けたノックが遮った。

「あー、鳳さんと篠ノ之さん、織斑君、いますかー?」

ノックの主は山田先生だった。

俺、なんか悪い事したっけ?

「どうしたんスカ先生、七不思議の一つ。『凍った時計』は裏のコンセントが抜けてただけでしたよ?」

「な、七不思議? 『凍った時計』ってなんですか?」

「はいはい、先生繋がりの中の人ネタはやめなさい。先生が困ってるでしょ。」

「ところで先生、何か用があるんですね?」

鈴は的確なツッコミの後、頭にクエスチョンマークを浮かべている山田先生に話の続きを促した。

「あ、はい。そうでした。お引越しです」

『引越し?』

「はい」

鈴と筈の八モった鸚返しを先生が肯定する。

ふむ、当初の予定通りに俺が入る個室の準備が出来たのか。

「結構早かったんスね、もうちょいかかると思ってたんスけど」

「あ、いえ、織斑君は違うんです」

「はい?」

ちよつと驚いた。

個室を貰えると思っていた俺じゃなくて、背後の二人が部屋を移るらしい。

って言うつか山田先生、主語を入れて話してくださいね?

「そもそも鳳さんは自分のお部屋があるんですからそこで生活しなくちゃダメじゃないですか!」

「す、すみません……」

めっ、とでも言いそうな怒り方だが最もなお叱りに鈴も謝るしかなかった。

「ふん、だから私は早く戻れと言っていたのだ。ほら、さっさと戻るがいい」

同居人がいなくなるのに箒は喜色満面の笑みだ。  
ヒドいやツだな。

「あ、お引越しは篠ノ之さんですよ」  
「……は？」

瞬間、箒の表情が凍りついた。

「良かったわねー、『男女七歳にして同衾せず』が常識って言ってたもんねー」

鈴がさっきのお返しとばかりに俺が入寮初日に言われた言葉を送る。

刃のような鋭い眼で睨みつける箒だが、自分が言った事なので返す言葉がない。

「くっ……先生、今すぐ部屋を移動します！」  
「は、はいっ！ じゃあ、始めましょう！！」

お冠な箒は山田先生と一緒に荷物を纏め始める。  
その光景から視線をずらすと、鈴と目が合った。

「一夏……」

箒に一矢報いた時とは打って変わり、その淋しそうな鈴の表情。  
それは中二の終わりに引越して行く時と同じく、捨てられた子猫みたいな瞳で俺を見ている。

「また、いつでも遊びに来いよ。同じ寮内なんだし、な？」  
「いいの？」

「餅のロン、いつでも熱烈歓迎だっつもの」

「一夏……うん、ありがと」

途端、鈴の表情がぱあっと花のような笑顔になる。

「それに俺の事なら心配すんな、自分の事くらいちゃんとするさ」<sup>テメエ</sup>

「本当に大丈夫なの〜？」

「おうよー！」

さっきまで泣いてしまっていた鈴は俺をからかうような事を言う。

鈴が笑ってくれるなら幾らでもからかわれてやるうじゃないか。

「アタシがいなくてもちちゃんと起きなさいよ？」

「おう、ケータイの目覚まし機能ってどう使うかわかんねーけど！」

冗談だけど。

使い方も解るし、自分で起きれるけど鈴の声で起こして貰うとなんか目の覚め具合が違っのだから我慢しよう。

「寝る前に歯磨きなさいよ？」

「了解。歯医者さんは苦手だしなー！」

この世に歯医者さんの治療が好きな人っているのか？

「A・Tばっかいてないで早く寝なさいよ？」

「……善処シマス」

これは千冬姉にも散々言われているのだが、A・Tを整備したり、カスタマイズするのは時間を忘れるくらい楽しくて不眠不休飲まず

食わずですつとやっついていてめちやくちや怒られた事もあるくらいだ。けどやめられないし、止まらないのだ。

「寝癖もしつかり直すこと！」

「あー……それは鈴にやって貰いたいんだけど」

「な、なんでよ!?。それぐらい自分でやりなさいよ！」

いつだったか寝癖がついてたのを鈴に直して貰ったのだが、何度か千冬姉の髪を梳いたりした事はあってもして貰う事なかった俺はそれが一回で癖になってしまったのだ。

「えー、だって鈴上手いし、キモチイイし」

「も、もおー……ばかぁ……」

しかし、照れた表情の鈴も中々クるな……。

なんて思っていた俺は背後に迫る殺気に気付くのが遅れ、脳みそが左右に割れそうな衝撃を無防備状態で叩き込まれた。

「破邪百 剣！ 邪気退散！！」

「がおっ!?!」

犯人はポニーテール、凶器は木刀だった。

。

その後、一時間もしない内に引越し作業は終了し、鈴と箒はこの1025号室を出て行った。

しかし、鈴の荷物がポストンバグーっしかなかった事には驚い

た。

詳しくは知らないけど女の子の荷物は多いイメージがあったので少し意外だった。

「さて……」

風呂に入って、歯も磨いた。

今日はA・Tいじりも軽いメンテだけで済ませ、後は寝るだけだ。

「……寝るか」

鈴と箒が居なくなってしまった事で面積が三倍になったような錯覚と、静かになってしまった事の寂寥感を感じながら布団に入る。それと同時にノックが響いた。

(……メンドイ)

なんて思っていたら今度は拳で殴りつけているかのような音になる。

仕方がない、出るか。

「はいはい、どちら様ツスカ？　ウチは読　で間に合っ……なんだ、箒か」

そこには先刻別室へ引越したハズの未だご機嫌斜めな表情の箒がいた。

「どつたの、忘れモンか？」

「……」

なんとか言えよコンチクショウ。

「どーしたよ、部屋入っか？」

「……いや、ここがいい」

「あら、そっつ？」

「うむ」

しかし、箒は何を言うでなく俺を睨み続ける。

「よお、箒。用がねーなら俺もっ寝るぞ」

「ま、待て、用ならある！」

こら、廊下で大声出すなっつもの。

近所迷惑だし、寮長に怒られるだろ。特に俺が。

「ら、来月の個人トーナメントだが……」

『個人トーナメント』ってのは六月末に行う自主参加型の個人戦で、学年別に区切られている以外は特に制限はないらしい。話から察するに箒は参加するつもりらしい。

「わ、私が優勝したら……オマエに私の望みを叶えて貰う！」

……俺はいつから某電車ライダーの敵キャラになったんだ？

Trick:12 (後書き)

ウチの筭さんがこんななのは作者の扱いの悪さにやさぐれている  
せいです。

ファース党の皆様にご迷惑申し上げます。

**Trick：13（前書き）**

親友と妹分登場編。

思ったよりもチーム名を考えるのに時間がかかりました。

六月頭の土曜日。

俺は親友の五反田弾と供にとある場所にいた。

『アンダー・コロッセオ  
地下闘技場』。

そこは使われなくなった下水処理場を改造した、とあるチームの  
バトルフィールド  
メイン戦場だった所だ。

「ここに来るのも久々だな」

「ああ、あの戦<sup>バトル</sup>以来だもんな」

俺と鈴、そして中学に上がってからA・Tを通じて親しくなった  
弾は、同じくA・T繋がり仲間になった御手洗数馬ら他数名を誘  
つてA・Tチームを立ち上げた。

最初はただ集まって走るだけではあつたが、皆でバイトして少し  
ずつお金を貯めて、戦の時に着るチームウェアや、練習や戦をする  
為の『縄張り（エリア）』を示すステッカー。

パーツ・ウオウに参加する為に必要なメモリー・スティック（P  
Pで使うのと似たヤツ）にメット、旗、プロテクター等、必要な  
モノを揃えながら俺達は自分達のチームを作つて行つた。

「あ、そー言や、コイツは返すよ。総長<sup>リーダー</sup>」

「あー、これか……別にオマエが持つてもいいんだぜ？」

俺が弾に渡したのは入学初日に襟に着けていた銀バッジ、エンブレム『族章』  
だ。

『族章は暴風族の命』エンブレム・オブ・ブライドの言葉が示す通り、族章とはチームそのものを表すチームの魂。

そして鈴曰く、『仲間同士の絆の証』だ。

純粹にそう言うてから恥ずかしがる鈴にキョンキョンしたのもいい思い出である。

「あんな、リーダーなんだからオマエが持ってないとダメだろ」

「それもそうだな」

中一の夏、チーム暴風族『ストライク・イーグル瞬駆鷲飛』を結成した俺達。

パーツ・ウオウにも参加しつつも、チームの目的『好きに走って、飛んで、バカやって楽しむ』ことをモットーに走っていた。

そんな中、俺達は別のチームに参加していた先輩に誘われ、『超獣』の二つ名を持つライダーが率いるチームと出会った。

そのチームの名は『ベヒーモス』。

由来はイスラム神話に登場する世界最大の生物で、別名が『陸の王』だ。

チームはその名に恥じぬ日本最大の広域チーム暴風族で傘下には俺達や先輩のチームを含めた大小150以上が参加。

構成人数が1000人を超え、『ベヒーモスが身体を揺らすだけで虫けら（カスチーム）が10匹潰れる』と言われる程、他のチームに強大な影響力を持つ、まさに『怪物』だった。

しかし、この世には『盛者必衰』と言う言葉がある。

ある日、後に『嵐の王』となる男が率いるチームとの戦を最後に超獣の巨大な牙は誇り高く折れた。

「あの戦の後は空きのまんまか……」

「そりゃ、ライダー内じゃ聖地の一つになってるココには手え出さねーのが暗黙の了解ルルってヤツだろ」

「……そうだな」

あの戦の直後、警察組織・マル風Gメンがココに踏み込んで来た。当然、ココで観戦していたライダー達は反抗し、警察との衝突は必至となった。

最初は圧倒されていたライダー達ではあったが、そこにいた『王』達により形勢が逆転。

逆襲が開始される間際で両者を止めたのは他ならぬ『超獣』だった。

その場でライダー達が警察を淘汰するのは簡単な事ではあったが、それにより発生するであろうA・T界全体にダメージを与えかねない報復を回避する為に『超獣』は一人『首謀者が自首する』と言う型で逮捕された。

最初は俺達を含む全員が納得できなかった、しかし超獣の最後の一言が供に行こうとする俺達を止めた。

『皆、『檻ヘリモス』はこの瞬間をもって消滅する……巢立ちの時だ』

その言葉を受け取った俺達は頭を下げ、去り行く背中を感謝を込めて見送った。

それと同時に憧れであり、一つの目標となっていたその『力』と『強さ』をいつの日か越える為に俺達は『檻』から飛び立つ事を決めた。

。

「……ところで一夏よ」

「なんじゃらほい？」

感慨に浸っていた空気を払うように弾の緩んだ口調に一夏も軽く返す。

「どーなんだよ、女の園。IS学園はさ」

「んー……A・T使い（ライダー）がいねえ」

羨ましさ半分からかい半分で聞いた弾ではあつたが、忘れかけていた一夏のA・Tバカさ加減に思わずひっくり返った。

「何コケてんだ？」

「あ、相変わらずだな。オマエのA・T熱は……」

「スキなモンに熱あげんのは当たり前だろ？」

呆れ顔の弾に対し、一夏は『何言ってるの？』みたいな表情で聞き返す。

「……確かにそうだな」

少し考えてから真面目な表情で発した言葉は弾も十分A・Tバカ

と言う事が判るモノだった。

そもそも弾と一夏は中学入学初日にA・Tを通じて親しくなり、鈴も含めた三人は三年間とも同じクラスだった事もあってよくつるんで走っていた。

チームの旗揚げ以来、一夏と弾のコンビは暴風族内でもそれなりに有名だ。

「そっぴや鈴とも一緒なんだよな？ どうなんだ、チューの一つでもしたか？」

ニヤニヤとニコニコの中間的な笑みの弾。

彼とチームの仲間達はチーム名物である一夏と鈴の夫婦漫才のよくなやり取りを見続けて来ただけに常々思うのは、『お前らさつさと結婚しろ』なのだが、当人達は三年以上『幼なじみ以上恋人未満』な関係。

そして、その漫才のせいで全員血糖値が気になって仕方ない。それ故に聞いた一言であった。

「っつて、うおおい！ どうした一夏!？」

当の一夏は『時』が停止したかのようにその動きが止まり、頭から炸裂音と共に蒸気が吹き出した。

「何だ、どうした！ 鈴と何かあったのか!？」

初めて見る一夏の異常に弾は驚きを禁じ得ない。

「……い、いや！？ あの、その……だな……」  
「……ま、まさか……オマエら……」

尋常でない一夏の様子に弾は『これはただ事ではない』と直感で感じ取り、意を決して口を開いた。

「ちゅ、チュー……したのか？」

長い沈黙。

「……した」

ようやく搾り出した遠くで蚊が鳴いてるような声で答えるが、弾は無反応。

「……な、なんとか言えよ」

3。

「お、おい、弾？」

2。

「……き」

1。

「きゅ」

0。

「キターッ！ 青春、キターーッ！！！！！」

沈黙し、ただ身震いしていた弾は某宇宙飛行士ライダーの如く、空を仰ぎながら歓喜に叫んだ。

「よくやった！ いや、違うな、ようやくやったかコノヤロー！」「ぐえっ！？ 何すんだ、止める！ 離せ、バカ弾！！！」

一夏から見れば、『突然テンションが上げてヘッドロックをかけて来る』と言う意味不明な弾の行動。

しかし、それはチームの一部を除いたメンバー全員の裏の合言葉である『鈴は一夏の嫁』を目標とし、それを成就させる『道』。

『恋愛の道』ラブ・ロードをようやく当人達が走り始めた事に喜びを隠しきれないがタメである。

ちなみに『恋愛の道』とは『空』ではなく、『想いの成就』を指す弾達のチームが走る『道』（笑）だ。

そして『恋愛の道』はA・Tを持たない人達も必ず一度は走る『道』で、冨とセシリアも己の想いの成就を目指して走っている。

「で、式はいつなんだ？ 必ず呼べよな〜コンチクショー」

「し、式ってなんだよ！？ つっーか離せっての！」

「あ〜？ 何しらばつくれてんだよ、式ついたら結婚式しかねーだろーが！」

「けっ、結婚式いつ！？」

喜色満面の笑みでロックし続ける弾の発言に頭を小突かれる一夏の表情が驚愕に変わる。

「おうよ、友人代表のスピーチは任せる！」

弾はとてもいい笑顔でサムズアップをようやく解放されてむせる一夏に向けた。

「いやー、数馬達も喜ぶぜー」

「アホ。日本の法律じゃ男は18、女の子は16になんねーと結婚できねーんだよ」

「そうなのか？」

「ああ、調べたから間違いねーよ」

「そうなのか……ん？」

納得しかけた弾の脳裏に何かが引つ掛かった。

「ところでよ、オマエなんでそんな事調べたんだ？」

「……」

弾の素朴な疑問に再び一夏の『時』が止まる。

「……」

「……」

「……サテ、ソロソロ約束ノ『時』デハナイカ？」

今夜一夏達は北欧神話に出て来る八本脚の馬の名を冠したチームと親睦を深める為に自分達のエリアに招待し、一緒に走る約束をしていた。

片言でその約束の時間が迫っている事を仄めかし、ごまかすように立ち上がる。

「おい、待て。質問に答える一夏！」  
「……三十六計逃ゲルニ如カズ！」

頑なに弾と目を合わせずにいた一夏は一気に逃走を計った。

「あ、コラ、逃げるな！」

「約束ノ『時』ヲ違エルノハ紳士トシテアルマジキ行為ダヨ、弾ク  
ン！」

「うるせえ、待ちやがれ！ つつーか、アイオーンさんみたく時間を『時』って言うつのヤメロ、コラアツ！！」

叫びながら一夏を追いかける弾は『ベヒーモス』の傘下にいた頃に『超獣』の仲間である上級ライダー『四聖獣』の一人(男)に『可愛い顔をしている』と言われてからその人がトラウマレベルで苦手になり、一夏やメンバーがその人のモノマネをすると鳥肌が立つようになったのだった。

。

一方その頃、弾の実家が経営し、祖父である五反田蔵が大将を勤める『五反田食堂』。

その商業スペースと区切られた居住スペースの一画。

弾の妹、五反田蘭は自らの『恋愛の道』にとてつもない危機が迫っている事を感じ取った。

「この風……鈴さんが動いたの!？」

ちなみに蘭も一夏達のチームの一員で、集合場所に向かう直前である。

「なら、私も負ける訳にはいかないわね……」

有名私立女子校の生徒会長である彼女はそこから消え去り、『一夏』と言つ玉璽レガリアを巡る戦場にまた一人の戦乙女ライダーが参戦を表明していた。

「『鮮血の月』……蘭ね」

夜空に浮かぶ血に染まったように紅い三日月。  
それを見上げるのは同じく集合場所に向かう最中の鈴だった。

「上等じゃない……けど、一夏のお嫁さんになるのは私なんだからね！」

不敵な笑みは自慢のツインテールを靡かせる風だけが見ていた。

国立IS学園。

そこにも今まさに『恋愛の道』を本格的に走り出そうとしている少女達がいた。

胴着を纏い、竹刀をその手に握る篠ノ之箒。

彼女は一夏と交わした約束を現実のモノとする為に以前よりも鍛練の時間を増やしていた。

「私との約束、果たして貰うぞ……一夏」

鬼気迫る程の決意が秘められた瞳には紅い月が映し出されていた。

。

「ふふふ、とうとう手に入れましたわ。あの方と対等に渡り合う事の出来る『カード』を！」

彼女、セシリア・オルコットは手にした『カード』を前に自信満々に表情を輝かせる。

「そして……この私の手料理が揃えば、例えあの方の幼なじみの中国代表候補生と言えど敵ではありませんわ！」

ルームメイトや近隣の寮生の迷惑になる事も気付かず、高笑いを上げるセシリア。

『カード』の横には『見た目は』料理本を完璧に再現したタマゴサンドが並ぶ。

彼女達が『恋愛の道』の頂点を目指し、その手に掴まんとする玉璽<sup>レガ</sup>。

しかし、その玉璽<sup>いちか</sup>にも『戦い』が迫っている事を未だ誰も気付いてはいなかった。

Trick：13（後書き）

ウチの一夏君も『あの人』に狙われたらしいです。

前話の『凍った時計』のくだりは山田先生の中の人が『エア・ギア』の嵐の王の担任と同一人物だった事からネタを引っ張って来ました。

Trick：14（前書き）

二人の転校生編。

『IS』内トップクラスの人気キャラの登場です。

僕はブラック・ラビツ党でもありません。

六月に入り、月末に個人トーナメントの開催を控えたIS学園。

その中で一夏の所属する一組の朝のSHRは一触即発の空気に包まれていた。

。

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

千冬姉を『教官』と呼ぶドイツから来たと言う左目に黒い眼帯をした銀髪の転校生。

名前のみを名乗る自己紹介を済ませたボーデヴィツヒと俺は目が合った。

偶々目が合った俺の方へと歩み寄って来た。

「貴様が……！」

俺の方に歩み寄って来るボーデヴィツヒは俺の眼前で立ち止まった。

そして、突然頬に痛みが走る。

「痛てえな……なにしやがる」

初めてあった奴に平手打ちを喰らって笑える奴は聖人君子かドMだと思う、しかし俺は違う。

ボーデヴィツヒは俺のメンチに怯む事なく、その鋭い右目の赤い

瞳は怒りに揺れ、隠すつもりもないらしい凄まじい殺気を放っている。

「随分変わったご挨拶だな。ドイツじゃ初対面の奴をブン殴るのが親愛の示し方なのか？」

さすがに殴り返すワケにもいかないので精一杯の皮肉をブチまける。

しかし、ボーデヴィツヒは何を言い返すでもなく俺を睨む。

「私は貴様を認めない、貴様が教官の弟などと……絶対にだ！」

……なるほどね、大体わかった。

俺はコイツにケンカを売られているらしい。

いいだろう、ナメられるのは好きじゃない。

「……それで？」

「織斑一夏……私は貴様の全てを否定してやる！」

明確な拒絶を受けたなら黙ってるワケにはいかない。

「面白え……」

闘志を示し、転校生の眼前に指を突き出す。

「賭けるよ、誇り（エンブレム）を」

昔の人も言ってる、『若い時の苦労は買ってもしる』、『売られたケンカは借金してでも買え』ってな。

何？ 後ろのは諺でもなんでもない？

そんなん些細な事はどうでもいいのだ。

「それはA・T使用の宣戦布告だったな……いいだろう、私の全てを賭けて貴様を叩き潰してやる。覚悟しておくがいい」

「ハッ！ 覚悟すんのはテメエの方だ、ラウラ・ボーデヴィツヒ」  
「何？」

形の整った眉が不快に動き、目尻が引きつる。

「『織斑千冬の弟』っつー俺なんざ認めてくれなくて構やしねえ……」

寧ろ色眼鏡で見ない分好都合だ。

「テメエに認めさせてやるよ、『織斑一夏（俺自身）』ってヤツをな……」

「……ふん」

俺との睨み合いに飽きたのか、ボーデヴィツヒはそのまま通り過ぎて空いてる席に座った。

「……風が強いな」

梅雨入り前の空が晴れ渡っている一方で、窓の外と俺の胸中にはどこか嫌な風が吹き始めていた。

。

「えっと、君が織斑一夏君だよな？」

朝のSHRが終了し、一時間目の実技授業の為に移動しようとしていた一夏に話しかけて来たのはもう一人の転校生だった。

「おう。デュノアだったよな、一夏って呼んでくれ。よろしくな！」  
「僕もシャルルでいいよ、こっちこそよろしくね一夏！」

差し出した手を笑顔で握り返すのはフランスから来た金髪の転校生、シャルル・デュノア。

ただの転校生ならいざ知らず、このシャルルはなんと一夏に次ぐ『男』のIS操縦者だった。

クラスの女子達は『守ってあげたくなる系』と言って黄色い悲鳴を上げて、SHR進行と転校生を紹介していた山田先生を困らせていた。

「さて、早速だが実技授業の時は女子がここで着替えるから俺達はアリーナの更衣室まで移動しなくちゃいかんから行くでしょう」  
「うん、わかったよ」

事前の調べで空いている事を確認してある第二アリーナの更衣室を目指して移動を開始する。

「ああっ！ 転校生君発見！」  
「者ども、出会え！ 出会えい！！」  
「チイツ、もう来たか！？」

廊下に出た瞬間、噂の男子転校生の情報を収集する為の尖兵が各学年の各クラスから集まって来ていた。

「織斑君の黒髪もいいけど、金髪も嫌いじゃないわ！」  
「しかも瞳はエメラルド！」

「きゃああつ！ 見て見て！ 織斑君と一緒に二人とも手まで繋いでる！！」

「なんですって！？ スクープだわ！！」

「げえ！ 黛先輩まで！？」

黛薰子。

一夏と鈴がクラス代表に就任した際、一組と二組のクラスメイト達が開いてくれたパーティーの時にクラス代表二人とセシリアの取材に来た二年生の新聞部副部長である。

もし彼女に捕まれば授業に遅刻し、千冬の某地獄の兄弟の弟ライダーの必殺技よりも強力な鉄拳を受ける事に成り兼ねない。

「チイツ、囲まれたか！」

「ふふふ、とうとう追い詰めたわよ織斑君に転校生君」

黛先輩を筆頭とした女子達の包囲網に隙はなく、切り抜けるルートは『前方180°内には』見えない。

「なら……シャルル、行くぞ！」

「い、一夏！？ って、そっちは……！」

故に壁際に追い込まれた一夏が取ったのは背後に『存在あるルート』だった。

「ウエエー……イッ！」

「きゃ、きゃあぁ……っ！！！？」

悲鳴を上げるシャルルを抱えて窓から飛び下りた一夏は装着していたA・Tで壁に吸い付くようにスライディングしながら降下して行く。

「はー、凄いわねー織斑君。あのA・T、ラウンド・トラクション・ヒルでも積んでるのかしら？」

「ラウンド……なんですか、それ？」

窓から降下して行く一夏達を驚きつつも見送る黛の呟きに女生徒の一人が尋ねた。

「ラウンド・トラクション・ヒルね。高い走破性を誇る四輪駆動車とかに搭載されてる技術で、前後左右のタイヤ（ホイール）の回転数を変える事で高い摩擦係数を生み出して絶壁に近い坂の登坂や降下を可能にするモノなんだけど、まさかA・Tでそんな事が出来るなんてどんなセッティングをしてるのかしら……」

感心する黛と女生徒は上手く着地を決め、走り去る一夏達を見送っていた。

「到着！ って……シャルル大丈夫か？」

「あつ……だいじょぶ」

授業の開始される少し前にアリーナに着いた一夏とシャルルだが、シャルルはさつき降下から未だ目を回していた。

ところで今日の実技授業は二組と合同授業であり、両クラスの女子達も既に集合している。

「ういーっす、鈴」

「やつほー、一夏。そっちが噂の転校生？」  
「ぎつつらいと」

故に学園内で『一夏の嫁』と認識され始めている鈴の姿も当然あった。

「シャルル・デュノアです。えっと、織斑鈴音さんだよね？ よろしく」

「ええ、そう私が織斑鈴い……ん？ って違う！ 確かに将来そうなるけど、私は凰！ 凰鈴音よ……！」

何故かシャルルに間違った苗字で呼ばれた鈴は頬と耳を紅潮させながら怒鳴るが、内心満更でもなかったりする。

一方で怒鳴られる理由が解らないシャルルは困惑の表情を浮かべている。

「え？ でも一夏が『俺の嫁だ』って……」

「いゝちゝかゝっ！！」

九割羞恥心による怒りに駆られた鈴がその姿を探すがアリーナ内の何処にも見当たらない。

ただ、一夏のいた場所に『ボロ雑巾のようなモノ』が転がり、その横に何故か全身に赤い液体をぶちまけた箒とセシリアがいた。

「既に仕置きはしておきましたわ」

「うむ、友人に嘘をつくなど人として許しておけんからな。そう思うだろう？」

「全くですわ。ねえ、鈴さん？ デュノアさん？」

二人は爽やかに笑いかけるが、鈴とシャルルはその笑顔にただ震

えて頷くしか出来なかった。

。

「そう言えば右の頬が腫れてるけどなにかあったの？」

「んー……『かくかくしかじか』ってヤツだ」

「はあ？」

「一夏つたら、そんなマンガじゃないんだから……」

鈴の反応とシャルルのツッコミも最もで、『かくかくしかじか』なんて言っても解る訳ないと苦笑する一同。

しかし、このセカンド幼なじみはただ者では無かった。

「なるほど、また厄介事なのね？」

「……え？」

「ま、そーゆーこった」

「……チッ」

呆れた表情の鈴に対し、いつもの事と言わんばかりに笑う一夏。二人のやり取りにシャルル達は驚き、とある二人は苛立った。

「全く……見ず知らずの転校生にビンタされるなんて何したのよ？」

ホント、一夏って問題児よね」

「問題児ねえ……耳が痛てーけど今回は反省しようがねーよ」

視線を向けた先には銀髪の転校生の姿がある。

「大方の理由は想像ついてっけど、な……」

一夏の中で最も忌まわしい記憶が思い出され、知らない内に握ら

れた拳は爪が深く食い込んでいた。

。

ところでこの実技授業と言うのは実際にISを使うのだが、ISを操縦する際、よりスムーズに動かす為に『ISスーツ』と言うモノを着用する。

その特殊なスーツはIS操縦の反応速度などの上昇だけでなく、耐久性も衝撃までは消せないが拳銃の弾丸くらいなら受け止められるらしい。

俺も特注の『男用』のスーツを白式と一緒に貰っている。

プロテクター代わりにもなりそうだし、今度『キューブ』（パーツ・ウオウの一つで密室での殴り合い）する時に着て行こう。

話が逸れたがこのISスーツ、見た目はほとんどスクール水着やレオタードに近い。

動き易さを考慮しての事らしいが、体のラインとかバツチり出ちゃうワケだから男にとっちゃ目の毒だね。

ついでに言うと、この学園の指定水着が旧型スクール水着、体操服もブルマと言う絶滅種の保護区域みたいなこのIS学園。

「おお、ハラシヨー。IS学園ハラシヨー」

「ねえ、一夏はさつきから何を言ってるの？」

隣のシャルルが首を傾げる。

「この学園の凄さを再確認していたのさ」

「じゃあ、なんで鼻血を出してるの？」

脳内でスク水装備した鈴と『特別ルール』なパーツ・ウオウをしているからさ。

。

「では、本日より格闘及び射撃を含む実戦訓練を開始する」

「……………はい！」「……………」

千冬の号令に気合いの入った返事が響く。

「今日は戦闘を実演して貰う。オルコット、専用機持ちならすぐに始められるだろう」

「はい！」

「そして……………別の活力が溢れている織斑！ 前に出ろ！！」

「お、押忍……………」

思春期な妄想していた為に出席簿アタックを喰らい、地面に頭がのめり込んでいた一夏がゾンビのように移動する。

「えーっと、俺とセシリアが戦えばいいんですか？」

「ならばあの時のリターンマッチですわね、今度こそ勝たせて頂きますわ！」

（そして私の真の実力を認めた一夏さんは……………）

『すげえな、セシリア』

『ふっ、それほどでもありませんわ』

『二組代表なんか目じゃないぜ。ぜひ俺にISの、そして愛の手ほどきをしてくれ！』

『ええ、喜んで』

(……と、なるのですわ！)

「でゆふふふ さあ、始めましょう！」

「おお、気合い入ってんなー。俺も負けられねーぜ！」

果てしなく都合のいい妄想を脳内に広げるセシリアの熱気に体育会系な一夏も釣られて気合いが入る。

「慌てるな馬鹿共、対戦相手は今から到着する」

「はい？」

「つつーか、何だこの音？」

どこからともなく何かが空気を裂いて飛来する音が一夏の耳に届いた。

「ど、どいてくださいっ！」

「なあっ!？」

声の方を向き、突進して来る飛行物体に一夏は即座に白式を展開し、出力を全開にして受け止めた。

「フンッ！」

白式の、いやISの機動力があれば回避はたやすい。

しかし、近くには千冬を始め、訓練機ISすら装着していない生身の級友達がいます。

もし自分が回避しても千冬や級友達に被害が及ぶ可能性を考慮した結果、一夏は飛行物体を自らが盾となって受け止める事を選択しました。

飛行物体を受け止めた一夏は数メートル下がった所でようやくその勢いを止める事に成功した。

「ふう、危機一発ってか？ …… って山田先生！？」

飛行物体の正体。

それは訓練機ISを纏った一夏達の副担任・山田真耶だった。

Trick:14 (後書き)

ウチの一夏君は割と不死身です。

Trick:15 (前書き)

VS山田先生編

山田先生は千冬さんの後輩ですけどどいつの後輩なんでしょう？  
普通に考えれば教員の後輩ですよ？

「……あれ？」

衝撃が来ない事を不思議に思った真耶が目を開くとすぐ近くに担当するクラスの……いや、学園唯一の男子生徒の顔があった。

「お、織斑君？」

「ウス、先生大丈夫ツスか？」

確認してみると自分はその生徒に横抱きに抱えられている。解り易く言うところ『お姫様抱っこ』されている状況である。

そしてこの山田真耶は現在彼氏募集中なお年頃で、かなりの妄想家でもある。

（お、織斑君の顔がこんな近くに……って、ダメ、ダメです！ 私達は先生と生徒で……ああでも、このまま行けるなら織斑先生がお義姉さんって事でそれはとても魅力的な……）

「えっと……山田先生？」

「ひゃい！ らいじよぶれひゅー！」

故に妄想を暴走させ、一夏に首を傾げられるのも仕方のない事だった。

それにしても噛みまくりである。

「まあ、IS着けてたし当然ツスね。けど何事もなくて良かったツスよ」

無事を確認し、真耶を降ろす。

そんな一夏の横にはいつの間に現れたか、謎の人影があった。

「あれ？ 鈴？」

人影の正体は鈴だった。

しかし、鈴は何を言うでもなく俯いたままで、その様子がどこかおかしい事に一夏は気付いた。

「どうかしたのか？」

「この……」

「は？」

「浮気者おっつ！」

「デチヨツ！？」

当然のアップパーカットを叩き込まれた一夏は急上昇した後、錐揉み回転しながら地面に落下した。

「アンタ、山田先生に何してんのよ！？」

「ふぁ、凰さん！？ お、落ち着いてください！ 先生は何もされてませんよ！？ 織斑君は到って普通に助けてくれただけですよ！？」

更なる追撃を与えようとする鈴は真耶に羽交い締めされながらも暴れまくる。

「ぐうう……な、殴られたのはいいとしても、なして俺が浮気者？

……グハッ」

「いいんですか！？ しかも喀血してますよ！？」

「鈴のヤキモチアタックの痛みイコールラブ度です！」

「なんですかソレ!？」

真耶のツッコミに一夏はキリツとした表情で返した。  
吐血混じりで。

「だって……」

「ふぁ、鳳さん？　だって、なんですか？」

一夏の問いに一旦大人しくなっていた鈴。  
そんな彼女の眩きに真耶が合いの手を入れる。

「だって……お姫様抱っこなんて羨ましかったんだからしょうがないじゃない!？」

「思いつきり私怨です!？」

驚愕する真耶とは逆に当の一夏は一瞬呆けた後、急に笑い出した。

「なんだそんな事が。言ってくれりゃー、抱っこ(ソレ)くらいいくらでもしてやるよ」

「ホント?」

涙目の鈴が尋ねると一夏は笑って鈴の髪をくしゃくしゃと撫でた。

「おうよ。　　ったく鈴は謙虚だなあ」

真耶を始め、アリーナにいる人達は思った。

『ダメだ、この二人。　　はやくなんとかしないと』と。

そんな事に気付く素振りすら見せない一夏と鈴は未だ桃色な空間

を発生させている。

「やめなさいよ、恥ずかしいじゃない……」  
「だが断る」

撫でられるのが気恥ずかしい鈴の言葉を一夏が却下する。

「もー、一夏のばかぁ……」

言葉とは裏腹に鈴の表情はとても幸せそうで、片手は一夏の上着の裾を摘んでいる。

そんな二人を眺める一堂の中で、なにやら不穏な風が蠢いていた。

「ふふ、一夏よ。鈴の前に私との約束を果たして貰うぞ」  
「……何の約束をしたのですか？」  
「何、奴にまた私の打ち込み人形になって貰えるだけだ」

金髪の射手の問いに黒髪の剣士が（一夏の意味を無視して）交わした内容を答える。

「奇遇ですわね。私も訓練の折、的にもなって頂ける約束をしましたの」

ただし一方的に。

「ふふ、今日も充実した訓練になりそうだ」  
「私も楽しみですわ」

修羅か羅刹の如き二人の笑みに周囲の生徒達は涙を浮かべて抱き

合いながら震えていた。

。

一悶着あったが千冬の一声で授業が再開される。

「さて、さっさと始めるぞ」

「え？ あの二対一ですか？」

「そりゃそーだろ」

「一夏さん？」

千冬の指示に思わず聞き返すセシリアに対して答えたのは一夏だった。

「山田先生は元代表候補生で、千冬ね……じゃなくて織斑先生の後輩だ。実力的に見ても俺達が二人掛かりでもどーにかなるかどうかが微妙な所だろ」

一夏は柔軟をしながら、A・Tバトルで培った観察力を発揮する。

「む、昔の事ですよ。それに候補生止まりでしたし……」

真耶は照れながらズレた眼鏡を両手で直していた。

ちなみに真耶が元代表候補生だった事はISの知識が致命的に足りない一夏が受けている放課後の補習の時に本人から聞いていた。

「ま、一丁胸借して貰いますよ先生！」

柔軟を終えた一夏は臨戦の構えを取るが意外な所からそれは崩された。

「む、胸を借りるなんて……そんな……一夏さんたらハレンチですわ！」

「意味が違い！！」

セシリアに謂れないセクハラ疑惑をかけられ、それを間に受けた真耶は自分の胸を抱くようにして一夏から体を反らす。

周囲の女生徒達からも『男の子だもんねー』『やら、』『織斑君のえっちー』などの声が飛び交う。

「お、織斑君、えっちなのはダメですよ！」

「山田先生もセシリアの勘違いを間に受けしないで下さい！　ってか先生日本人ですよね！？」

一応一夏のツッコミが入るが一度騒ぎ出した女子達には所詮焼け石に水でしかなかった。

結局この騒ぎは鈴が一夏を蹴り飛ばし、セシリア達に千冬の出席簿アタックが炸裂するまで続くのだった。

。

「参りますわ！」

「つしゃあっ！」

「い、いきますー！」

気合いと共に三機のISが空へと飛翔し、激しく火花を散らす。

しかし、千冬曰く『この戦闘はすぐに終わる』らしい。

生徒達のほとんどは千冬が何を言っているのかがよくわかっていなかった。

「デュノア、山田先生が使っているISについて説明してみる」  
「あ、はい！」

千冬の指示に従い、空中での戦闘を見ながらもシャルルは機体の説明を開始する。

「あの機体はフランスのデュノア社製IS、ラファール・リバイヴです。第二世代最後の機体ですが高い安定性と汎用性、そして豊富な後付武装が特徴で……」

シャルルの説明と更に詳細な情報を白式のデータベースが表示する。

「なるほど、デュノアってどっかで聞いたとは思ってたんだ……って、危ない?」

シャルルに『気品』のようなモノを感じた事に納得していた一夏だが、それも一瞬の事。

ライフルの一撃が途切れていた集中を呼び覚ます。

「チイツ、やっぱ戦いは数かよ！」

真耶のマシガンやライフルを駆使した面制圧能力により、一夏は全力で走ってるにも関わらずに全く間合い（殴り合い可能距離）に入れない。

「くうっ、当たりませんわ！」

セシリアもBT兵器アビレの多角射撃は楽々躲かれ、彼女以上の射撃能力で回避した先を狙い撃ちされている。

「もう手加減しませんわ！」

「いや、最初<sup>ハナ</sup>っから全力出せよ!？」

一夏が『山田先生は姉の後輩で、元代表候補生』と言っていたにも関わらず、しかも教師相手に手加減をしてような発言をするセシリア。

しかし、戦闘中にツツコミを入れる一夏も一夏である。

「セシリア、もう一回仕掛けるから援護頼む！」

「わかりましたわ！」

一夏は再度真耶に向かって駆け出し、セシリアは援護の為にBT兵器『ブルー・ティアーズ』を操る。

しかし、ビットの放った閃光は本来のターゲットとは別のモノにヒットした。

「たとばっ!？」

「一夏さん、何をしていらっしやいますの!？」

「それはコッチのセリフだっつーの! って、危なっ!？」

攪乱の為に放ったビットの攻撃は前を走っていた一夏に命中。

互いの行動から口論になっていた所に撃ち込まれる銃撃。

一夏はその銃撃をなんとか回避していた。

。

「うう〜……アタシが一番上手く一夏と連携できるのにい〜……」

「だからこそだ」

「千冬（義姉）さん!？」

一夏とタッグを組めない事が不満で唸っていた鈴は不意に背後からかけられた千冬に驚くが、その声は即座に出席簿アタックの炸裂音へと変わった。

「織斑先生だ。それと誰が義姉だ、誰が」

「す、すみません……」

強烈な一撃を見舞われた鈴は痛む頭を抑えて蹲る。

「この模擬戦は連携訓練の重要性を示す為のモノだ。小学生の頃から夫婦漫才をやっていたお前より、知り合ってから日の浅いオルコツトが適任だっただけの話だ」

「め、夫婦漫才……」

あまり面と向かって言われた事がなかったらしく、少し照れている。

「さて、そろそろ終わるぞ」

「え!？」

鈴が視線を戻すと同時に空に爆炎の花が咲いた。

結果はやっぱり俺達のボロ負けだった。

防戦（回避）一方となった俺は回避方向を誘導されていたらしく、空中でセシリアと衝突。

動きが止まった俺達は山田先生にグレネードをブチ込まれ、その

まま地面に墜落した。

そして今現在、千冬姉による解説がなされている所だ。

「確かに機動力は白式の方が高いが、戦闘形態が近接格闘ともなれば汎用性の高い機体なら量産機でも十分に戦える」

確かに今の模擬戦でもマシンガンの面制圧により、全く近付けなかった。

うん、きつと走り込みが足りないんだ。

射撃型に対応出来るようになるのが今後の放課後トレーニングの課題だな。

「次に、元から一対多を想定したBT兵器を搭載したオルコットの機体は多対一の時は寧ろその性能を発揮し辛く、連携訓練と綿密な役割分担が無ければ寧ろ邪魔にしかない」

「……」

悔しそうに唇を噛むセシリア。

実は先月のクラス対抗戦で使途モドキが乱入した時にセシリアは俺と鈴の加勢に来ようとしたらしいのだが、千冬姉に止められたらしい。

ハッキングされて隔壁が開かなかったのもあるが、もう一つの理由が今言った武装と連携の事だったそうだ。

「さて、諸君にも教員の實力が理解出来ただろう。以後、敬意を持って接するように！」

千冬姉の発言に返事をした俺はようやく、連携訓練の重要性の説

明の他に千冬姉の言いたい事を理解した。

山田先生は『まやや』や『まやまや』等、その他八つ程のあだ名で呼ばれ、尊敬されているとは言い難い状況だった。

故に千冬姉は山田先生の実力を魅せる事で敬意を持たせようとしたのだろう。

内心、『【凍った時計】の某先生とキャラ株ってんな〜』とかマイノリティーな事を思ってた事を反省しよう。

「ゴメンなさい」

「何がですか？」

山田先生は不思議そうに首を傾げた。

。

「午前中の実習はここまでだ。午後は使用した訓練機の整備実習を行うので各人格納庫で班別に集合。専用機持ちは訓練機と自機の両方を見るように、解散！」

模擬戦の後。

専用機持ちをリーダーとした八つの班になった起動訓練は時間ギリギリで全員で終えた一夏達。

千冬と真耶は連絡事項を伝えるとそのまま引き上げた。

「おーし、チャツチャと片しますか！」

ISの移動準備をする一夏とその班の女子達。

片付けをかつたると感じるの誰しも一緒に、とある女生徒達が冗談混じりに一夏に押し付けようとした。

「あ〜ん、私お箸より重いなんて持てな……い？」  
「織斑く〜ん、なんとかし……て？」

しかし、彼女達がソレを言うまでもなく一夏はISの移動を開始していた。

しかし一夏は移動に使うハズのIS専用カートを使用せずに肩に担いで格納庫に向かっていた。

「一夏、アンタってばホントに人間なの？ どっかの改造人間とかじゃないの？」  
「なんだよ急に？」

呆気にとられる女子達の中で鈴が呆れたように声をかける。  
ISを浮遊させるPIC機能が無ければ、ISは鉄の固まりだ。

「とても人間の持ち上げられる重さじゃないわよ？」  
「まあ、鍛えてますから。シュツ！」

某鼓の鬼的な敬礼をした一夏は再び格納庫へと歩いて行った。

「一夏って力持ちなんだねー」

シャルルの本気かシャレかわからない一言にさすがのセシリア達も頷く事しか出来なかった。

Trick:15(後書き)

ウチの一夏君はネタバレすると『あの体質』です。  
この後、あの昼食イベントとなります。

Trick:16 (前書き)

昼休み編。

従兄弟が買ってきて来てくれたISのDVD3巻(初回生産版)に付いていた書き下ろし小説とキャラソンにハマり過ぎました。  
やっぱり鈴は一夏の嫁。

午前中の授業を終えた一組と二組の女子達は食堂で、或いは教室で昼食を取りながらガールズトークに花を咲かせていた。

「ねえねえ、さっきの授業の事なんだけどさ」

「ああ！ 織斑君とボーデヴィツヒさんのアレね！！」

「織斑君、カツコ良かったな〜……」

「ホントよね〜……」

一人の女生徒が振った話題に彼女達は盛り上がり、内数名は熱っぽいため息をつき、頬を薄紅に染まらせていた。

。

先の授業、模擬戦の後は専用機持ちをリーダーとした班に別れての起動訓練となった中で『とある問題』が起きた。

普通のISとは全く違うA・T型IS『白式』を使う一夏がリーダーの班でさえ鈴達程ではないが訓練を進めていたのに対し、遅々として進んでいない班があったのだ。

その班のリーダーはラウラ・ボーデヴィツヒ。

彼女は教える気があるのかあやしい……と言うか皆無であるらしく、必要最低限の指示しか出していなかった。

その上、少しばかりの失敗には実に忌ま忌ましそうにため息をつく彼女にボーデヴィツヒ班の女生徒達はもはや涙目だった。

「おい。班長ならちゃんと教えてやれよ、皆困ってんじゃないか」  
「織斑君？」

そんな彼女達に助け舟を出したのが一夏だった。

「ふん、貴様に指示される覚えはない。それにISをファッションか何かと勘違いしているようなヤツラにこんな事を教えても無意味だ」

クラス長として見捨てて置けずに注意する一夏を睨みつけ、暴言を吐くラウラに周囲の空気が悪くなる。

しかし、そんな視線や雰囲気には怯える一夏ではない。

「そう思っただったら『ISは兵器だから扱いを間違えるな』って一言正してやれよ。俺はどうでもいいけど他のクラスメイトまで邪険にすんじゃないよ」

「何故私がそんな事をしてやらねばならんのだ？ 知った事ではない」

あまりの態度に一夏は深いため息を吐いた。

「なんだ、そのため息は。何か文句でもあるのか」

一夏の反応が癪に障ったのか、ラウラは怒気を含めた声を出す。

「別に。ただ、アンタはホントにちぶ……織斑先生の教え子か、って思っただけさ」

「……どう言う意味だ？」

ラウラは聞き捨てならないと言った風に食ってかかる。

「織斑先生は『誰かを見下す』なんて事はしないし、誰かが間違った解釈をしてるならそれを正してくれる人だ。……けどそれと真逆の事やってるアンタがあの人教え子だと到底思えないだけだ」  
「貴様アツ！」

紅の瞳に殺意が宿り、一触即発な空気がラウラから放たれる。

「やるか？ 言っちゃ悪いけど、アンタには負ける気がしないね」  
「……何だと？」

流石『ドイツの冷水』と異名を取るラウラ。

怒りが頂点に達する寸前とは言え、冷静さを失っていない。

「力を持つてる自分に酔って、溺れて……ホントの『力』っつのがなんなのかってのが解ってないアンタに負ける気がしない、つったんだよ！」

「貴様、どうやら死にたいらしいな……」

完全に臨戦体勢なラウラは専用ISを瞬時に展開、右肩のレーリングの照準を一夏に合わせるが、銃口を向けられた当人の眼はラウラのみを写している。

「そんな気は更々さらないね。けどやるうってならやっけてやるぜ？」

「度胸だけは褒めてやろう。では……！」

「慌てんなよ、今ここでやる訳にはいかねーだろ」

「私は一向に構わんが？」

怖じ気づいたか？ とでも言うように嘲笑を見せ、周囲の事をまるで見ていないラウラに一夏は呆れたように再度ため息を吐いた。

「今月末の個人トーナメント、そこで白黒ツケよう。俺は逃げも隠れもしねえよ」

「……いいだろう。首を洗って待っているがいい」

「その言葉、そのまま返すぜ。子ウサギちゃん」

一夏は闘志、ラウラは殺意と憎悪を秘めた視線を交わし、互いに自班の訓練に戻ったのだった。

。。

そんなやり取りがあり、ボーデヴィツヒ班のリーダー以外は元より、一夏の威風堂々とした態度に乙女心を刺激されている女生徒は少なくなかった。

そんな中、最も刺激されたせいで鼻血吹いて倒れた鈴が一夏にお姫様抱つこで保健室へ運ばれた。

そんな一幕は鈴を更なる羨望の的とした事もここに追記しておく。

。。

なんとか意識を取り戻した鈴は一夏に誘われた筈やセシリアと連れ立って屋上に集まった。

「そう言えば一夏は？」

「さあ？ デュノアさんに『購買の場所を教えるから先に行つてくれ』って言われましたから……って、あら？ この音は……」

鈴の疑問に答えたセシリア。

そこに馴染みとなつて来たスキル音が耳に届き、箒の表情が不快なモノに変わる。

「もう、遅いじゃない」

鈴が突然壁に話しかけた事に知らない人は驚くだろう。

「やー、ワリイワリイ」

しかし、壁の向こう側から聞こえた声は一夏のソレ。  
直後、壁の上に人影が降り立つ。

「よっ!」

「ど、ど、も……きゆう」

その人影は壁登り（ウォール・ライド）で現れた一夏と、彼に担がれて目を回すシャルルだった。

「『よっ!』じゃないわよ、もう!」

「淑女を待たせるなど紳士的ではありませんわよ?」  
レディ

「これだから暴風族と言うヤツらは……」  
ストーム・ライダー

「……な、なんでそんなに普通の会話出来るのかな?」

目を回すシャルルは、普通の会話を交わしている四人にはこれが  
普段通りなのかと驚いた。

「たはは……、ワリイ、勘弁、ゴメン!」

一夏が頭を下げると鈴とセシリアは仕方ないなあ、と言った表情  
に変わる。

「うふふ、冗談ですわ」

「さっさとこっち来なさいよ、ご飯食べる時間なくなっちゃうわよ？」

「ほーい」

一夏は鈴の隣、シャルルは適当な所に座った。

「ところで一夏、ホントにいいの？」

ふと購買の袋からパンを取り出した所でシャルルは申し訳なさそうに何事かを尋ねた。

聞けばシャルルは一夏にお昼のパンを奢って貰った事を色々気にしているらしい。

「いいかね、シャルル君。この日本クニには『敵に塩を送る』、『宿敵クニって書いてダチと読む』って諺があるのだよ」

「後ろのは諺じゃないわよ」

何処かの教授みたいな物言いをする一夏だが、鈴の鋭いとツッコミを受ける。

「まあまあ、とにかく俺もそれに肖ってシャルルともつと楽しくやりてーんだ。だから今日は俺の奢り、受け取ってくれ！」

一夏の屈託のない笑顔にシャルルは彼の善意を断るのは失礼だと納得した。

「うん、解ったよ。ありがとう一夏！」

「良いつて事よ！」

笑い合う二人。

しかし互いの胸に、何処か引つ掛かるモノがある事は当人達の中には誰も気付かなかつた。

。

鈴は後にこう語る。

「ええ、大袈裟かもしれませんが。けど確かにあの蓋を開けたらそこは……天国ヘヴンでした」

。

「は、はい……コレ」

「いつもありがとね」

一夏がいつもより躊躇気味に手渡す弁当箱は昨日までのとなんら変わりはない。

鈴も自らの作ったタッパー入り酢豚弁当を渡す。

「鈴だつて作ってくれてるんだから、お互い様じゃねーか」

「それでもお礼言うのは当然でしょ？」

鈴の弁当は大きなタッパーにご飯と酢豚が詰められている。

一夏は美味しそうにその弁当を食べる。

「さーて、アタシも……」

蓋を開けた瞬間、鈴は照れに照れて鎖骨の辺りから脳天まで一気に入気させた。

「鈴さん、どうしましたの？ こ、これは!？」

「さ、桜でんぶの……」

フリーズした鈴を不審に思った篤達はその弁当箱を覗き込んだ事を後悔した。

そして……、

「うわあー！　すごく綺麗なハートだねー!!」

感心するシャルルの声に絶望した。

桜でんぶで描かれたハートマーク付きの白いご飯と鈴の好きな、しかし栄養バランスを考えられた色とりどりのおかず。

そしてデザートにうさぎの形に切られたリンゴが添えられた一夏の手作り弁当。

ソレは篤やセシリアを始め、一夏に憧れる女生徒達には羨ましくてしょうがない代物だった。

「じっつそさん！」

鈴が照れと幸せに、篤とセシリアが絶望に浸ってる間に一夏は鈴の酢豚弁当を味わい尽くして食べ終えていた。

「今日も旨かったぜ、ありがとな」

「えへへ」

「なんだよ、まだ食ってなかったのかよ。さっさと食わねーと時間なくなっちゃうっつったのは鈴だろーが」

嬉しそうに笑いつつ、未だ弁当に手を着けていない鈴。  
彼女は確かについ数分前に一夏を急かしていた。

「も〜、こんなお弁当作ってくれちゃったら勿体なくて食べれない  
じゃない」

「鈴に食べて貰う為に作ったんだぜ？ そんなモンでよけりやまた  
作ってやるからさっさと食べつつの」  
「ホント!?!」

瞳を輝かせる鈴に一夏は笑って頷いた。

「そっか〜、一夏ってホントにアタシの事大好きだから仕方ないも  
んね〜」

「ワリイかよ」  
「ううん、全然」

先の授業の時よりも濃い桃色空間を展開する一夏と鈴。

「あ、あはは〜……あの二人随分仲良しだねえ〜」

「……」  
「……」

思わず苦笑するシャルルの横には屍と化した箒とセシリアが転が  
っている。

「やっぱり二人は付き合っ……」

「そんな訳ありませんわ!」

「そっだ、そんな事があって堪るか!」

「わあっ!?!」

シャルルの受け入れてはいけない一言に復活した箒とセシリアは一気に詰め寄り、二人がただの共通の趣味を持つ幼なじみである事。つい先日まで箒を含めた三人でルームシェアをしていただけのクラス代表同士で、放課後のトレーニングで師弟関係なだけである事を事細かに説明し……自爆した。

。

「ところで昼休み、後どんくらいで終わる？」

「15分43秒、まだゆっくり出来るわよ」

「そっか。じゃあ……」

鈴の膝を枕に寝転ぶ一夏にシャルルは目が点になった。

「い、一夏？ 何してるの？」

「昼寝っつー名前の充電。ちなみに鈴は俺の充電器！」

シャルルの疑問に果てしなくアホな事を真面目な表情で言っている。

そんな一夏にシャルルは開いた口が塞がらない。

「……なら、仕方ないわよね。しっかり充電しなさいよね」

満更でもない鈴は嬉しそうに一夏の髪を撫でる。

「そーそー、充電切れたらスリープモードになっちまうし」

簡単に言えば『居眠り』。

午後は整備の実技で、更には厳しい千冬が担当する授業での自殺

行為などする訳はない。

しかし、ソレをツッコむハズの人間は完全にデレデレでひざ枕中である。

「そうだな、寝かせてやろう」

何処から出したのか、箒の手には木刀が握られている。

「私達も眠るのをお手伝いしますわ」

セシリアは愛機の主兵装のライフルが握られ、安全装置セーフティが解除される。

「し、篠ノ之さんもオルコットさんも寝かせるのになんで木刀とライフルが出て来るのかな？」

シャルルは知る事になる。

IS学園に響く一夏の悲鳴。

ソレを気にする生徒はこの二ヶ月でほとんどいなくなっている事を。

。

「ゴメンね、お邪魔しちゃって」

「何がよ？」

気絶中だか昼寝中だか解らない一夏を他所に、鈴はシャルルの突然の謝罪に首を傾げた。

「いやね、一夏がいつも『嫁達と一緒に食べてる』って言ってたか

ら……」

邪魔になっていないかと気を使うシャルル。

しかし鈴は自分を『一夏の嫁』と認識してくれるシャルルに対する悪い感情はなかった。

「べ、別にいいわよ。一夏も『ご飯は大勢で食べた方が美味しい』って言ってたし！」

確かに一夏なら言いそうだとシャルルは思い、鈴の自分に対する印象に安堵の笑みを見せた。

一方で鈴はシャルルの言動が『周囲から一夏の嫁と認められている事』の現れではないかと考え、照れて頬を上気させていた。

「……私が一夏の……悪くない……」

「嫁……一夏さんのお嫁さん……でゅふふ」

更に筈とセシリアもシャルルに言われた『嫁達』の部分に反応し、『自分も一夏の嫁となった』と都合のいい妄想にトリップしていた。

Trick:16 (後書き)

ダメだ。鈴ちゃんと一夏君がバカップルし過ぎてアニメ版メインヒロインすら空気に！

ま、いつか。

おや、宅配便かな？

Trick：17（前書き）

ラウラの宣戦布告、千冬との関係編。

携帯を落として紛失してしまい、昨日戻って来ました。

見てくれている可能性は低いけど拾って届けてくれた方にこの場を借りてお礼申し上げます。

二人の転校生が一組に編入し、その内の一人であるラウラ・ボーデヴィツヒに一夏が宣戦布告した日から五日が経過していた。

IS学園の土曜日は授業が午前中だけで、午後は解放されているアリーナでの実習をする生徒がほとんどで、一夏も例外ではない。

鈴やシャルル達と愛機（箒は訓練機）を纏って一緒にトーナメントに向けた訓練を行っていた。

しかし、一夏達のいる第三アリーナは二つの強大な威圧感プレッシャーがぶつかり合い、異様な緊張に包まれていた。

「……よう、なんか用か？」

沈黙を破り、ISの開放回線オープン・チャンネルから発した一夏の声は飄々とはしているがその眼は怒りに揺れる紅の瞳を正面から見返している。

「貴様は……貴様は教官の完璧な強さを害する存在モでしかない！」

ドイツの第三世代IS『シュヴァルツエア・レーゲン』を装着したラウラ・ボーデヴィツヒは敵意に満ちた言葉を一夏に放つ。

「何だ、貴様は!？」

「いきなり人を『害する存在』等と……先日的事と言い、随分失礼な方ですわね！」

それに対して憤る箒とセシリアだがラウラの視界に二人は写らず、

声すら耳に届いていない。

「教官の実力なら大会二連覇と言う偉業を成し得た事は確かだった……だが貴様のせいでそれは阻まれた！」

拳を固く握り、怒りに震えるラウラの声に第二回 I S 世界大会『モント・グロツソ』決勝の日に起きたとある事件が一夏の脳裏に甦った。

その日、何者かに誘拐され拘束、監禁されていた俺を救ってくれたのは千冬姉だった。

大会二連覇が懸かっていた決勝戦を棄権し、ドイツ軍から齎された情報を元に俺を救出した千冬姉は多くの期待を寄せられていただけに決勝戦棄権は大きな波紋を呼んだ……。

俺はその忘れたくても決して忘れられない自らの一番忌まわしい記憶がラウラが俺に対して激しい敵意を向ける理由だと確信する。

「だから、私は貴様の存在を認めない……認めて堪るか、私は……私は貴様を拒絶する！」

。 。  
明確な意思を露にするラウラ。

しかし当の一夏は何も言わずに赤い瞳を凝視し続ける。

「今日ここで貴様を潰すのなぞ訳もないが、件のトーナメントとやらで必ず貴様を叩き墜としてやる……必ずだ！」

ラウラはそれだけ言つと愛機を待機状態に戻し、アリーナを去つて行った。

「……ふう」

「ちよつと、一夏さん！」

「おい、一夏！」

「おう。なんだよ？」

プレッシャー  
威圧感の源の一人が去り、もう一人の威圧感の源であつた一夏は開放感からではない溜息をついた。

瞬間、セシリアと箒が一気に詰め寄つた。

「『なんだよ？』ではない！」

「そうです！ なぜ何も言い返さないんですの！？」

「アレだけ言われて黙っているなど貴様それでも男か！？」

自らの想い人である一夏が一方的に敵視され、罵倒された。それだけでも腹立たしいのに当人が何も言い返さない事に二人の怒りは爆発寸前だつた。

「ちよ、ちよつと、オルコットさんも篠ノ之さんも落ち着いて……」

「これが落ち着いていられますか！」

「おい鈴、デユノア！ オマエ達もこの軟弱者何か言つてやれ！」

シャルルがなんとか宥めようとするも元来気の強いセシリアと箒は止められず、一夏の態度が気にいらぬ箒は一夏と同じく黙したままの鈴にも呼びかけた。

「……爪はちゃんと切らないとダメじゃない」

「え？」

鈴がそつと一夏の手を取る。

固く握り過ぎた自分の拳は爪が掌に食い込み、そこから流れ出た赤い雫が滴り落ちていた事にその時ようやく気付いた。

「確かに箒達が怒るのも最もね……でもあれが一夏のA・T使い（ライダー）としての在り方なのよ」

「はあ？」

「ッー！」

鈴の一言にセシリアは疑問の、箒は忌まわしそうな表情を浮かべた。

「ストームライダー暴風族が自分の『気持ち』を一番伝えられるのは言葉じゃない。だから黙ってた……そうでしょ？」

一夏の横に並び立つ鈴も正直に言えばラウラの一方的な暴言には怒りを覚えていた。

しかし、一夏の『ライダーである自分の在り方』を誇りとしているその信念は自らもライダーであり、一夏の一番近い所にいる鈴も同じ。

故に鈴も悔しさを堪えて黙っていたのだった。

「ああ。俺はアイツに俺の走り（すべて）をトーナメントで魅せつける……ただそれだけだ」

互いの誇り（エンブレム）を賭けた戦バトルに決意を込めながら拳を握る。

「けどあの娘はライダーじゃない……大丈夫なの？」

鈴の言う通り、確かにラウラはライダーではない。

だからと言って一度決めて吐いた言葉を覆すような事は自分の『道』を曲げる事になる。

そんな事は真っ平ゴメンだ。

「やってみるさ。本気でぶつかり合えば解り合う事のキツカケくらいにゃなるさ」

「……そっか」

「鈴？」

どこか確信めいた口調で告げる一夏に鈴は小さく笑った。

「それでこそアタシの一夏ね！」

「はあ、なんだよソレ？」

「アンタがいつもアタシを『俺の嫁』って言うからそのお返しよ」

いたずらっぽく笑う鈴の笑顔は空を覆う雨雲を吹き飛ばす風のようだと、一夏は思った。

五日前から吹いていた嫌な風すら今は自分の背を押す追い風に代わったような気さえする。

「ああ、後ね？」

「うん？」

だがそれは違った。

「アタシに出来る事があるなら頼りなさいよ？ アタシは何があっても一夏の味方なんだからね！」

追い風……しかも最高にして最強の追い風は既に、いつも一夏の隣から吹いていたのだ。

「おう！　ありがとなー！」

嬉しさはどこか気恥ずかしい感情がむず痒い一夏は照れながらも鈴にサムズアップを返した。

「ふふ、どーいたしましたし……」

「ちょおおおーっとお待ちになって頂けますかしら！？」  
「……ちっ」

そんな二人の間に『嵐』が現れた。

「うお！？　ビックリした……箒もセシリアもどうしたかしたのか？」

「『どうしたのか？』ではない！　人が黙っていれば（私以外の）女に手を握られて鼻の下を伸ばしおつて……この不埒者め！！」  
「はあ！？」

突然大声で割り込んで来た箒とセシリアはかなりご立腹だった。

それもその筈、一夏の態度を共に叱咤して貰おうとした相手は彼の本心を完璧に読み取り、理解していた。

それにその手に触れ、『私の一夏』や『何があっても私は一夏の味方』など自分が言いたかった言葉ベスト10に入るセリフまで言われて、（箒&amp;mp;セシリア視点で）一夏も鼻の下を伸ばしていれば腹も立つと言うモノだ。

しかし、そんな事正直に言う事の出来ない繊細な乙女心とそれで

も伝えたいと言う乙女の本能の衝突のジレンマは『自分以外の女の子にデレデレしている事』への苛立ちとなり、制裁として一夏にぶつけられるのだった。

。

結局あのはアリーナの閉館時間も迫り、解散となった。

「鈴木も大袈裟だな、傷も深い訳じゃないのに……」

『ツバつけときゃ治る』と言ったら鈴木だけでなくシャルルにまで怒られたのには驚いたが、そこまで気にかけて貰えるのは人として恵まれている事だと思う。

それにしても誰が治療するかで箒とセシリアが鈴に文句言っただけで喧嘩していたのはなぜだろう？

「それはまあいいとして……ハラ減った」

腹の虫が間の抜けた声で鳴く。

治療が終わった後、俺は山田先生から白式の正式な登録に関する必要な手続きをするように言われて書類の山と格闘し、今さっき解放された所だ。

と言っても殆どが書名するだけのモノばかりですぐに終わったのだが。

ちなみにその時、今月末から浴場の使用許可が男子にも出た事を山田先生に告げられた。

確かに風呂はキライじゃないわ！

しかし部屋のシャワーで事足りているから別に良かったのだが使

わせてくれると言つなら有り難く使わせて貰おう。

それに、もしかしたらシャルルは喜ぶかもしれないから早く帰って教えてあげるとしよう。

「さて、さつさと帰って鈴とシャルル誘ってメシでも……」

「なぜですか教官!？」

「ん?」

夕暮れに染まる道を寮に向かって走っていた俺は言い争うような声を聞いた。

ふと足を止めて声の聞こえた辺りを見やると、そこには千冬姉とラウラの姿があった。

「なぜこんな極東の地で教師など!？」

「何度も言わせるな、私には私の役目がある。ただそれだけだ」

ラウラは転校初日以来、クラスの誰ともつるまず、会話をしないう孤高ぶりから『氷の転校生』なんて呼ばれている。

だが、俺は初日に頬をひっぱたかれた事に始まり、初日の授業や先のアーリーナでの事。

今の千冬姉の現在の仕事についての不満や思いを声を荒げてぶつけている様からも『氷』とは真逆の『炎』の気質をラウラから感じていた。

「お願いです、教官。再び我が隊でご指導を……ここではあなたの能力は半分も生かされません!」

なるほど……ドイツ出身のラウラが千冬姉を『教官』と呼んだ時点で予想……と言つか解っていた事だが、アイツは千冬姉がドイツ軍にいた時の教え子だ。

あの誘拐事件の後、千冬姉は『借り』を返すべくドイツ軍のIS部隊の教官をしていた。

一年後、帰って来た時にどんな事をして来たのかを聞いた俺に千冬姉はこう言った。

『そうだな……ライダー（オマエら）風に言うなら《羽》の使い方を教えて来た。そんな所さ』

何があつたかは知らないが、俺が『超獣』に憧れたようにアイツも千冬姉に強い憧れを抱いたのだろう。

それ故にその経歴に傷を着けた俺がブツ潰したいっつーワケか……。

「そのキモチは痛てー程に解つちまうな……」

正直言つてあの日の無力さ加減は俺自身もヘドが出る程にムカつているのだ。

「大体、この学園の生徒達など教官が教えるに足る人間ではありません！ 意識が甘く、危機感に疎く……」

「ISをファッションか何かと勘違いしているヤツラに私が時間を割かれるのが気に喰わない。か？ 少し見ない内に偉くなつたな。

十五才の小娘がもう選ばれた人間気取りとは恐れ入るな」  
「ッ……！」

凄みを効かせた千冬の声と覇気には、さすがのラウラも次の言葉を出せずに途切れたままだ。

「わ、私は……」

ラウラがようやく絞り出したその声は圧倒的な力と大切な人に嫌われるかも知れないと言う二つの『恐怖』に震えていた。

「話は終わりか？ ならば寮に戻れ」

ラウラは何も言わずに千冬姉の前から走り去って行った。

「さて、その男子。盗み聞きなんて異常性癖は感心しないぞ？」

「異常性癖で……女の子がそんな言葉言っちゃいけませんぜ、織斑センサー」

「授業中だろうと構わずイチャつくバカカップルよりはマシだ」

うぐつ、耳に激痛が走りやがる。

別にイチャついてるワケじゃなくて、鈴と一緒に『恋愛の道』ラブ・ロードを走ってるだけなのに。

「それをイチャついていると言うのだバカめ」

思考を読まれた!？

「ふう……月末のトーナメント、ボーデヴィツヒに『道』を魅せる事も出来ずに初戦敗退なんてアホなマネをするなよ？ さつさと帰って復習の一つでもしろ」

「わかってますヨ……」

一応、座学も頑張ってるつもりだけど宿題の時とか『教科書に催眠術をかけられてる気がする』なんて言ったらどうなるかな……。

「そうか……わかってるならいい」

不敵な笑みを見せる千冬姉。  
今だけは『教師』ではなく『姉』として助言をしてくれているよ  
うだった。

きつと俺はこの姉に永久に頭が上がらないんだろうなあ……。  
まあ、上げるつもりもないんだけど。

「あ、そうだ。織斑先生、自主トレーニングの走り込み為に夜間外出の許可をお願い申し上げます！」

後からまた取りに行くのはメンドクサイので今頼んでしまう俺に  
千冬姉は呆れたように溜息を吐いた。

「全くちゃっかり者め……まあ、いいだろう。その代わり門限は守  
れよ？」

「ウィッス！」

刹那、俺の頭に手刀が叩き込まれた。

「返事は『はい』だ、馬鹿者」  
「は、はいッス……」

おかしい、こんな事もあるのかと頭蓋骨を仕込んでいたハズなの  
になんなのだこの痛みは？

恐るべし、千冬姉……がくつ。

Trick：17（後書き）

NG編。

一夏君をはっちゃけさせ過ぎた結果。

。

「異常性癖は感心しないぞ」

「ちよつ、ちふ……織斑先生！俺は到って普通の美乳と腋、あとツンデレツインテール萌え。ケモ耳属性で八重歯に魅力を感じるチヨメチヨメする時は服は半脱ぎが良くて、恥ずかしがる表情にグツと来るSなだけです！！」

「……」

「ああ、そんな目で俺を見ないで！蔑むような視線にハアハア出来る上級者じゃないの！！」

「……全く、鳳はコイツの何処に惚れたのやら……って言うか、育て方をどこで間違っただ、私は……」

。

話の軌道修正が難しそうだし、雰囲気こそぐわないので没。

某口先の魔術師並の固有結界をいつかさせてみたい今日この頃。

蝸でなく鈴虫がなっています。

Trick:18 (前書き)

筭の覚悟とラウラVS嫁+ 編。

今更ですけどMFコミックスのISS3巻の43Pで一夏とシャルルが握手してるコマをよくみたら左手ですね。

一巻の一夏を見ても目付き悪いし……コミックス版の一夏ってヤンキーっぽいッスね。

互いの誇り（エンブレム）を賭け、一夏とラウラが勝負に臨む月末の学年別トーナメント。

そのトーナメントに纏わる『とある噂』がIS学園の生徒達の間で真しやかに囁かれてる事に頭を抱える一人の女子高生がいた。

「……………どうしてこうなった……………」

その噂とは『トーナメントで優勝した暁には噂の男子生徒・織斑一夏が優勝者のどんな望みでも叶えてくれる』と言うモノで、その話を知らない生徒は当時者である一夏だけである。

だがこの言い方には少し語弊がある。

正しくは『トーナメントで篠ノ之箒が優勝した暁に、織斑一夏が彼女の望みを叶える』と言う約束で、本来なら箒と一夏だけが知っている話のハズだった。

「なぜだ……………なぜこの話を上級生所か全校生徒が知っているのだ……………」

箒の疑問に答えるなら理由は箒自身にある。

あの時、箒が約束を（一方的に）取り付けた声は一夏が注意した通りにやや大きく、寮内にいた生徒達に聞かれていた。

その結果、全校の生徒が知る所となった。

言い方は酷だが、要は『自業自得』だった。

「くっ……まあ、いい。私が優勝すればいいだけの話だ」

気を取り直し、運悪く訓練機を借りる事が出来なかった箒は一人竹刀を振るう。

「だが今度こそ、あの時のような不様はしない……！」

小学四年生の頃から箒は引っ越しと転校を繰り返していた。

理由は姉の篠ノ之束がISを開発した事だった。

彼女は世界中からその身柄を狙われ、両親と箒も身内と言う事で重要人物保護プログラムが適用された。

その為、政府により転居を繰り返させられ、一夏から来た手紙さえ返せなかった。

更に両親とすら別々にされた彼女だったが、一夏との繋がりを求めて剣道だけは引っ越してからも続け、その実力は全国大会で優勝する程にまで上がっていた。

だがその結果に箒は喜ばなかった。

それは実妹と言う事で執拗な監視と幾度とない聴取をされ、心身ともに参っていた事から来る『誰かを叩きのめしたい』と言う憂さ晴らしでしかなかったからだ。

自己嫌悪に陥った箒は優勝を逃した対戦相手の涙を見て更に絶望した。

（あの時の私は剣道をしていなかった……あんなモノ『強さ』でも

なんでもない……ただの暴力だ！)

今度こそ『強さ』と言うモノを見誤らず、己に打ち勝つ。  
その為に筈は再び竹刀を振るった。

。

その頃、第三アリーナでは月末のトーナメントに向けて特訓をしようとした鈴はセシリアと模擬戦をする事となった。

「そう言えば何度か一緒に訓練してるけどこうやって戦うのは初めてよね」

「そうですね。丁度良い機会ですし、どちらが優雅で強く……一夏さんに相応しいかはつきりさせてあげますわ！」

ズビシッ！ とセシリアは鈴を指差し、メイン兵器のライフルを展開する。

「優雅さなんかどうでもいい……けど強いのも、一夏に相応しいのもどっちもアタシよ！」

鈴も双刃の青龍刀《双天牙月》をその手に展開、衝撃砲《龍砲》も準戦闘待機状態に起動する。

「では……ッ!?!」

臨戦態勢に入っていた鈴とセシリアは突然飛来した超音速の弾丸を回避した。

「どつ言つつもり？ アンタの相手はアタシじゃなくて一夏でしょ

「？」

鈴の視線の先には漆黒の機体、『シユヴァルツェア・レーゲン』を纏うラウラの姿があった。

「中国の甲龍にイギリスのブルー・ティアーズか、データで見た時の方がまだ強そうではあったが……肩慣らしくらいにはなるか」

ラウラの挑発的な物言いにセシリアが口元を引き攣らせる。

「なんですの貴女？ わざわざドイツからいらした揚句、自ら蜂の巣になりたいなんて面白い事をおっしゃいますわね？ って鈴さん、どちらに行かれますの！？」

「行きましょセシリア、アタシ達が相手にする事ないわ」

呆れたように背を向ける鈴を見てラウラは嘲笑を浮かべた。

「なんだ、怖じ気づいたか？ 人数だけが取り柄の国は腰抜けを専用機持ちにする程人材に不足しているようだな」

完全に見下しているラウラに鈴は振り返りもせず言葉返す。

「残念ね、そんな挑発に乗る程安くないのよ。それに一夏と戦う前にアタシ達と戦ったから調子が出なくて負けた、なんて言うて欲しくないだけよ」

専用機を持つ代表候補生同士の戦いともなれば互いに無傷では済まないし、程度によってはトーナメントにすら出られなくなる。

そんな鈴の気遣いはラウラにとって不快だった。

「なんだ？ まるで貴様らにこの私が手傷を負わされ、その上織斑一夏に負けて見苦しく言い訳までするような言い方だな？ 笑わせてくれる」

嘲るラウラは鈴が今度は振り返った事に身構える。

しかし鈴は龍砲を待機状態に戻し、双天牙月まで格納する。クローズ

「一夏はアンタとの戦い誇りを賭けた。その戦いを経てアイツはまた一つ空うへに行く……アタシは一夏が自分の道を進むのを邪魔したくないの、だからアタシはアンタと戦わない」

鈴の言う通り、一夏は既に誇り（エンブレム）を賭けてラウラとの戦いに全ての意識を集中させている。

そんな一夏の前にラウラと戦う事は鈴にとって一夏の誇り（プライド）を汚す事と同義だった。

「ふん、下らん……そう言えば貴様はあの織斑一夏と恋仲らしいな」「ええ、そうよ？ それがどうかした？」

『恋仲』の部分は聞き捨てならないが今は黙するセシリア。だが内心、後から一夏とOHANASHIしようかと思っただがこの後のラウラの発言にそんな事は空の彼方へと消え去った。

「あんな下らない種馬を相手に恋愛ごっこしてるような輩はさっさとIISを降りろ」

セシリアは鈴と自分の中で『何か』がキレた音を聞いた。

「……今なんて言った？」

怒りを滲ませた鈴の声に、ラウラさも楽しそうに更なる挑発をかける。

「ふっ……あんなA・Tなんかで遊んでいるようなクズやそんな輩を相手に恋愛遊びをやっているようなヤツが乗るポンコツISなどコアの無駄だ、そう言った」

その直後、鉄骨が抜切れるような音と衝撃。  
そして一陣の風がラウラと漆黒の機体のボディを叩いた。

「……トーナメントでアタシ達と当たらないように祈るときなさい」  
「私達は一夏さんみたく優しくありませんからね」

音と衝撃、そして突風の正体は右肩に備えたレールガンを龍砲とライフル射撃によって破壊された事だとラウラは即座に理解した。

「……どう言う意味だ？」

ついさっきまでの嘲笑は消え、一夏に向けていたモノに近い氷のように冷たい敵意を鈴達に放つ。

「一夏は自分を認めさせる為に戦う、けどアタシ達はアンタを叩き潰す為に戦う……無傷で済むなんて思わない事ね」

「ッ!？」

鈴の背後に浮かぶ、龍を従えた仙女の技影にラウラは驚いたような表情を見せるが怯むは事ない。

「……」

「……」

「……………」

鈴とセシリア、そしてラウラは何も言わずに睨み合いを続けている。

数秒か数分かが経過した後、鈴はラウラに再び背を向けた。

「……………行きましょ」

「ええ」

「……………ふん」

去り行く鈴達を見ていたラウラはふと視線を足元に向けると驚愕にその目を見開いた。

「……………馬鹿な……………この私が……………」

ラウラは無意識の内に片足を後ろに下げていた。

つまりそれは鈴に気圧され、怯んだと言う事を如実に表していた。

「……………そんな……………そんな事が……………」

無意識にせよ気圧され、後ずさる事はラウラにとって『敗北』を意味する。

ラウラにとって『敗北』とは『力のない弱い事』であり、『力こそが強さ』とと思っている彼女が今さっき『軟弱者相手に恋愛ごっこしているような雑魚』と軽んじた相手に後ずさるなどあってはならない事だった。

故にラウラの行動はたった一つ。



ワイヤーだけではなく、ラウラは自分の身体まで静止している事に気付く。

まるで『時』が止まっているかのように。

「時よ……」

そんなラウラの耳に怨敵の声が再び響く。

「動き出せ」

その声の通りにラウラの身体も含めた全ての『時』が再動する。

静止する直前までと違うのは勢いを無くし、重力に従って地に落ちたワイヤーブレードとその切っ先が完全に捕らえていたハズの鈴の姿が消えている事だ。

「……報告書にあったこれが『時』とか言う三文手品か……織斑一夏！」

体制を立て直し、振り向いたラウラの前には鈴を横抱きに抱える一夏とセシリアを守るようにその前に立ち、アサルトライフルとマシンガンを両手に備えたシャルルの姿があった。

「御明察。A・Tの技なんか知ってるとは驚いたぜ……まあ、武装の一個ブツ壊されたぐらいでブチ切れて背後から攻撃するっつードイツ人の気の長さには劣るケドな」

『炎の道』を走る者が使う技の一つ、『時』。

それは相手の動作の基点をA・Tで加速した蹴りや平手で相手の

動き出しの基点を止め、更に顎の先端や後頭部、首筋の根元の神経節を撃つ事で運動中枢の自由を完全に奪うこの技は『時の支配者』アイオーン・クロックの二つ名を持つライダー程高い精度ではないが一夏もそれなりに得意とする技だ。

それを知っているラウラは実際に喰らったこの技はかなり厄介なモノだと認識し、それを感じた一夏は不敵な笑みを浮かべた。

「いくら凰の危機とは言え、アリーナのバリアを破壊するオマエの嫁バカさ加減にも十分驚きだ」

「へ？ ……さのっ!？」

いつの間にか一夏は背後にいた千冬の拳骨をその頭に叩き込まれた。

「模擬戦は構わんがここまでされては黙認しかねる、この決着はトーナメントで着ける。それまで一切の私闘は禁止だ。解散!!」

千冬が強く叩いた手の音は銃声のように鋭く響いた。

。

「ケガとかねーか？」

「……」

「……鈴？」

ピットに戻ってから何も言わない事に焦りを覚えた一夏が俯いたままの鈴に呼びかけた瞬間、鈴は勢いよく一夏に抱き着いた。

「お、おい、鈴!？ どうした、やっぱどっか痛いのか!？」

「……ちがつ」

服を握り絞める鈴は一夏の胸で声と身体を小さく震わせていた。

「何泣いてんだよ？」

優しく尋ねる一夏に鈴は涙ながらに答える。

「……アイツ……ひっく……いち、かの……事、バカに……えぐっ……」

大好きな一夏をバカにされてもその誇り（プライド）を守る為に戦う事すら出来なかった鈴の怒りや悔しさは堪えきれずに涙となって溢れていた。

「後ろ半分くらいだけだけど聞いてたよ………つたく、俺よかナタクをバカにされた事を怒れよ。ナタクのヤツ拗ねちまうぞ？」

『ナタク』とは鈴の愛機・甲龍シエンロンに一夏が付けた愛称なのだが、その名で読んでいるのは名付けた本人だけである。  
ちなみに一夏が本来の『ナタク』の愛称を持つ機体とそのパイロット、そしてその中の人のファンだったりする事は全く関係ない。

「甲龍は……えぐ……いい子、だから……ぐすっ……そんな事……ない、もん……ひっく……」

「そうか………そうだな。ありがとな、鈴……俺なんかの為にさ」  
「うう、うわあ〜〜ん！」

泣きじゃくる鈴を抱きしめ、慰めながら撫でる。

ここまで自分を想ってくれる相手を好きになれた事が不謹慎なが

らも堪らなく嬉しいー夏だった。

Trick : 18 (後書き)

今回書きたかった部分は一夏君に抱き着いて大泣きする鈴ちゃん。  
今回はあんまりバカツプルしてない気がしてモノ足りない。

シリアスなバカツプルはどう書くんでしょうか？

誰か教えてください。

m ( ) ( ) m

Trick:19 (前書き)

正体判明とタッグ結成編。

鈴とシャルル、どっちにするか三日悩みました。

「はい、ちーん」

泣き止んだ鈴の鼻にティッシュを添える一夏を『鈴さんばかりズルイですわー!』と憤るセシリアの横で見つめるシャルル。

その内心はセシリアと同じく、一夏に誰よりも愛される鈴がとても羨ましかった。

(僕が鈴より先に一夏と普通の出会いをしてたらな……)

シャルルはふと、先日の夜の事を思い出した。

(あの日は僕の人生で最悪の部類に入る……でも今までの人生で最良の日でもあったよね……)

。

一夏とラウラが第三アリーナで宣戦布告しあった土曜日の夕方、1025号室。

事の発端はトーナメントに向けて発破を掛ける千冬と別れた一夏が部屋に戻り、汗を流すべく浴室のドアを開けた所に風呂上がりのシャルルと鉢合わせた所から始まる。

「おっと、ワリィ、シャルル。まだ入ってたの……か？」

「へ?」

本来ならシャルルも一夏も少し驚くだけで気にする事もなかったような些細な一コマ。

……しかし、男にあるハズのない（ある人曰く）『神様が女性に作った奇跡のカタマリ』がシャルルの胸で揺れていた事がそれを完全に否定していた。

女性の下着なんかには姉がいた事で耐性のある一夏でも、さすがに生身の女性……しかも裸への耐性なぞあるハズもなかった。

A・T漬けの生活をして来た故に、通称『男の聖書』やその手のDVD等に興味を持たずにほとんど見た事もなかった。

また、嫁と公言して憚らない鈴がいても、まだ高校生である二人はキス以上に到らずにいる。

「……ぶはあっ！」

「い、一夏あっ!?!」

そんな一夏が鼻血を噴いて気絶しても不思議ではなかった。

「どうしたの一夏!? 大丈夫……ぶ？」

更に一夏を夕飯に誘う為に部屋の前に来ていた鈴がシャルルの悲鳴を聞いて飛び込んで来た事も。

そしてシャルル・デュノアが『女の子』だと言う事が露見した事もきつとおそらく『運命』と呼ばれるモノだったのだろう。

。

「ホンッ……トーに申し訳ない！」

「い、一夏、もういいから！ 本当に僕はもう気にしてないから！」

「え？ 何？ シャルルは男なのにアタシよりおっきいのに一夏と相部屋で……え？ 何？ なんなの？」

一時間後、1025号室内には目覚めてから土下座しながら10分近く謝り続ける一夏とそれをなんとか止めようとするジャージに着替えたシャルル。

そして、未だ混乱中の鈴の姿があった。

なんとか落ちついた後も気まずい沈黙が部屋の重力を倍加しているように三人は感じていた。

「走りに行こう」

重い空気を破るように言った一夏は愛用のA・Tとシャルルの手を取った。

「一夏？」

「A・T使い（ライダー）同士が気持ちを伝えるのは言葉じゃない……走る事が気持ちを一番上手く伝えられるの」

「鈴さん……」

鈴も夕飯の後、走りに行く事が三人の日課にもなっていたので愛用のA・Tを既に装着していた。

ちなみにシャルルもA・T使いだったりする。

父であるデュノア社長の指示で広告塔と一夏と白式のデータを取

る為にさせられた男装と平行してより近付き易くする為に一夏が暴風族である事を利用し、A・Tも男らしくする訓練の傍らでやらされていた。

知らない相手の好きなモノさえ騙す事に利用するのに抵抗があったシャルルは最初は男装なども含めて嫌でしょうがなかった。

しかし、最初は転んだりしていたA・Tも次第に上達して行き、ISとは違う『飛ぶ』事に魅了されたシャルルはいつしかA・Tが好きになっていった。

IS学園に来て一夏と接触した後、それは加速して行く。

一夏や鈴と走っている間は自らに課せられた命令すら忘れていられたくらいだ。

(一夏達と走れるのもこれが最後になるのかな……)

シャルルはA・Tを装着するのが少し悲しくなった。

。

夜風に吹かれながら疾走する三つの影。

一夏と鈴、シャルルは何も言わずにひたすら走っている。

ルートは学園のシンボルにもなっている『ISタワー』の頂点を目指しているらしい。

シャルルは走りながら母が亡くなってからの二年間の事を思い出していた。

父に引き取られた時、自分が愛人の子である事を知らされ本妻に

『泥棒猫の娘』と罵倒されて殴られた事。

IS適性が高く、非公式でだがデュノア社のテストパイロットをする事になった事。

第三世代機の開発が遅れているデュノア社が経営危機に陥った為に男装させられた事。

A・Tに魅了された事。

そしてIS学園で一夏と出会った事。

全てを思い返した時、気付けば目的地であったISタワーの頂点にいた。

シャルルは黙って俯く鈴と固く拳を握り絞めている一夏の姿を見た。

「二人が怒るのも当然だよね……」

覚悟を決めて瞳を閉じる。

(殴られても仕方ないよ、これは皆を……一夏を騙してた僕の罰なんだ)

しかし何かを殴り付ける音はシャルルの前から聞こえて来た。

「一夏!？」

鈴の声に目を開けたシャルルが見たのは己を殴り付けた一夏の姿だった。

「い、一夏！？ 何やってるの!?!」

「……すまねえ」

「え?」

シャルルは理解出来なかった。

なんで一夏が自らを殴りつけたのかも、何故一夏が謝るのかも。

「シャルルがそんな苦勞背負って、悩んでるのにも気付かねーで能  
天氣に笑って友達面してて…… 本当にすまねえ」

「一夏……」

シャルルは何と言えればいいのか解らなかった。

一夏は解っているのだろうか？ 自分は彼を利用しようとしていた事を。

そして謝らなければいけないのは自分である事を……。

「今のはケジメだ。ダチの悩んでるのに気付け無かった不義理のな  
「そんな……嘘ついて、騙してたのは僕の方なのに……」

本来殴られるべきは自分なのだ。

しかし、目の前の相手は自分の事を本当に友達だと今でも信じて  
くれていた。

「そんなんシャルルの意思じゃねー事くらい解る！ シャルルは全  
ツ然悪くねえ!!」

「ッ!?!」

シャルルは泣きそうだった。

本来なら罵倒され、殴られても文句は言えない。

それなのに目の前の『織斑一夏』と言う男は騙していたハズの自分の苦悩に気付かなかつた事に自らに怒り、今でも信じてくれる。

その事が嬉しくもあり、いくら他に『道』が無かつたとは言え生まれてから未だ二回しか会い、話した事のない父の命令に従って騙していた事がとても苦しかった。

「ねえ、アンタはソレでいいの？」

不意に今まで黙っていた鈴が口を開く、その声は堪えている怒りのせいで震えている。

シャルルは本国に連れ戻されるだろうと予想している。

フランス政府も事の真相を知ったら黙ってないだろう、代表候補も降ろされた後は良くても牢屋行き。

そんな終着点しかない事には一夏も鈴も憤りを抑え切れずにいる。

「仕方ないよ……」

諦めたようなシャルルの答えに『デュノア社長は例え娘がそんなつても助ける気はない』、そう言う事だと鈴は解釈し……。

「なによソレ……」

「え？」

キレた。

「なによ、そのクソ親父！ 自分の娘を一方的に『たまたまI S 適応があつたから』って利用するだけ利用して後は知らん顔？ フザ

「ケんじやないわよ!！」

「り、鈴さんは僕の事を怒ってたんじゃないの?」

激昂する鈴をシャルルは戸惑いと怯えの表情で眺めている。

「怒ってるわよ! アタシを差し置いて一夏と同棲してるなんてズルイじゃない!！」

「怒るポイントそこなの!？」

予想斜め上の発言にシャルルは思わずツッコミをいれてしまった。

だが一夏の言う通り、シャルルは誰かを騙してそれを裏で嘲笑うような事が出来る人間じゃないのは鈴も理解している。

この五日間と言う短い時間でも一緒に走った二人はシャルルにも強い信頼を寄せていた。

鈴が気に入らないのは娘が殴られても心配一つしない、自分で蒔いた種を自分で刈ろうともしない。

いくら親だからって子供の自由を奪い、将来が破綻するような命令して、生き方を選ぶ権利を邪魔するような親ヤツに黙って従ってるシャルルの弱い所だった。

「シャルル、そんな親の風上にも置けないヤツの所に帰る必要ない……ここにいろ」  
「え?」

「特記事項第二十一だよ。この学園にいる三年間、生徒は外部のいかなる国や組織なんかからの介入を受けないってヤツだ」

首を傾げるシャルルに一夏は鈴や山田先生との補習で必死に覚え

た事を自分で気持ち悪いと思う程にスラスラと諳そらとじてみせた。

「三年も時間があれば何か方法を見つけれられるさ。少なくともシャルルの味方はここに二人はいるし、別に急ぐ必要もないんだしな」  
「そーゆー事！ …… それにしても一夏ってばよく五十五個もある特記事項をよく覚えられたわね」

「まあな！ …… ってなんか俺バカ扱いされてない？」

「気のせいよ。空エラヘツドっぽ頭」

「空頭、言っちなー！」

さっきまでの暗い雰囲気吹き飛ばそうと漫才のようなやり取りを見て最初は呆気を取られていたシャルルは、ようやく笑った顔を二人に見せた。

「俺達はシャルルの味方だ。これからシャルルが困ってたらすぐに助ける、いらないうつても無理矢理手助けしてやるから覚悟しろよ？」

イタズラっぽく笑う一夏の言葉にシャルルの涙腺は限界を突破した。

一夏に抱き着いたシャルルは子供のように大泣きした。

「……もう、今回だけは特別なんだからね」

少し不機嫌ながらも鈴は泣きじゃくるシャルルの頭を撫でていた。

。

「シャルロット、それが僕の……お母さんのくれた本当の僕の名前。二人にはそう呼んで欲しいな」

今まで溜め込んでいた涙を流し尽くし、目尻を拭いながらシャルル、いやシャルロットは告げた。

「シャルロット、シャルロット・デュノアか」

「綺麗な名前ね。改めてよろしく、シャルロット」

「うん！」

憑き物が落ちたように清々しい気分で笑うシャルロット。

彼女は一夏の走りから伝わって来た『何があっても守ってやる』  
と言う気持ちに嬉しさと胸の熱く、激しい高鳴りを感じていた。

。

「……ん？」

回想に耽っていたシャルルの耳が鳴りのような音を捕らえた。

そしてそれは徐々にシャルル達のいるピットに近付いて来ている。

「何だろ、この音？」

「デュノアさん、どうかしましたの？」

セシリアが尋ねた次の瞬間ピットのドアが文字通り爆音を立てて吹き飛んだ。

そして雪崩込んできたのはバーゲン会場を彷彿とさせる大量の女生徒達だった。

「……………織斑君、デュノアく……って、なんてこった  
あーっ！……!?!?!?」「……………」

突入して来た女子達の何名かは涙目の鈴と一夏が抱き合っているのを見て鼻血を噴きだしたり、絶望に打ちひしがれたりしていた。一方、残りの女子達は一夏とシャルルを取り囲んで無数の手を突き出していた。

ちなみにその時セシリアが跳ね飛ばされたのだが誰も気付いていない。

「なんだ、なんなんだ一体!？」

「どうしたの皆、ちよつと落ち着いて!」

「……これ!」「……」

女子達が眼前に突き出した一枚の紙を一夏が受け取り、鈴とシャルルの三人で内容を読み始める。

「えーつと、『学年別トーナメント、ルール変更のお知らせ』」

それは参加者が多数出た事と、より実戦的な模擬戦を行う為に二人一組で参加する事が必須となっているモノだった。

一夏達を読み終える前に鈴の声がピット内に響いた。

「一夏はシャルルと組みなさい、いいわね」

「!?!? ……そう言う事か、了解。シャルル、いいよな?」

「う、うん。こつちこそよろしくね、一夏!」

最初は驚いていた一夏だが、シャルルの正体を隠す為と瞬時に理解して即座に了承した。

女子達も『他の女子と組まれるよりは……』『男同士……ハアハア』と納得(?)して撤退して行った。

中には一夏と鈴が組まない事を残念がる女子達と他約二名がいた事を追記しておく。

「……な、なぜ私ばかりこんな目に……ぐふっ」

そして皆から忘れられた英国代表候補生は血を吐いて気絶していった。

Trick:19 (後書き)

二日間かけても上手く書けなくてエア・ギアの16巻、イツキV  
Sリング編を見た後に一時間半で書き上がるとか……

それに今回もバカップル描写があまり入れられなかった……orz

Trick:20 (前書き)

トーナメント表発表と覚悟と激励編。

鈴の同室相手ティナ・ハルミトンさん登場。  
ちよつとキャラ改造してしまいました。

後、更新遅くてすみませんです(――;) )

六月最終週。

IS学園は月曜日を迎え、学年別タッグトーナメントが開始された。

三年生にはスカウト、二年生には成果の確認。

一年生も上位入賞者のチェックなどを目的に各国政府関係者、研究員、企業エージェントなどが来場しているとシャルルに聞いたが、正直俺は興味がないのでどうでもいい。

来賓の案内を始めとした様々な雑務をこなした俺を含めた全生徒達は今更衣室にいる。

一応言っておくがちゃんと男女別々(?)だ。

まあ、そんな事より俺が気になるのはボーデヴィツヒとの対戦だ。

ボーデヴィツヒが鈴とセシリアにケンカを吹っ掛け、鈴の機転でシャルルとタッグを組んだあの日。

あの後、鈴はこんな事を言っていた。

。

『もし先に当たったらアタシがアイツをブツ飛ばしちゃうから!』

『じゃあ、その上でこないだの決着だな。今度こそ俺が勝って』  
ダ  
ーリン(はあと)『って呼ばしちゃう』

『あ、アホお〜……』

。。  
うむ、やっぱり元気っ娘な鈴は恥ずかしがる表情もイイ……って  
違う！

……事もない。

鈴が可愛いのはこの世の真理。

異論があるなら俺を鋼フルメタルな錬金術師の『あの扉』の所に連れて行っ  
てから言いなさい。

話を戻すが俺が気になるのは組み合わせの結果だ。

それ次第では俺とボーデヴィツヒが戦えるのは下手したら決勝戦  
までお預けとなり、最悪の場合俺かボーデヴィツヒが対戦前にトー  
ナメントを敗退する可能性も無いワケじゃないのだ。

やっぱりあの時、鈴にちよっかい出した時点で白黒着けときゃ良か  
ったかな、等と考えていたら更衣室内に設置されたモニターが起  
動した。

「いよいよだね」

「ああ。できれば最初に行きたいな。ケンカっつーのは出たトコ勝  
負、篠ノ之……じゃない、四の五の考えてたって勢いが鈍る」

ふと漏らした呟きにシャルルは俺らしいと言って笑った。

「僕は手の内を早目に晒しちゃうな、ってマイナスに考えちゃっ  
てたよ。やっぱり一夏がいると心強いや」

「ハッ、ソイツはお互い様だろ？俺の方こそ頼りにしてるぜ」  
「うん！」

互いの拳を打ち合わせるとモニターがトーナメント表を提示した。

「一夏、対戦相手が決まったみたいだよ。……え？」

「……ハッ、是非も無し！」

モニターを見たシャルルは驚きに目を見開くが、逆に俺はさっきまでの心配が徒労に終わった事に笑みが浮かぶ。

そして神サマに愛されて……いや、むしろ見捨てられたかのような俺の『運』にどこか嬉しさに似た感情が沸き上がった。

。

一年生の部・第一試合。

【織斑一夏&amp;シャルル・デュノアvsラウラ・ボーデヴィツヒ&amp;篠ノ之箒】。

。

「  
……」

一夏達の隣、本来の倍の女生徒を収容してごった返している女子更衣室。

その中でもラウラ・ボーデヴィツヒと篠ノ之箒のいる一角は他の生徒が近寄れない程の冷気を放っていた。

(なんとと言う組み合わせだ……)

所が箒は冷静沈着を装いながらも、内心は真逆に嵐のように荒れ

ていた。

ペア参加が決定した事を聞いた篤は一夏と組む為の誘い文句を考  
えていたら夜になってしまい。

駄目元で誘いに行った。

。

『どうしても言うならペアを組んでやるぞ』

『あー、ワリイ。俺もう申し込みまで済ましちまったんだ』

『何だと!? 相手は誰だ、まさか鈴ではないだろうな!?』

『な、何怒ってるから知らねーけど、相手は鈴じゃねーよ』

『そ、そうか……では誰と……!』

(もしや……私か!? ま、全く、事後承諾は感心しないが誘うよ  
り先に申し込みを済ますとは余程私と……)

『シャルルと組んだ』

『そうかそうか、鈴ではなく私と……何?』

『違っつて、篤じゃなくて俺が組んだのはシャルルだ。篤は誰と組  
んだんだ?』

『……』

。

その後、うっかり八つ当たりの正拳を腹に叩き込んで悶絶する一  
夏をほったらかしにして自室に戻った篤はふて寝。

一夏が(勝手な妄想による期待を)裏切った怒りでペアの事を締  
め切り当日まで忘れていた篤は結局、同じく抽選で決める事となっ  
ていたラウラと組む事となった。

(戦力として不満はない、それどころか十二分過ぎる……しかし……)

…)

箒とラウラは全く意見が合わない。

ラウラは箒を戦力として見ないどころか話すら聞かず、あまつさえ『邪魔しなければそれでいい』などと言われては反りが合わないのも仕方ない。

そして、何より箒が気に入らないのはラウラが『力』強さ』だと思っている所だ。

それは全国大会を制覇した時の最も嫌な自分自身を見せられているような気がして、箒はラウラに対して近親憎悪を抱いていた。

(だがそれは今は考えないでおこう……)

そうしなければ戦えない。

剣は己を写す鏡、迷いや戸惑いは剣を鈍らせる。

それは自らを敗北いや、死へと誘う。

(私は何があんでも優勝しなければならんだ……一夏を……一夏を『あんな目』に合わせない為に！)

箒は組んだ腕に力を込め、集中するように瞳を閉じた。

。

「結局アイツの相手は一夏だったわね」

「まあな」

早目にピットに向かおうと更衣室を出た俺達に声をかけて来たのは鈴だった。

その隣には相方、ティナ・ハルミトンさんの姿もあった。  
二人は俺達の後、第二試合が初陣で、ピットへの移動がてら俺達の激励に来てくれたらしい。

「いきなり一年最強のボーデヴィツヒさんと当たるなんてデュノア君も大変だね」

「確かにね。でも聞いた話なんだけど、トーナメント初戦はありえないぐらいの強敵がいんだって。確かに気合いも入るし、勝てば勢いもつく。他の参加者よりも心理的にも優位に立てるしね」

「おお、強気な発言！ カッコイイねえ、惚れちゃいそうだよ」

シャルルと話すハルミトンさんは鈴と同じクラスにして寮でも同室のアメリカからの留学生だ。

鈴曰く俺と鈴が一緒にいるのをいつもニヤニヤしながら鼻血を流し、砂を吐きながら濃いめのブラックコーヒー片手に覗いているらしい。

時折『ユニバース！』とか叫んでいるとかいないとか。

そんな中、鈴が少し恥ずかしそうにシャルルに話しかけた。

ちなみにハルミトンさんはなぜかそんな鈴と俺を交互に見ながらニヤニヤしていた。

「あ、あのさ、シャルル、ちょっと一夏借りていい？ すぐ済むから」

「うん、別に構わないけど……」

「ありがとう！ 一夏、ちょっと来てー!!」

言うや鈴は俺の手を引っ張って今しがた出たばかりの男子更衣室（仮）に入っていく。

まあ、試合までまだ時間はあるから問題ナッシングだ。

「なんかよくわからんけど了解。シャルル、ハルミトンさんと先にピット行っててくれ」

「解ったよ。じゃあ行こうかハルミトンさん」

「りょーかいであります隊長！ あと二人ともティナでいいよ。じやあ鈴、がんばってねー」

プシュと音を立てて自動開閉ドアが閉まるとそこは二人だけの密室となった。

うーん、ヤバイな。こんなラブコメラノベみたいな状況、ドキがムネムネする。

「い、一夏？」

「なんじゃらほい？」

「一夏、先に試合行っちゃうじゃない？ その直後に試合だから今の内に気合い入れて欲しいの」

「気合い？」

俺の脳裏に元気があれば何でもできる某プロレスラーが出現する。

「違うからね？」

「またもや思考が読まれただど？」

「まあ鈴は俺の嫁だし、以心伝心。」

「ツーカーの仲ってヤツだな。」

「後ろのは微妙だけど、それは間違っってないわ！」

キリッとした表情で言い切る鈴は性別が逆であっても惚れ直していただけるう。

軽く咳ばらいしてから改めて本題に入る。

「あ、あのね……ぎゅ、ぎゅーってして欲しいんだけど……ダメ？」  
「……」

前略、嫁が可愛いすぎて生きるのが楽しいです。

「……そんな事で遠慮すんなよ、お安いご用だったの」

両手を広げてあげたら『お、おじゃまします』なんて言いながら俺の胸の中に入って来た鈴の背中にそつと腕を回す。

こんなちっちゃくて、力を入れたら簡単に折れてしまいそうな程に細い身体で専用機を持つ代表候補生になるなんてどれだけ頑張ったんだと改めて思う。

柔らかくて暖かい……よくは知らないけどこれが女の子特有の感触なのだろうか？

まあ、鈴のしか知らないし、他の娘はどうか知る気もないが。それにしても鈴ってイイ匂いがするなあ。

「……ありがと、バッチリ充電出来たから……もう、いいよ？」  
「ん、了解」

少し名残惜しいけど俺もそろそろ移動しなきゃだし仕方ないか。

「さーて、今度こそ派手に行くぜ！」  
「ねえ、一夏！」  
「わっつ？」

ピットに向かおうとするするも再び呼び止められる。

なんだ、寝癖は今朝鈴が直してくれたばかりだから大丈夫だぞ？

「こ、今度はアタシが一夏にパワー入れてあげるからちょっとソコに直りなさい！」

言っが早いか鈴は俺の顔に手を添え、爪先立ちで背伸びした。

……。

……なんだ？ 今のマシユマロのような感触……前にも一度同じのを感じた覚えがあるよーな……。

それになんだ？ この身体の奥底から何かが沸き上がる感覚は？

……よし、高まるリビドーに身を委ねて叫んでみよう。

「エクストリイイーームツ！……！」

「『至高』の『疾風』と『切り札』!？」

鈴のツッコミ通り、しかし地球ではなくお姫様の騎士キニとして覚醒ナイトしました。

俺はちゃんと『射手』と『鋼』のメモリも使うつもりだ。

ちなみに叫ぶのは巫女さんに覚醒する粘土人形の方なのは気にしないかね？

「あ、アホな事やってないでピット行くわよ！ 一夏も第一試合なんだから早くしなさい!！」

俺に背を向けて歩きだす鈴の耳は完全に真っ赤だった。

## Trick：20（後書き）

一応、篤さんは転生とか再構成キャラではありません。

以下、Trick：19の没ネタ

「シャルロット、確かにアタシ達はアンタの味方だけど一つ言っておく事があるわ」

「何？」

「同室なのは仕方ないからと・く・べ・つ・に認めてあげるけど…」

…一夏を襲ったりしたらダメなんだからね!」

「はい!？」

「いやそれは女<sup>シャルロット</sup>じゃなくて男<sup>オレ</sup>に言うべきセリフじゃね?」

「ツッコむ所ソコじゃないよね!？」

「何言ってるのよ、ありもしない事言ってもしょうがないじゃない」

「なんか凄い信頼関係だよ!」

「それもそうか……いや、鈴だったら襲う」

「むしろアタシが襲うわよ!」

「……（ダメだこの二人、早くなんとかしないと）」

なんとなく納得行かないシャルロット、原作みたく『一夏だったら……いいよ?』なんて思う余裕すらなかったのです。

。

やっぱり軌道修正の難しさとシャルロットの印象の酷さとシャルロットの方々への配慮の結果、没にしました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2226w/>

---

IS×A・T

2011年10月28日17時18分発行